

俳諧師の頓智

いつの頃だつたか、一寸はつきり判りかねるが、長崎に素行といふ俳人があつた。ひきい行脚好きで閑さへあれば暢氣に旅に出歩いてゐた。そのむかし芭蕉は頭陀袋に杜詩と山家集と普門品とを入れてゐたさうだが、素行の貧しい懐中には、いつも俳諧七部集が一冊珍ぢり込んでゐるに過ぎなかつた。

ある時田舎道で日を暮らした事があつた。ちやうど冬の最中で、寒さは無遠慮に俳諧師の背筋から懐中から入つて來た。素行はべそを掻きさうな顔をして、野道を急いだ。すると、漸と一軒の百姓家が見つかった。俳諧師は石のやうに冷い拳をあけて門の戸を叩いた。戸はなかから開けられて、襖褌つ片のやうな皺くちやな媼さんが、闇のなかからうつそり顔を出した。

「旅の者でござる。申しかねたが、一夜の宿をお借り申したい。」

素行は木の葉のやうに寒さうに身體を顫はせた。媼さんは闇を透してうそそうそ旅人の容子を

嗅ぎ分けるらしかつた。

「坊さんかの。坊さんならお泊め申すほきにの。」

媼さんは口のなかで呻くやうに言つた。

俳諧師はそれを聞き逃さなかつた。

「さうとも、さうとも。俺はその行脚坊主ぢや、坊主ぢや程によろしく頼む。」

早口に恚う言ひながら、媼さんに安心させるやうに頭巾を取のけて見せた。成る程頭は圓かつた。

素行は奥へ通されて、先づ佛壇の前へ坐らされた。媼さんは亡くなつた爺さんの回向が頼みたかつたのだ。俳諧師はてんで經文を知らなかつたので、ひきく當惑したらしかつたが、ふん氣づいたのは懐中の七部集であつた。彼は勿體ぶつた手附でこの集を取り出した。そして作者の名前を初めから順々に讀み下した。

「其角、嵐雪、去來、丈草、野坡、杉風、北枝、凡兆、支考……」

恚う言ひながら、時々思ひ出したやうに鉦を鳴らしたものだ。媼さんはお蔭で亡くなつた爺

さんが浄土に生れ代つたものやうに涙を流して喜んだ。そして暖い粥と暖い夜着を恵んでくれた。

これを讀んで、くすくす笑ひ出さない僧侶が今幾人あるだらう。彼等も皆同じやうな事をしているのだ。

結 婚 祝 ひ

ノオベル賞金の創設者と聞けた瑞典のアルフレッド・ビー・ノオベルの邸に、長年の間まめに女中頭を勤め通した女があつた。ところが、縁あつて他へ嫁く事になつた。すべての女は、きんなまづい結婚でも、獨身よりはまりましたと思つてゐるもので、これは人生といふものに對して、きの女も持つてゐる一番大なき誤解だが、この女中頭も矢張り夫を持つてゐたので、兎も角も結婚する事にきめてしまつた。

主人のノオベルはその話を聴くと、寝椅子から半分身體をおこしかけた。

「それは目出度いの、長年の間まめに勤めてくれたお前に出て往かれるのはつらいが、然し結

婚と聞いては、強て引とめるわけにも往くまい。ところで、お祝ひだて——」と主人はにやにや笑ひながら、女中頭の顔を見た。これまでは女中頭として世界第一等の顔立のやうに思つてゐるが、今見ると、花嫁として一番やくざ者のやうに思はれた。「何かお祝ひにくれてやりたいと思ふんだが、何でもいいからお前の欲しいと思ふものを言つてみるがいい。」

女中頭はノオベル家のうちで欲しいものをきつさり持つてゐた。第一に主人の財産が欲しかつた。第二に主人のフライ鍋が欲しかつた。第三に主人の寝椅子が欲しかつたが、そんなものは主人がなかなか「諾」と言ひさうになかつた。で、早速花婿の許へ驅けつけて相談する事にした。

花婿はそれを聴いて、美しい女中頭が、きつさり「幸運」を背負つて、自分の身體のなかへ潜り込むやうに思つた。

「何をお願ひしたものだらうな。」

「何をお願ひしたものでせうな。」

二人は頭をつき合はせて相談したが、漸と相談が取り纏つた時には、二人とも茶青らしい土

事をしたやうに疲れてゐた。

女中頭は主家に歸つて來た。それでもじもじしながら口を切つた。

「檀那樣、私どもの婚禮に祝つて戴きたいと思ふものが、漸く見つかりましてございますが、眞實に祝つて戴かれますのでございませうか。」

「ほんごうだともさ。『恐ろしいダイナマイト製造業者は、女中頭の口から、お手の物の爆裂弾が吐き出されやうとも怯もしないやうな身構へをして言つた。』

「何でもいいから、お前の欲しいものを言へと言つたぢやないか。」

「有難うございます。花嫁は丁寧に頭を下げた。『それでは恐れ入りますが、檀那樣のお儲けになる一日だけのお錢が戴きたうございます。』

「よからう。」と主人は二つ返事で直ぐ承知をした。『だが、勘定するのに少し手間が取れよう。』

實際勘定をするのに手間が取れた。それが爲めに十一人の書記が幾日か働かされた。そして女中頭は結婚祝ひとして二萬八千弗の金を渡された。

寄附金の請取

紐育の新聞記者フランシス・ロイブ氏が、先年亞米利加印度人の調査委員をしてゐた頃、ある日の事、見も知らぬ印度人が、其の事務室へひよつくり蒼色の燒栗のやうな顔を出した。そしてポケットから錢包みを取り出して、卓子の上に置いた。

「ここに五十弗ありますから、お請取りを願ひます。」

印度人は恚う言つて反身になつた。その金は公用金としてロイブ氏が請取るべき筈のものだつた。

ロイブ氏はその金をあらためた。そして確に請取つた由を言つたが、印度人は何か待心であるらしく、兩手を胸の上に拱んだまま、卓子の前に立ち跨がつて、一向歸らうとしなかつた。

「何か外に用事でもあるのかね。」

ロイブ氏は燒栗のやうな顔を見上げた。

「請取證を待つてゐるんです。」

印度人は厚い唇のなかから呟くやうに言った。

「何だつて請取證なんか要るんだね。」ロイブ氏は口を尖らした。「君は私があこからまたこの金を請求しやしないかでも思つてるのかい。」

印度人は肩を聳やかして言った。

「私は耶蘇信者なんです、いつかは屹度神様にお目に懸るでせうが、その折彼得は私を天國に上げる前に、此の五十弗の請取證を見せろといふに定つてゐます。その折請取證が要るから、いつて、まさか地獄のなかを捜し廻るわけにも行きませぬからね。」

「請取證を取るのに、何だつて地獄の中を捜し廻らなければならぬだね。」

「でも、貴方が地獄に墮ちなくつて、誰が墮ちるんです。」

ロイブ氏は鐵瓶のやうに湯氣を立てて怒り出したが、それでも請取證を書くには書いた。印度人はそれを持つてのつそり出て往つた。

米の廉賣に寄附金を申し出た成金達よ、成るべくなら君達も請取證を取つて置いた方がよ

からう。然もないと、彼得が屹度ぐづぐづ言ふに極つてゐるから。

原敬氏と鯛の盆

政友會總裁原敬氏が、最近北國遊説の途すがら、越中高岡の商品陳列所へ往つた事があつた。

名士といはれる人達が、恚ういふ所へ出掛けるに、記念のため何か購ひ取らなければならぬのを原敬氏はよく知つてゐた。

羽織袴で、出迎へた陳列所の關係者達は、名高い政友會の總裁が、こんな素晴らしい買物をするだらうかと興味を持つて待設けた。事によつたら陳列所の品物全部を、根こそぎ買ひ取らうとも言ひ出しはしなからうかとも思つて、内心びくびくしてゐた。

原氏は五人前一圓五十錢の煎茶茶碗を買つた。一組二圓の吸物碗を買つた。硯箱、巻煙草入、灰落し……やぐざな政黨員のやうな安物ばかり買取つた。そして正札三十圓と値段のついた七寶の花瓶が目につくと、まるで仲違ひの加藤高明氏にでも出會つたやうに、顔を反けてそつと通り過ぎた。

ふと櫛のくり盆が原氏の目にとまった。夫は田舎の村長なきの好きさうな櫛の恰好をしたもので二圓三十錢といふ札が付いてゐた。

「高橋君……」原氏は秘書役の高橋光威氏を振りかへつた。「あの盆を一つ買って置いてくれ。」
「盆でございませうか、那の櫛の恰好をした……」高橋氏は變な眼つきをして其の盆を見た。高橋氏は原氏の夫人から言ひつかつてゐる事がある。夫は原氏が旅へ出るに、いつも無益な買物ばかりするので、成るべく側にゐて留め立して欲しいといふ事なのだ。高橋氏の頭のなかに原夫人の険しい顔を思ひ浮べた。そこへのつそりやつて来たのは小林源藏氏だつた。小林氏は獨師のやうな眼付をして、一寸その盆を見たが、すぐ吐き出すやうに言つた。

「これは可かん。この櫛はまるで死んでゐる。」
「死んでたつて可いぢやないか。」強情な原氏は小林氏を尻目にかけた。「腐つても櫛といふ事がある。」

小林氏は行詰つたやうに、口をもぐもぐさせた。そこへ煎茶茶碗や、吸物碗や灰落しのやうな、安物の政友會代議士が五六人どやどやと入つて来た。そして櫛のくり盆を見るに、てんで

に言ひ合はせたやうに首をひねつた。

「これは可けませんね。幾ら何だつて總裁のお買物ぢやありませんよ。」

「それが輿論か……」原氏は髻のない口元をへし曲げるやうにして、皮肉な笑ひを見せた。「輿論なら仕方がない、それぢや買はない事にしよう。」皆は手を拍つて喜んだ。いつも總裁の言ふが儘になつてゐる彼等に對つては、こんな事で強情つ張りな總裁の言ひ分を捨てさせたのが何よりも嬉しかつたのだ。

だが、それは嫌喜びであつた。原氏は夕方宿へ着くと、こつそり高橋氏を陳列所にやつた、そして態々件の櫛のくり盆を買ひ取らせて来た。高橋氏は原夫人の険しい顔を思ひ浮べながら二圓三十錢を仕拂つた。

骸骨の議員

カンサス出の米國上院議員に、インガルスといふ男がある。爪立ちしたら、天國にでも手が達きさうな背高で、おまけに酷い瘦つびいだが、それでも地面の事が氣になるかして、いろいろ

ろ郷里の事に骨折るので、カンサスでは評判のいい男である。

この男の近所に、大の仲よしのお醫者がゐる。インガルスは打つて變つた肥れた男で、診察のひまびまには、静な書齋でエマアソンの論文を読むのが何よりも好きであつた。ところが困つた事にはこのお醫者がエマアソンを讀まうとするに、極つたやうに其處へ飛び込むで来て邪魔立する者がある。外でもない、ちんびらな新聞賣子で、醫者エマアソンの知らない色の事が載つてゐる新聞を押賣しに来るのだ。醫者はそれが蒼蠅くて仕方がなかつた。

ある日の事、インガルスは醫者の診察室に背高な身體を現した。別に心の臟が悪くなつたので、診察を頼みに来た譯でも無かつた。米國では心の臟はオペラ袋同様女の持物になつてゐるので、背高の議員はそんな物は持つてゐなかつた。醫者は友達顔を見るとき、例のやうに新聞賣子がうるさくて、しみじみエマアソンが讀めないのが何よりも残念だと言をした。

そこへ、又しても新聞賣子の入つて来るらしい足音が聞けた。醫者は早速の氣轉で押入から標本用の人間の骸骨を引張り出し、それをちやんと椅子に腰かけさせて、自分達は何食はね顔で次の室に隠れてゐた。

新聞賣子は扉をあけて、勢ひよく診察室に入つて来た。そして毎日の事なので、其邊に氣も注げないで、づつと卓子の前までやつて来た。見るに、いつもの椅子には、肥た醫者の代りに、骸骨が一人腰をかけて、窪んだ眼で新聞賣子を見詰めたが、白い齒をむき出しにけらけら笑つてゐた。賣子は聲を立てて泣き泣き外へ飛び出した。

醫者は腹を抱へて笑ひこけた。眼からは涙さへにじみ出してゐた。背高の上院議員は流石に可哀相になつて、後を追つて表へ出た。そして御機嫌取りに賣子の手から新聞を一枚買ひ取らうとした。賣子は首を掉つて、さうしても新聞を呉れようとしなかつた。

「そんなに着物を被たつて欺されるもんかい。賣子は相手を見上げながら、べそを掻き掻き言つた。」「たつた今骸骨の所を見ちやつたんだもの。」「

新發明物消毒法

すべての公開圖書館で、管理者が頭を悩ますものは、圖書の購入や、保存ばかりではない、その他に圖書の消毒といふ一大事がある。尤も數多い圖書館の管理者には、書棚に樟腦や、ナ

フタリンをちよつぱり包んで、それで結構消毒の目的が達せられてゐるやうに思つてゐる向もあるが、そんな事では何の役にもたちさうにはない。

書物を讀まうといふ人達には、肉體的にも精神的にも病人がよくある。さういふ人は、書物の小口に目に見えない病毒を残して往くので、これを何う始末するかが、圖書管理者の問題なのである。サヴァナオラのやうに、そんな書物は火をつけて焼いてしまつたら、一番面倒がないのだが、さうさうきつぱりした處置も取り兼ねるから困るのだ。

東京のある大きな私立圖書館に、老人の管理者があつた。先日職をやめて書肆を開業したさうだが、圖書館に居る間は朝から晩まで、此の書物の消毒にひきく頭を使つたものだ。

餘程氣になつた見えて、ある時わざわざ懇意な醫者を訪ねて訊いてみた。

「先生、書物にへばりついてゐる毒つてのは、一體どんな物なんですね。」

醫者は老人に了解めるやうに話すには、なかなか骨が折れた。大抵の眞理といふものは、老人のために、拵へてない場合が多かつたから。

「それは微菌さ。手つ取り早やく言つたら眼に見えない蟲だね。」

醫者は恚う言つて、牧師のやうに胡散臭い顔をした。

「蟲ですか、眼に見えない……」

老管理者は慌て、老眼鏡を鼻の上に押しあげた。そしてちつと手を組んだ儘考へ込んでゐたが、暫くすると、立派な消毒法を思ひついたので、その儘醫者の家を飛び出して來た。

老管理者は途で金物屋に寄つて、金槌を一挺買つて歸つた。そして圖書庫に入ると、手垢と摩埃に塗れた書物を、一冊づつ取り出しては、いやといふ程叩きつけたものだ。

お蔭で書物は縁が切れたり、表紙が凹んだりして泣き出しさうな顔になつた。やつと夫に氣づいた圖書館の保護者が理由を訊くと、この勇敢な老管理者は、勝ち誇つたやうに、禿けかかつた前額をてかてかさせた。

「はい、消毒しましたので。怖ろしい微菌とやらを、これでこつ酷く擲りつけてやりましたよ。」と言つて、懷中から大事の金槌を一寸取り出して見せた。

日増しに暑くなるにつけて誰もが山を想ひ、海を想ひ、旅を想ふやうになつて来た。去年の夏の事、英國のリヴァプールからポストン通ひの汽船に、ポストンで名高い牧師のフリッツ・ブルックスとダクタア・エリスとブルックス・ヘルフォウドの三人が不思議に落合つた事があった。一體牧師だの僧侶だのといふものは、立派な道を説いてる癖に、案外胸の狭いもので、傳道大會といったやうな會合の外には、滅多に顔を合すものではない、この世でも然うだから、無論天國では一緒になれる筋のものではなかつた。

ちやうど日曜日のごときなので、船のなかでも集會があつた。船長は三人のなかで誰か一人にその日のお説教をして欲しいと頼んで来た。一體船のなかといふものは、お説教をするには打つてつけの場所柄で、附近に立聴きをする神様は居ないし、幾らお説教が拙かつたところで、聴衆は耳に手をやつて、波のなかに飛び込む譯にも往かないしするから、牧師は落つき拂つて、いつもの三倍も長説教が出来ようといふものだ。

ところが、ヘルフォウドは眞つ先きに首を掉つた。

「私は夏休み中、日曜日毎に缺かさずお説教をしたので、すっかり草臥れちやつた。さうか今

日一日だけは休ませて貰ひたいもんで。」

恚う言つて、俳優のやうに眞から草臥れたらしい顔つきをして船長を見かへした。

船長はブルックス牧師の方へ向き直つた。ブルックスはエリス老人の方を指さした。

「そちらにエリスさんがいらつしやる。先輩の方を差し置いて、私どもが出る幕ぢやありません。」

椅子にもたれた儘、うとうと居眠つてゐたらしいエリス老人は、吃驚したやうに眼をあけた。

「戯談言つちやいけない。皆は貴方のお説教を聞かうと思つてるのだ。私のやうな老人が……」

きつぱり跳つけるやうに強く手をふつたが、それでも此船がこのまま天國の港に船がかりするのだつたら、老人は皆を押退けて、誰よりも先に埠頭の土を踏んだに相違なかつた。

「夫ぢや、仕方がありません。船長は悲しさに言つた。

「あなた方が揃ひも揃つてお説教をして下さらないと、この汽船には神様のお慈悲は先ないものと思はなくちやなりません。恚う言つて船長は大きな腕を三人の鼻先でふり廻した。

船が無事にボストンに着くか怎うかは、唯私の此腕に頼る外はありませんぞ。」
船は無事にボストンに着いた。三人の牧師は乗客のなかに紛れて、船から棧橋へ、三四蛙のやうな腰つきをしてびよいと跨がった。

鼻

糞

生前正岡子規と懇意だった人の話によると、子規はその頃出てゐた「めざまし草」のいふ文藝雑誌の會合で、偶に森鷗外氏の宅に来ると、定つたやうに座敷のなかに寝そべつて、頬杖をついたものだ。

「おい、紅葉君、ちよいと其處の硯を取つてくれたまへ。」

「どうかするに、側にある尾崎紅葉に用事を言ひつけたりする。紅葉は氣取屋で、加之に子規よりもつと先輩の積りで居たから、夫が癩で癩で堪らなかつたらしい。」

そればかりか、子規は俳句か何かを考へる時には、よく指先で鼻の孔から鼻糞を穿くり出したものだ。そして掌面で丸薬のやうに圓めると、弾き玉か何ぞのやうに一々夫を指先で四邊

に弾き飛ばしたものだ。

汚い弾き丸はある時は禪僧のやうな露伴の懷中に飛び込み、ある時は山狗のやうな綠雨の襟首に滑り込み、またある時は氣取屋の紅葉の鼻先きを掠めて飛んだ。そんなこんなが餘程機嫌を悪くしたと見えて、紅葉はその後あまり鷗外氏の集會に出なくなつたさうだ。

鼻糞といへば、越後の良寛上人がある時、濃茶の會へ招かれて往つた事があつた。相客が餘所行きの上品な言葉で、風流話に無中になつてゐる間に、良寛はひっそり猿きちのやうなきよんとした顔をして、指先で頬と鼻糞をほじくつてゐた。

さうかうするうちに、濃茶が廻つて來さうになつたので、良寛は急いで掌面の鼻糞を圓めにかかつた。そして夫をこつそり膝の左側に置かうとするに、そこに坐つてゐた男は、じろりと尻目にかけて怖い顔をした。良寛は慌てて夫を拾つて、今度は膝の右側に置かうとした。するとそこに坐つてゐた男は、一寸眉をしかめて、口もをへの字形に歪めた。上人は泣き出しさうな顔をして、またその丸薬を手に取りあげた。

だが流石に長く禪で苦勞した程あつて、上人はその一刹那鼻糞は鼻の孔から取り出して來た

敵と踊る

ものだといふ事を思つた。佛のものは佛に返さねばならぬ世の中だ。鼻のものは鼻に返した方が一番無難である。上人は丸薬をその儘無理やりに鼻の孔に押し込んだ。二つの孔から取り出して来たものを、一つの孔に押し返した所で、そんな事位で飽れつ面をする鼻でもなかつた。上人は舌鼓を打ちながら濃茶を飲んだ。

佛蘭西の歩兵軍曹にジャンといふ男がゐる、膽の太いしつかりとした、加之に教育のある男で、佛蘭西語と同様獨逸語をも自由に操る事が出来た。

一體語學が達者に出来るのは得なもので、獨逸のゲーテは、他の國の語を一つ覚めるのは、やがて一つの世界を殖やすやうなものだと言つたかに覺れてゐる。世界を一つ殖やすのも面白い事はないが、それよりも眞實なのは、語學は一種の道樂で、これを習つておけば、自分の道樂心を満足させる色々な惡戯が出来るといふ事である。

ある眞夜なかの事、ジャンは敵の偵察を言ひつかつて、獨逸軍の暫壕から、漸々十米突はか

りの間近まで覗ひ寄つた。するに、何處かにこそ人の動く氣配がしたので、ジャンは蜥蜴のやうに地面に腹をすりつけた。だしぬけに低い押し潰すやうな聲で呼びかけるのが聞えた。耳をすますと半熟の佛蘭西語である。

「おい、何だつて、そんなに靜肅してゐるんだい。僕は先刻から君がやつて来るのを見てたんぢやないか、するに今地面に這ひ屈んだね。君を撃つと言やしまし僕はバヴァリア生れだよ。」

「さうか、今晚は。」とジャンは立派な獨逸語で返事をした。

「おいおい。」暫壕のなかからまた聲が掛つた。「君は獨逸語が喋れるんだね。一寸待つてくれ今朋輩を起して来るから。丁度今は士官が居ないから一等都合がいいんだよ。」

ジャンは幾らか心配な氣もしたが、それでもじつと待つてゐる事にした。暫らくするに、バヴァリア兵は獨逸式の軍服と軍帽とを持つて出て来た、そして夫をジャンに被せて、自分達の暫壕内に連れ込むだ。

そこでは浴びる程うまい麥酒を飲む事が出来た。ジャンは酔つた紛れに變な腰つきをして舞踊を踊つた。バヴァリア兵は小聲で歌を唄つた。いよいよお別れになると、彼等はいろいろな

土産物をジャンに呉れた。

「今度またおいでよ。口笛で合圖して呉れば、鐵砲なんか撃ちやしないよ。」
 彼等は十年の友達にでも別れるやうに言つた。「僕達はバヴァリア人だよ。佛蘭西は大すぎるんだが、止むを得ず戦争してゐるんだからね。」

博士と小學生徒

詰込み主義の鸚鵡流の教育では、日本の學校は何處にもひけを取らないが、何事にも自由な米國でも、教育だけはまた別だと思つて、近頃悠ういふ話があつた。

ある小學校の校長は、毎朝授業の始まる前に、定つたやうに生徒を講堂に集めた。そして高い教壇の上に鉛筆のやうに眞つ直に衝立ちながら咽喉一杯の聲を張りあげて訊いたものだ。「皆さん、あなた方は悠うやつて大勢講堂に集まつてゐますが、萬一ひよつとした事で、この建物から火が出た時には何うしますね。」成る程學校の建物は、校長が火を氣遣ふやうに粗末な木普請で、そこらの柱などは儂麻質斯でも思つてゐるらしく、イヒチオウルのやうな茶色の藥

で塗りくつてあつた。

夫を聞くと、生徒は讚美歌でも唱ふ折のやうに、一齊に聲を揃へて返辭をした。

「先生、私どもはみんな腰掛から起ち上ります。そして一先つ廊下に出て、遠くないで順々に外へ逃げ出します。」

校長は満足さうにぐつと顎をしやくつた。彼は悠ういふ風にさへ教へて置けばいつこんな事が起きても生徒は満足に避難出来るものと思つてゐるのだ。

ある日の事、その學校へヴァン・ダイク博士が訪ねて來た。博士は聞けた著述家だといふので、校長は生徒のために一寸したお話を頼んだ。

ヴァン・ダイク博士は、いつも校長が鉛筆のやうに衝立つてゐる教壇に立つた。そして落つきのある聲で言つた。

「皆さん、私は博士ヘンリ・ヴァン・ダイクといふ者です。私が今ここに立つて皆さんのためにお話をすると言つたら、皆さんは何うしますか。」

博士は悠う言ひさして、慈悲の籠つた眼で、じつと生徒を見おろした。

生徒は家鴨のやうにぎやあぎやあ聲を揃へて言つた。
 「先生、私どもはみんな腰掛から立ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遠くないで順々に逃げ出します。」

ヴァン・ダイク博士は夫を聞くに、僕威質斯に羅つたやうに痛さうに顔をしかめた。教壇の下では、校長が火事に出會したやうに、眞つ赤になつて顫へてゐた。

卵を一つ

ある時、發明家のトーマス・エジソンの實驗室を、若い婦人客が訪ねて來た事があつた。すべて天才の事業を認めて、心より夫を崇拜するものは、男よりも女に多いものだ。こんな時に、男はさうかすると、嫉妬に驅られて、けちを附けたがるものだが、女は割合に素直な心を持つてゐる。

エジソンは美しい女客の爲に、自分が今實驗に取りかかつてゐるいろいろの仕事を解り易く説き聞かせた。丁度夏の午前の事で、女客は顔の汗を拭き拭き感心したやうに幾度か首を掉つて

聞き惚れてゐたが、暫らくすると發明家の顔を振り向いて訊いた。

「承はつてみますと、何もかも結構だらけですわ。これまで先生には、こんなに幾つもの立派な發明をなすつて居らつしやりながら、まだ何か知ら仕遂げてみたいと思つてゐらつしやる事業がおありになりませうか知ら。」

「有りますともさ。」發明家は女客の顔をじつと見詰めながら言つた。「もしか貴女が誰にも洩らさないつて事を約束して下さい、私が取つて置き希望をお話してもよい。」

「お約束致しますとも。屹度誰にも話しは致しませんわ。」

若い女客は幾らか顔を赧らめながら身體を乗り出すやうにして言つた。女にしてみれば、この偉い發明家が何か知ら内證事を、自分にだけ打明けて呉れるといふ事が、何よりも嬉しかつたのだ。「私承はる事が出来たら、それが一日も早く成功するやうに神様にお願掛しますわ。」
 「有り難う、厚くお禮を申しておきます。」エジソンは眞面目な口を利いた。そして他人に立聴でもされるのを氣遣ふやうに、幾らか聲を落して言つた。「私の行つてみたいつて事はね、御覽なさい、那處に煽風器が廻つて居るでせう……」と部屋の隅つこにある煽風器を指さした。「あの

煽風器に卵を一つ投げつけてみたいんです。唯それだけでさ。」

顯微鏡の寄附

富豪アンドリウ・カアネギイの知人で、獨逸へ渡つてエナ大學で名高いヘツケル教授に弟子入りしようといふ男があつた。幾らか補助金をも貰つてゐるので、出發前に一度この富豪を訪ねて、暇乞ひの挨拶をした。

カアネギイはヘツケル教授の名を聞くに、眼を光らせた。

「ヘツケル！。ヘツケル教授といへば名高い學者だ。それに就いて一つお頼みがあるんだが、もしか彼地で教授にお會ひだつたら、記念のために何でもよろしい、那の人の手蹟が貰つていただけまいか知ら。」

「よろしい、承知しました。」

その男はヘツケル教授の従弟でもあるやうに安請合に承知した。そして教授や自分達のやうな、學者の手蹟を集めようといふカアネギイは、まあ何とした物の解つた爺さんだらうと思

つて、じつと富豪の顔を見つめた。だが、實をいふにカアネギイはその折にはもうヘツケル教授の事も自分の眼の前にある客の事も忘れて、鐵の値段でも胸算用してゐるらしくあつた。

その男がエナ大學に着いて、暫くすると肝腎のヘツケル教授から手紙がカアネギイのところに達した。鋼鐵王は急いで封を切つた。なから零れ落ちたのは、かねて待ち設けたヘツケル教授の紛れない手蹟であつた。

ツンプト式顯微鏡 一個

右エナ大學植物研究室へ御寄贈下さつたに就きましては厚くお禮を申し陳べます。

エルネスト・ヘツケル

アンドリウ・カアネギイ殿

手蹟には恚う認めてあつた。

カアネギイは釘抜きで鼻先を捻ぢ曲けられたやうな顔をして苦笑ひをした。でも、次ぎの瞬間には執事と呼んで、ツンプト式顯微鏡を買ふだけの金子をエナのヘツケル教授あてに送るやうに言ひつけるのを忘れなかつた。

そこらの富豪達もよく聞いて置くがいい。カアネギイのする事に、何一つ間違つた事はこゝろがないが、安心なのは學者なき餘り友達に持たない事である。

愕堂の日本料理談

佛蘭西通の稻畑勝太郎氏が、こないだ何かの用事で尾崎行雄氏を訪ねた事があつた。談話が済むと、尾崎氏はお客を連れて、自分の宅の食堂に入つて往つた。

「別に何も無いが、女房の手料理といふところを味はつてくれ給へ。」

その口振から察すると、テオドラ夫人の庖丁加減が大分自慢らしかつた。

實際テオドラ夫人の手料理は美味かつた。尾崎氏は肉汁で汚れた胡麻白の口髻を捻りながら料理についていろいろな事を話した。

「一體これまでの日本料理は、見た眼にはなかなか美しいが、味はつてみるに一向うまくありませんね。」と尾崎氏は聴衆が少いのを物足りないやうに、卓上に並んだ薬味臺や洋酒の壺をじつと見比べた。「あれは徳川氏が自分の政策上から、あんな料理法を拵へ上げたので、一體吾

の食べる魚肉といふものは、皮肉の間が膩が乗つて一番うまいものなんです。ところが、徳川氏は、諸大名を肉體的に衰へさせるには、そんな結構な所を食へさせてはならないといふので、今に傳はつてるやうな見た眼に美しい料理法を獎勵する事になりました……」

「成程面白い御觀察で……」稻畑氏は感心したやうに小首を傾けた。

「其の政策はまんまと當つて、諸大名は見た眼の美しい料理ばかりを好くやうになつた結果、肉體の力が衰へて、野心も何も無くなつてしまひました。」と尾崎氏は自分でも其の觀察の奇抜なのに感心したやうにこんと軽く卓子の上を叩いた。ピフテキは吃驚したやうに皿のなかで顛へた。「ところが、妙なもので、其の徳川氏自身がいづの間にかそんな料理に舌鼓を打つやうになつたものですから、段段精力が衰へてとうとう自滅するやうな運命になりました。」

「しまするに……」稻畑氏は肉刀をがちかち言はせながら調子を合はせた。「日本人を新しく拵へ上げるには、今迄の料理法から遠ざかつて、皮肉の間を食べるやうにしなければなりませんね。」

「然やう然やう。」尾崎氏は氣に入つたやうに頷いた。そしてテオドラ夫人の手料理は、三りわけ

其の點によく氣を注いであるやうに、猫のやうな口もとをして勢ひよくピフテキに囁りついた。結構な議論で、尾崎氏としては少し出来過ぎてゐるやうだが、しかしこんな結構な議論を人前で喋り散らすなどは考へ物で、もしかこれが反對黨の原敬さんの耳にでも入つて、三度三度皮肉の間を食べられでもしたら、尾崎氏も困る事になりはしないだらうか。さかく内證の事内證の事。

停車場の演説

グラッドストオンといへば、大臣を勤めてゐる時も、止めてゐる時も、いつも人氣のあつた政治家で、偶に旅行でもする時には、怖ろしく澤山な新聞雑誌の記者が一緒に蹤いて往つたものだが、この偉大な政治家は、その執れをも満足させて歸したものだ。

ある時こんな事があつた。それはグラッドストオンが、何かの用事で倫敦からエディンバラに出掛けた旅行中の事で、その折はさういふものか、新聞記者といつたら、某社の記者がたつた一人隨行してゐるに過ぎなかつた。

汽車が途中のある驛につくと、停車場にはこの偉大な政治家を一目見ようといふ、物好きな土地の人が一杯に待つてゐた。無精な日本の政治家、例へば原敬氏のやうな人だつたら、動物園にゐる西伯利産の狐のやうに、窓から白っぽい頭を覗けて、狡さうに一吋會釋をする位に過ぎなからうが、この英國の首相は態々入り口に出て来て、出迎人を相手に演説を始めた。

土地の人は、思ひがけなくこの政治家の演説が聞かれるといふので、ぎつしり汽車の前に押しつめて来た。田舎の人達の事とて、胃の腑の詰まつてゐる代りに、頭のなかは空罐のやうに空つぽだつたから、演説は一言一句その儘に入つて往つたが、几帳面な汽車の時間表は、首相の演説にも少しも容捨はしなかつた。汽車は呆つ氣にとられた出迎人をプラットフォームに残して、さつさと出て往つた。

それでもグラッドストオンは演説を止めなかつた。今度は側に立つてゐる某社の記者の方へ向き直つて、持前の雄辯を揮ひ出した。幸ひ記者は速記を心得てゐたから、少しも狼狽へなかつた。あたふた手帳を取り出して、瀧のやうな首相の雄辯をそのままそつくり書きとめる事が出来た。

花嫁を忘れる

記者の速記はその盛登る日の新聞紙に現れた。停車場で政治家の演説を聞きさした地方人の驚きは大了たものであつた。——グラッドストーンは恚ういふ風に、通信機關を巧に利用する事を知つてゐる人だつたから、氏が公的生活から隠退するに、ある通信社などは、觀面に二萬圓ばかり収入が減つたといふ事だ。

學者や發明家なさいふ輩は、一事に熱中して心を奪はれる結果、さうかすると、うっかりして身邊の事を忘れるのが多い。忘れないからといつて、學者として立つのに少しの差間もないが、忘れた方が愛嬌になる場合が多い。

發明家トオマス・エディソン(といふエディソンは顔をしかめて、自分は發明家なさいふそんな偉い者ぢやない、言はば工夫家さと言譯をするかも知れない)も實は其の一人だつた。エディソンは結婚すると、直に花嫁を連れて新婚旅行に立つたが、二週間ばかり靜かな田舎を歩き廻つて、漸つて都へ歸つて來た事があつた。

汽車が停車場に着くと、此發明家は急いで廊下に飛出した。そして何事かを考へ込んでゐるやうに、兩手を胸の上に拱んだ儘、少し俯向き加減に市街へ差しかからうとした。すると思ひがけなく

「おい君、エディソン君。」と呼びかけた者がある。發明家はひよいと顔をあげてみた。前には友達の一人在立つてゐた。

友達は笑ひ笑ひ言つた。

「君。何か忘れ物をしてやしないかい。」

「忘れ物?」

エディソンは立ち停つて考へ込んだ。そして先づ手をあけてそつと頭へ觸つてみた。仕合せと帽子はちやんと頭の上に載つかつてゐた。今度は兩手を洋袴の隠しに突込んでみた。隠しには何一つ無かつたので、はつとなつたが、よく考へてみると初めから何一つ入れてはなかつたのだ。

「何にも忘れ物なぞ無いやうだが。」

「有るだらう。友達は幾らか戯談のやうに言つた。何か有る筈だが。」
 「無いよ。何にも無いよ。」エディソンは意地になつてきつぱりと言ひ切つた。
 「それぢや那處を見給へ、大事の忘れ物が笑つていらつしやる。」
 友達はエディソンの肩越しに停車場の方を指さした。發明家はのつそり後方をふり向いてみた。そこには此方向きに廊下に立つてゐる花嫁御の姿が見えた。花嫁はここに顔で言つた。

「あなたはほんとうに思ひやりのあるお方ね。」

「失敬々々。」エディソンは慌てて後がへりをした。

「つい考へ事に氣を取られちやつてね、こんな事は初めてだよ、これから屹度氣をつける。」

「そのお言葉も三日位は利くでせうよ、さあ、御一緒に参りませう。」

花嫁は自分の存在を證明するやうに、わざと邪慳に良人の腕をとつた。發明家の花嫁はひきずられるやうに躓いて往つた。

だが、實をいふと、女房は三日に一度は忘れた方がいゝやうだ。すると、エディソンの知ら

ない色々の事が發明出来やうといふものだ。

子役の粗忽

今道頓堀の中座で演つてゐる「故郷飾錦伊達織」伊達家奥御殿の場に鶴千代丸に扮してゐる實川延寶と、千松に扮してゐる中村芝藝雀といふ子役が二人ゐる。

いつも奥御殿の場になると、子供心にも競争心を起して、一生懸命に藝を勵むので、見物衆も思はずほろりとさせられてゐるが、八日の演出には、子役の手には殆ど持ち切れない程の思ひもかけぬ大事件が起きた。

それは外でもない、延寶の政岡が風爐先きの屏風にひしと身を寄せて忍び泣きをしてゐると「稚れども天然に太守の心備はつた」筈の延寶の鶴千代が、この頃の寒さに、つい堪へかねて小便が仕たくなつた事だ。

鶴千代は政岡の方に氣をかねながら、押し潰したやうな泣聲を立てた。
 「おつ母あ、小便がしたい。」その日は河内家の總見があつたので、肝腎の阿つ母は皆と一緒に

場ばに坐まつて、惚々ぼつぼつと吾兒わがこの藝げいに見みられて、夢中むちゆうになつてゐた。

「おつ母ははあ、小便せうべんが仕したい。」

鶴千代つるぢやうは二度にどまで慙いう言いつたが、つい堪こへきれないで、ちやんと脇息わきいせに凭もたたまま、袴はかまのなかに小便せうべんを漏もらした。袴はかまは言いふまでもない事こと、美しい衣裳いさう小切せきまでしつほり濡ぬ通とつてしまつたが鶴千代つるぢやうはその儘まま平氣へいけいな顔かほで押通おしとしてゐた。

幕まくらが締しまるに、夫おつに氣きづいた母親ははおやは、延寶えんぽうを連れて河内家かうちんけの部屋へやへ謝あやまりに往いつた。

「親方おやかたどうも相濟あひまみません。幕合まくあひに私わたしが氣きをつけるのを忘わすれたんですから。」

かう言いつて母親ははおやが闕際けつげいに額ぬかを押おしつけるに、延寶えんぽうも小便せうべんに濡ぬれた大守おほしの着附きつけのままで、叮つ嚀ねいに栗くりのやうな小こさな頭あたまを下くだげた。

するに、先刻さうごくから子供心こどもごころに朋輩ともだちの上うへを氣遣きづつて、こつそり後あとについて來た千松ちまつ役やくの芝藝しげい雀すずはいきなり前まへへ飛び出でして、鼠ねずみのやうに疊たたの上に小こさくなつた。

「親方おやかた、かんにんしとくなはれや、小便せうべん仕したのは延寶えんぽうさんやおまへん、私わたしだすよつてな。」

芝藝しげい雀すずは主従しゆじゆうで勤こめた舞臺まいたいの心持こころもちを忘わすれないで、部屋へやにかへつても、まだ主人しゆじんの身代みしろりにな

らうとてゐるのだ。

夫おつれを聞きくと、延寶えんぽうは兩手りやうてを拍たたつて感心かんしんした。

「よう言いつた、芝藝しげい雀すず、その心持こころもち。その心持こころもちを忘わすれるんぢやないぞ。」

お蔭かげで芝藝しげい雀すずは面目めんめくを施ほして歸かへつたが、延寶えんぽうは今一人いまひとり褒めなければならぬ子役こやくのある事ことを忘わすれてはならない。夫おつは粗相そそうをした延寶えんぽうで、小伊こいがしたくなつても、じつと坐まを立たたないで、その儘まま袴はかまのなかに漏もらして、そ知らぬ顔かほをしてゐたところに、確たしかに五十四郡ごじゅうしよくの大守おほしたる賈目がめがある。せいぜい粗相そそうをする事ことである。

人 相 見

少い時わかいときには誰たれしも自分じぶんの身みの方向ほうきやうに迷まよふものだが、アメリカのある少年せうねんが、自分じぶんにはどんな職業しごくが向むいてゐるか知しらぬ、色々いろく思案しあんの末すまが、よくある慣なひで人相見じんさうみの處ところに出でかけて往いつた事ことがあつた。

人相見じんさうみはしかつべらしい顔かほをして、少年せうねんに色々いろくの事ことを訊きいた。いづれも人相見じんさうみを見るののに聽き

ておかなければならぬ事かも知れなかつたが、中には何うでもよからうと思はれるやうな事まであつた。それは

「お前さんには姉さんがゐるかね。齡は幾つなの。」

と訊いた事で、姉があらうとあるまいと、その姉が幾つにならうと、自分の人相に關係もない事だと思つたので、少年は夫には返事をしなかつた。

質問がすむと、人相見は少年の額を押へてみた。次ぎにはまた頭品を押へたりした。そして卓子に兩臂をついて、じつと頭を抱へて、暫らく考へ込んでゐたが、やつこの事で次のやうな検査書をかいてくれた。

「貴殿は世間並の人となりなるべし。卓抜のところは少しも見えず。才氣なければ、人の長たる事思ひもよらず。吾が力を恃むほどの自信もなし。かるが故に人の上に立たんなき、身に過ぎたる事に志すべからず。萬つ吾が程を知りて、分に安んじなば身も安全なるべし。」

少年はそれを讀むで、一時がつかりしたらしかつたが、夫でもせつせと精を出すに越した事はない筈だ、一生懸命に仕事を勵むだ。すると、不思議な事に、ぐんぐん出世して、吾と吾

が力を恃む事が出来るやうになり、安心して人の長になる事も出来るやうになつた。この少年は誰あらう。今米國造船總監として非凡の手腕を揮つてゐるチャアルズ・シユワツプ氏其人である。

この書の著者がある時大和の久米寺に詣つたことがあつた。本堂の部落格子につかまつて内陣を覗き込むでゐると、後ろから

「どうです、一つ手相を見せて頂けまへんやうか。」

といふ聲がした。振りかへると、お札賣の爺さんであつた。

私は掌面を爺さんの鼻先につきつけた。爺さんは狗のやうにうそを嗅ぎまはつてゐるが、「あんさん、よろしおまん手相が。株を買ひなはつたら屹度上りま。縁談やつたら急ぎなはらん方がよろしおますが、事によつたら國會議員になんかはるかかも知れまへんぜ。」

丁度その頃議員の選挙期だつたので、爺さんは思ひ出したやうにこんな事までつけ足した。おかげで、著者は二十錢銀貨を奮發させられた。國會議員になるには廿錢位が相當だと思つてゐたのだ。——ところが、いつまで待つてもなりさうにはない。

桃の實

海軍——學校の校長F中將が、大橋乙羽がまだ存命當時、道連れになつて、一緒に米國を横切つた事があつた。

ちやうど桃の實の熟れる頃で、果物好きな乙羽は、汽車の窓から桃の實をしこたま購ひ込むで、次ぎから次ぎへと止め度もなく貪り食つた。そして口に残つた核子は一頻りしやぶり通した後で、猿のやうな口もごをして、床の上に吐き出して素知らぬ顔をしてゐた。

それを見た乗合の亞米利加人は、みんな不愉快な顔をした。なかにも婦人客は神様が接吻を噓ごのために特別きやしやに拵へたらしい唇を、邪慳に押し曲けて、輕蔑みきつた眼つきをして、この黄いろい肌日本人を見た。幾度か西洋に渡つて、あちらの風習を知りぬいてゐるF中將は、はらはらして乙羽に耳打をした。

「大橋君、君が桃の核子をみんな床の上に吐き出すので、毛唐め、あんなに機嫌を悪くしてゐるよ。」

「何だつて機嫌を悪くするんです。」

乙羽は桃を口一杯に頬張りながら言つた。

「それがね、恚うなんだ。」

中將は噓を吐く者に附き物の、わざと氣取つた口ぶりをして言つた。それによると、すべて西洋人は汽車のなかで果物を食べる折には、食べ残した核子は、一一克明に窓から外へ投げることにきめてゐる。投げられた核子は、芽を吹き花を開いて、幾年か後には、鐵道の兩側は美しい花園となりおまけに果物園となるので、せれ程土地の人のためになるか知れないといふのだ。

「成程な。」

乙羽は胃の腑の底から感心しきつたやうな聲を出したが、暫らくすると、恥しきうにそつて手を伸ばして、床に吐き散らした桃の核子を、一一拾ひ取つては窓の外に投げ出した。

旅行から歸つて、暫らくすると、F中將は乙羽から「米山歐水」といふその折の觀光記を受取つたが、別に開けても見ないで、その儘本棚の隅つこに投り込んでおいた。すると間もなく

乙羽も亡くなつてしまつた。F中將は記念の「米山歌水」を取り出して、一寸表紙の埃を弾いて読みかけてはみたが、別に軍人を天使のやうに書いてもなかつたので、其儘打捨らかして置つた。すると、この頃になつて、中將は自分の子供が、西洋人は汽車で果物を食べるに、核子は皆窓から捨てる事になつてゐる。あちらに花園や果物圃の多いのは、その故だといふ事を話してゐるのを聞いた。

「誰にそんな事を聞いたね。」

中將は吃驚しながら訊いた。

「誰にだつて。ちやんと教科書に載つてますよ。」

子供は得意さうに答へた。

中將は慌ててその教科書を取寄せて見た。それには乙羽の「米山歌水」から抜書された文章が立派に載つてゐた。

「嘘だ、嘘だ。みんな俺の嘘だからね。」

F中將は早速文部省に掛りの人を訪ねて、恚う言ながら強てその文章の取消を頼んだ。

「ほんごに窮屈な世間だ、嘘もろくに吐けないんだからね。」中將は文部省の玄関を出る時、一話のやうに呟いた。——實際窮屈な世間だ、眞實の事の言へない世の中に、嘘が吐かれやうがないのだから。

十二種の新聞を読む小僧

今はむかし、米國のアイオワ州、パノラの町のさる銀行支店に給仕を勤めてゐた十五歳ばかりの少年があつた。恐ろしくこまめな性質で、朝はやく起きると、ぢきに床を掃除する。掃除がすむと、今度はせつせと雑巾がけをする。それから暖爐を焚きつけ、窓硝子を拭き、眞鍮製の欄干を拭き込む。拭いて拭いて重役の頭のやうにびかびか光り出すまでは少しも手を休めない。

室のなかの掃除がすむと、給仕はいきなり表へ飛び出して、街道を掃除する。雨あがりの道に水溜が出来てゐると、附近の土をならけて夫を埋合はせ、町の人通り易いやうにする。——恚うしてせつせと働いて、一週に三弗の給金を貰ふ外には、別に誰からお禮を言はれるのでも

ないが、給仕は少しも不足の顔を見せなかつた。

その一週三弗の給金で、給仕はいつも素晴らしい買物をする事に決めてゐた。素晴らしい買物といふと、算盤高い今の人は真ぐ船株か、鶉の卵かを聯想するらしいが、給仕の買ったのはそんなけちな物ではなかつた。亞米利加のいろんな市から出る週間新聞の主だつたもの十二種ばかりだつた。

「何だつて、そんなに週刊新聞ばかり買込むのだね。」

ある時、同じ銀行の貯金掛りが恚う言つて調弄ふと、給仕は伶俐さうな、くるくるした顔をあげた。

「廣い世界のいろんな事が知りたいからなんです。パノラの町は私にまつて餘り狭すぎるんです。」

夕方銀行の仕事が済むと、給仕は自分の室に入つて、その十二種の週刊新聞に氣も心も吸ひ取られたやうにじつと讀み耽つたものだ。そして狭いパノラの町で、こんなことが起きやうがそれには少しも頓着しなかつた。

給仕は成長くなるに連れて、ぐんぐん出世をした。タフト氏が大統領をしてゐた頃、この給仕を大蔵省の秘書に援擢しようとしたが、給仕は首をふつて承知しなかつた。その人こそシカゴの有名な銀行家ジョチ・レイノルツ氏で、今では紐育の銀行を除いては、米國第一の大資本を有つてるシカゴ某銀行の頭取である。

仲麿と背中合せ

東京は赤阪一つ木のT氏の邸を、表口から入つて右に、高さ五尺ばかりの古い石碑がある。碑の文字は雨風に打たれて幾らか傷んでゐるが、誰の眼にも

安部仲麿塚

といふ五文字だとは直にわかる。

仲麿は誰もが知つてゐる通り、唐土の空でビスケットのやうな乾いたお月様を見ながら、

「三笠の山に出でし月かも」

と歌つた男である。ところで、この石碑はもと仲鷹の出生地だと言ひ傳へてゐる大和の安部村にあつたのを、去年の秋何うした譯か、奈良の古物商が買ひ取り、幾らか持て餘し氣味だつたのを、それを聞込んだT氏がわざわざ譲り受けたものである。T氏は女以外の物だつたら、どんな我樂多でも古くさへあれば納得出来る性の人である。

京都の嵯峨に俳人去來の墓がある。尖つた三角型の洒落た石で、舞妓の振袖にも包まれさうな小さな石碑である。ある時京都の出水邊に住んでゐる物好きな男が、この石碑を女房に見せたいからといつて、風呂敷を懷中にしてわざわざ嵯峨まで出掛けたものだ。女房の機嫌を取るためには、どんな事をも仕兼ねない男で、猫の兒を嫁入らすやうに、去來をその儘風呂敷包みにして提げて歸る積りだつたのだ。ところが、途中で大粒な丹波栗をしこたま購ひ込んだので、つい其儘になつてしまつた。女といふものは、どんな人の墓よりも栗のきんごんの方を嬉しがるものだといふ事をその男はよく知つてゐたのだ。

T氏は物持だから、安部仲鷹を買取るについて、栗のきんごんを儉約したか、何うかは知らないが、兎も角もその石碑は今では氏の玄關先きに衝立つてゐる。

「何に使つたものか知ら、仲間の奴を一つあつと言はせるやうな使ひ道がありさうなものぢやて。」

T氏はその前を通る度にいつもさう思つてゐたが、ある時芭蕉翁の句集で、「木曾の背合せの寒さかな」といふ句を見て覺わす膝を叩いた。

「さうだ、乃公の墓にしよう。仲鷹の背合せに、乃公の名を彫りつけて、さて側面には仲鷹と背合せの月見かな。」

と慫うやるのぢや。この趣向には大抵の奴が恐れ入るぢやらうて。」

T氏は慫う考へついてからは、一日も早く自分の墓が拵へてみたくなつた。そしてまた一日も早く死んで、その墓の下から友達のおれ入る顔を覗いてみたくて溜らなくなつたらしい。結構な道樂さ。だが、芭蕉はまた言つてゐる。——「秋深し隣りは何をす人ぞ」と。——もしか仲鷹が隣りは何をす人だと訊いたら、T氏は何を答へるだらう。

「乃公は實業家だよ。」

と言つた所で、悲しい事には仲鷹は實業家といふ結構なものを知らないかも知れない。

T氏はその前を通る度にいつもさう思つてゐたが、ある時芭蕉翁の句集で、「木曾の背合せの寒さかな」といふ句を見て覺わす膝を叩いた。

「さうだ、乃公の墓にしよう。仲鷹の背合せに、乃公の名を彫りつけて、さて側面には仲鷹と背合せの月見かな。」

と慫うやるのぢや。この趣向には大抵の奴が恐れ入るぢやらうて。」

T氏は慫う考へついてからは、一日も早く自分の墓が拵へてみたくなつた。そしてまた一日も早く死んで、その墓の下から友達のおれ入る顔を覗いてみたくて溜らなくなつたらしい。結構な道樂さ。だが、芭蕉はまた言つてゐる。——「秋深し隣りは何をす人ぞ」と。——もしか仲鷹が隣りは何をす人だと訊いたら、T氏は何を答へるだらう。

「乃公は實業家だよ。」

と言つた所で、悲しい事には仲鷹は實業家といふ結構なものを知らないかも知れない。

幸運兒

今はむかし、千七百九十一年の一月五日の午すぎ、佛蘭西はセエヌ河の畔、オクソンヌといふところで、五人の衛戍將校が、猿のやうにきやつきやつと軽噪きながら變な腰つきで氷すべりをしてゐた事があつた。

ところが、そのなかの若い將校の一人は急に精のない顔をして立ち停つた。

「ああ腹が減つた減つた、僕は腹が減つて溜らないから、もう歸るよ。」

急う言ひ捨てて、その男は急いで歸り仕度に取りかかつた。皆は慌てて引こめた。

「そんなに急ぐなよ、今暫らくしたら、僕達も一緒に歸るんだから。」

だが、若い將校は皆の言ふ事を肯かないで、滑り靴を脱ぎ捨ててさつさつと歸つてしまつた。腹の減つた身には、物を言ふのも大儀らしかつた。

「は、は。奴さん、またいつもの剛情を出しをつたな。皆は若い將校の歸つた後で、蔭口をききながら、勢ひよく氷の上を滑つた。巧く滑れる時は、自分の身體を五サンチムの銅貨のやうにさへ思つた。」

皆が有頂天になつて騒ぎ立つてゐる一刹那、さうした機みか、氷はばりばりと音を立てて割れた。そして四人が四人とも、その割れ目に陥ち込んで死んでしまつた。一足先に歸つた一人こそ實際都合よく腹が減つたもので、然もなかつたら氷の裂け目に皆と一緒に銅貨のやうに滑り込んだに相違なかつた。その腹の減つた一人こそ誰あらう。後には佛蘭西皇帝にまでなつたナポレオン・ボナパルトであつた。

船酔

パアシング將軍が、歐洲派遣の米國軍を引連れて、大西洋を横断つてゐた時の事、海は將軍の門出を祝福するやうに大きな肩を揺ぶつて笑ひ出した。その笑ひやうが餘り無遠慮だつたので、浪は船を玩具のやうに弄んだ。

船の中できやつきやつと軽噪いでゐた若い將校連も、いつの間にか横に倒れて、うんうん唸き出した。なかに一人、船に、賭博に、加之に軍にも、女にも弱いやうな顔をした士官が、海

の荒れ始めから、自分の船室へ潜り込んで、一向影を見せないのがあつた。
 パアシング將軍は態態立つて、その士官の船室に訪ねて往つた。士官は船酔の果てが、枕につかまつて顔と穢い物を吐いてゐた。

「酔つたな。何か食べたがよからう。將軍は平氣な顔をして言つた。

「どう致しまして。」士官は瓜のやうな顔を涙と汗とでぐしよ濡にして泣くやうに言つた。「食べた物は、みんなもてしてしまふんです。」

「嘔吐したら、また食べる迄の事さ。食べては吐き、食べては吐きしてる間に、船も佛蘭西の港へ着かうといふものだ。」

將軍は命令のやうに言ひ捨て、足音を曳きすりながら外へ出た。若い士官は蛙のやうに靈魂まで吐き出しさうに、また一頻り身悶わした。

植民館の設立者として名高い、米國のジエエン・アダムス女史が、ある時大西洋通ひの汽船に乗つた事があつた。その日も海は荒れてゐた。女史は船には強い方ではなかつたが、それでも二等室にゐた愛蘭人の一人が、ひびく弱り込んでゐるのを見ると、もうじつとして居られ

なくなつた。すべて社會改良家といふものは、猫の餌を見ては、直ぐその生活費を考へ、燕の巢を見ては、屋賃を訊かないでは居られない、世話好きの人達である。女史は苦しさに嘔吐してゐる其の愛蘭人の肩を抱へながら言つた。

「随分お苦しうですね、貴方のお腹は餘りお強い方ではないんですね。」

「私のお腹が弱いと仰有るんですか……」愛蘭人は涙の眼で女史の顔を睨まへた。

「お腹が弱くて、こんなに嘔吐されるものぢやない。御覽なさい、あんな遠くまで食物を吐き飛ばしてゐるぢやありませんか。」

美人の木乃伊

工學博士T氏は、古代建築專攻の學者で、近頃は支那に派遣せられて、大同府の千佛山や、洛陽の龍門や、または支那五嶽の隨一と言はれる嵩山あたりまで出掛けて往つて、古物といふ古物は何一つ残さず搜し廻つて、

「どうしても北魏隋唐になると、藝の牙わ方が違つてるから偉い。大したもんですな。」

と鼻を鳴らして喜んでゐる。

このT氏が、ある時支那の西域で發掘せられた木乃伊の鑑定を頼まれた事があつた。棺の中には白絹で叮嚀に巻かれた屍體が横はつてゐた。T氏は水蜜桃の皮を剥くやうな氣持で少しづつ白絹をめくつて往くと、なから顔を出したのは妙齡の娘で、目鼻立ち何處に一つ點の打ちやうもない大理石像のやうな美人であつた。T氏は學者となつて、こんな美しい娘の木乃伊を鑑定するよりもいつそ放蕩息子となつて、生きたこの娘の唇に觸れたく思つたらしかつた。T氏は吸ひつけられたやうな眼をあけて、側の墓銘を見た。夫によると、この女はさる大官の一人娘だつたが、流行病にかかつたので、その頃の慣習通り、まだ息を引取らぬうち、生埋にしたものだといふ事が判つた。

「可哀さうに生埋にしたのださうな。」

T氏は深い溜息を吐いて恥しさにそつと眼がしらの涙を拭つた。學者といふものは石地藏と同じやうに、どんな場合にも涙を流してはならないからである。T氏は日本には息のあるうちに生埋にしてもいい政治家や、軍人や學者のたんとある事を思つて、そんな習慣のないの

を幾らか物足りないやうにも思つた。

T氏はいつ迄もいつ迄もじつと木乃伊を見てゐるうちに、さうも兩腕の位置が少しく面白くないのに氣がついた。

「折角の美しい木乃伊だ。今少し藝術的の恰好をさせなくつちや。」

と口のなかで獨語を言ひ乍ら、そつと兩腕に觸つてみた。兩腕は釘付にせられたやうに重かつた。女の腕は生きてゐるうちと同じやうに、じくやつてからも學者などの爲めには、一寸も動かうとはしなかつた。

「さうしても動かないかなあ、もう一寸の事で藝術的になるんだがね。」

T氏は女の美しい胸を見つめながら、口惜しさうに呟いた。——そのT氏に教へる、木乃伊の腕は、學者の研究と同じで、今一息といふところで、物になるのだが、得てさうならないところが世間なのである。

氣取屋の婦人

米國は華盛頓市のW Iといふ名高い料理屋に、ある日の事、孔雀のやうに盛粧し込む婦人が入つて来た。入口の扉の側に立つてゐたのは、折目の正しい、仕立おろしの流行服を着込む紳士だつた。婦人は尻目にじろりと紳士の顔を見ながらいつた。

「ここ窓に近い小卓はありませんか。」

紳士はそれを聞くと、黙つて婦人を連れて窓際の小卓に案内した。卓の上には眞紅な花が酒のやうな甘つたるい香氣を漂はしてゐた。紳士は眞新しい白い手帛で椅子の埃を拂き、そこらに散らばつてゐる麵麩屑を拂ひ落したりした。手帛はその朝紳士の細君が、恩に被せながら箆の底から態取れ出して呉れたものだつた。

丁寧な紳士が小卓の側を離れようとするに、婦人は厭立表を手に持つたまま女王のやうな氣取つた聲で慌て、呼びとめた。

「ちよいとお待ち、この店は何が自慢なの。」

「さあ。紳士は一寸額へ手をやつた。何よりも甜瓜が自慢なんですがね。」

孔雀の女は黙つて頷いてみせた。餘り頷をしやくり過ぎたら、損の往くやうな頷き方で

ある。

「ビフテキも一寸食べられます。」紳士は自分が何よりもビフテキが好きなのを忘れなかつた。

「成程ね。婦人はにこりこもしなかつた。

その瞬間紳士はいつものを思ひ出した。女といふ女が戀人よりも新聞小説よりも好きな馬鈴薯である。

「それから馬鈴薯料理もなかなか美味しく食べさせますよ。」

「さう、結構だわね。」

餘り取済ました口の利き方なので、紳士はさうと腹を立ててしまつた。

「奥さん、それから此店には今一つ自慢の物がありますよ、それは紳士に給仕の見えるかひのつかないお客が偶に来るといふ事です。」紳士は捨臺辭を恚う言ひ置いて、鄭重にお辭儀をして出て往つた。紳士は誰あらう、イリノイス州の上院議員ジェエムス・ハミルトン・レキス氏であつた。

老人の忠告

去年の三月頃の事、神戸女學院出のある婦人が廣岡淺子女史を訪問した事があつた。西洋人の外は大抵の人に會はない事に決めてゐる淺子女史は、お客が女學院出だといふので、ふと會つてみる氣になつた。英語が話せるのだつたら、大抵立派な人柄だといふのが女史の信條である。この點において、聖母マリアが淺子女史の伯母さんでなかつたのは、耶穌教徒にとつて、勿怪の幸福であつた。さもないと女史は英語の話せないものは、天國から追出す事を考へたかも知れなかつたから。

客が座敷に通ると、女史は蘇格蘭の鴉のやうな眞つ黒な洋服を被て出て來た。そしてだしぬけに變な調子の英語で話し出した。お客は可笑しさが一杯なのを奥歯でじつと噛み堪へながら、ごもかくも英語で返事をした。すると、女史の機嫌が急によくなつて來た。

「あなたは西洋人のお友達をお持ちかい。」

「それは可けない、友達は西洋人に限る、私などはこんなに西洋人のお友達を持つてゐるよ。」と言つて、女史は態態起つて往つて、手文庫のなかから横文字の手紙をきつさり持ち出して來た。

客が西洋人にお友達を持つてないといふ事は、幾らか淺子女史の機嫌を悪くした。女史は急に日本語で喋舌り出した。人間といふものは、すべて込み合つた事柄は、自分の國の語で話した方が都合が好いものだ。

「近頃の女學校は皆よくない、女學院にしてからが然うだ。校長にお會ひだつたらよく忠告しておいておくれ。」

「まあ、そんな御親切がお有んなさるんだつたら……」客は幾らか冷かし氣味に言つた。「あなた直に言つて上げて下さいよ、幸ひ明後日は金曜日で祈禱會なんでございますから。」

「さあ、直に私が言つてもいいが——」淺子女史は鴉のやうにぶるぶる肩を顫はせながら、柱曆を見た。曆には三月一日と出てゐた。

「まだ三月で、外へ出るのは寒くていけない、追つて六月にでもなつたら、一つ思ひきり忠告

煙草屋の小僧

する事にしよう。」
 廣岡女史に告げる。今は丁度七月だ。鴉も裸で行水する頃だ。老人が若い者に忠告するなら今のうちの事だ。

先年米國のピッツバーグ市のある煙草屋へ一人の紳士が入つて来て、

「おい、煙草を呉れ。」

と言つた。店先に居た小僧は黙つて一罐を持ち出して来たが、それを手渡ししようとしな
 いで、しげしげ紳士の顔を見詰めながら、何か言ひ出したさうにしてゐた。

紳士は氣味が悪くなつて、手袋の穿つた掌面でそつと顔を撫でまはした。小僧はとうと切り出した。

「檀那さま、失禮ですが私をお傭ひ下さらないでせうか。」

紳士は不思議さうに小僧の顔を見た。

「一體何になりたいと言ふんだな。」

小僧は巻煙草のやうに身體を眞つ直にした。

「私機械の方をやつてみたいんです。」

「機械係は熱くて苦しいもんだよ。」

「そんなに熱くたつて、苦しくたつて構ひません。」

小僧は巻煙草のやうに頭に火がついても、びくもしないやうな確りした調子で言つた。

紳士は小僧の手から煙草の罐を受取つた。

「ところで、日當は一日一弗しか出ないが承知かな。」

「日當なんか幾らでもよござんす。」

小僧が熱心な顔色に紳士もつい動かされて、兎に角世話をしてみよつといふ事になつたので、

先づ自分の監理してゐるカーネギー製鐵所に送り込んで置いた。

これは今から四十年前程前の出来事だが、小僧はそれから汗と油に眞黒になつてせつせと働いた結果、とんとん拍子に出世して、今では年收三百五十萬弗といふ米國でも指折の大物持にな

つた。その人こそ誰あらう、ペスレム製鋼會社の社長から鑫斯のやうに一飛びして、米國管船局總裁の位置に上つたチャールス・シユワツプ氏である。
今の歐洲戰局を支配するものは、米國の増援隊であり、その増援隊を活躍させるのは、米國造船能力の消長にあるのを思ふと獨逸脅威の鍵は、さりと直さず、四十年前の煙草屋の小僧の垢染んだ掌面に握られてゐる次第なのだ。——忘れてゐるが、シユワツプ氏は獨逸系の米人である。

豚に脱帽す

獨逸の軍隊が、破竹の勢ひで、東部佛蘭西に攻め込んだ時、そこらに住まつてゐた佛蘭西の住民は、豫てから獨逸人が吝つたれで、怨深で、有程のものは掻つ拂はずには居られない癖を知つてゐるので、てんでに財産を悪まふのに智慧を絞つたものだ。
其なかに貧乏な農夫が一人あつた。財産といつては夫婦が身に附けるものの外に、豚が一匹のたに過ぎなかつた。

「何うしたものだらう、獨逸の奴め豚がゐると知つたら屹度盗み出さうとするに極つてゐる。」
農夫は豚の前に立つて、手を拱むで考へ込んだ、お慈悲の深い神様は、貧乏な其の男のために取りつて置きの良い智慧を恵んで下さつたので、農夫ははたし手を拍つて喜んだ。

農夫はいきなり豚を叩き殺した。豚は銀行員のやうに黙りこくつて其儘死んでしまつた。
農夫は馴れた手つきで、さつと其豚を切開いた。腹の中には日本の實業家なごの持つてゐるうな、いろいろな變な物があつたが、農夫は綺麗に水で夫を洗ひ落してしまつた。豚はトルストイ信者のやうに清淨な身體になつて横はつた。

農夫はその豚の死骸に、頭からすほりと自分の女房さんの服を被らせて、丁寧に寢床に寝かせた。そしてその周圍に蠟燭を點して、精精悲しさうな顔をしてゐた。

暫らくすると、激しい靴音がして、獨逸兵が扉を跳ね飛ばすやうな勢ひで入つて來た。農夫は兩手の掌面に填めてゐた顔を大儀さうにあけた。獨逸兵は吠わつくやうな獨逸語で何か訊いたが、農夫は黙つて頭を掉つた。

見ると、寢床の上には女の着物を被た死骸らしいものが轉がつて、枕もこには蠟燭さへ點つ

てみる。

「死人だ、事によつたら女房さんかも知れない。」

と思つた兵卒は、胸で十字を切つて、一寸帽子を脱いだ。そして氣の毒さうな顔をして黙つて出て往つた。

農夫はほつ息をついた。着物を跳ねのけてみると、豚は心の臓も腸も持つてない癖に鐵面皮にも平氣で脚を踏み伸して横になつてゐた。

女形の心得

むかし歌舞歌右衛門が、女形をする心得を言ひ残した事があつた。それによると女形はすべて膝がついて居なければならぬ、何よりも大事なのは、この膝で、そして手元を柔かにしてゐれば、其儘女になりきる事が出来るのださうだ。濱村屋菊之丞といふ女形が、木挽町で菅原を演つたとき、覺壽と梅王と千代との三役を勤めた事があつた、梅王には車曳のくだりで兩臂を張り手先を肩に預けないやうに腕を組むで、

「喰ひふとつた時平さんの尻ごぶら、一二三……」

と左手の拳で右の二の腕を打つところがある。それを菊之丞が何ういふかは幕内の面白い問題となつてゐた。

といふのは、その頃は女形のつつましい口からは、尻といふやうな端たない言葉は夢にも言つてはならない事になつてゐた。ところが、菊之丞は稽古の時、そこへ來ると、急に聲を落して何か譯の分らぬ事をくきくきと言つて胡麻化してゐた。

「何を言つてるのだらう、芝居が開いてもあんなちや困つてしまふが。」

皆は寄々その事を話して氣遣つたものだ。すると初日の幕が開いた。待ち設けた車曳となつた。皆は身體ちうを耳のやうにして、その臺辭を待つた。菊之丞は叫んだ。

「時平さんの御面相二つ三つ……」

皆はやつと安心して、ほつ息をついた。

大阪俳優のうちで女形として第一流といはれる中村福助が、去年淀川に堤切れがあつた當時清荒神から大勢の最良客と一緒に、大阪歸りの電車に乗込んだ事があつた。電車が十三と三國

賣子娘

その間に來ると、出水はもう軌車を浸してゐて、車は鳥のやうに聲を立てながらおつかなびつくりに進むより外に仕方がなかつた。福助は物珍しさうに窓に顔を押しつけて、夜目に氣味悪く光る水の面を眺めてゐたが、ひよいと連の男を振かへつたと思ふと

「さうだす、これが砂糖水やつたらよろしおまんのになあ。」

と、舌替つりをしながら言つてゐた。

帝劇の尾上梅幸が、芝居がはねてから夜遅く友達と一緒に外濠を歩いてゐた。空には星が瞬きをしてゐた。梅幸は立ちどまつてじつと夫れに見られてゐたが、しみじみと思ひ込んだらしく

「あれが、皆ダイヤだつたらなあ。」

と獨り言のやうに言つたといふ事だ。

梅幸も福助もさすがに女になりきつてゐる。値安で成るべく好い物を手に入れたと思つてゐる點において。

名高い紐育の百貨店ワナメエカアの手套部に、近く入つて來た賣子娘があつた。ある日の事、婦人のお得意に手套を一つ賣つた後で、今度は直ぐ側に立つてゐる紳士のお客の方に振向いた。

「入らつしやいまし。何かお入用のお品でも……」

「羊皮の手套を一つ。」

賣子を取り出した手套を受取りながら、紳士は言つた。

「こんな事を言つて、氣に障へて貰つては困りますが、先刻の婦人に對するあなたの應對振はまだ十分とは言へなかつたやうですね、あの方は此の出やうによつては、もつとお需めになつたかも知れませぬよ。」

賣子娘は酸っぱい物を嘗めさせられたやうな顔をしたが、それでも負ては居なかつた。

「あなたはお客扱ひがお上手でいらつしやるやうですね。何ならここで暫くお手本を見せて戴けないでせうか。」

「よろしい、承知しました。」

客は斯う言つて、吃驚する娘には頓着なく、すつと帳場に入つて来た。そして身軀に外套と帽子を脱ぎざま、今入つて来たばかりの婦人客の方へ愛嬌のある顔をふり向けた。

「毎度御最良に預かりまして……今日は何か……」

「あたし洗濯の利く白手套が欲しいんですが……」

紳士は賣子娘に白手套のしまつてある棚を訊いた。そしてその中から二揃ひ持ち出して来た。

「いかがでございますか、このお品では。それから洗濯なさいます間別のお入用だも存じますが。」

「さうね、ぢや二つ戴きませうよ。」と婦人客は白手套の二つを購ひ取つた。

「今一つこんなのを御覽に入りたいと存じますが」

紳士は先刻の棚から別の手套を持ち出して来た。「御覽の通り、これは鼠色でございますが、お劇の晝興行やお寺詣りにはこの方がお似合ひかと存じまして、何ならこれも二揃ひばかりお持ちになりましたは。」

婦人客はその鼠色の手套をも、言ひなり通り二つ購はされた。たつた一つの手套が買ひたさに店に入つて来たものが、出る時には四つの手套を提げてゐた。それもほんの十分間の出来事に過ぎなかつた。

お客が歸つてゆくに、賣子娘はすつかり感心したらしく言つた。

「まあ、お上手だわね、貴方これまで屹度どこかの賣子だつたんでせう。そしてお店へ雇はれたくつて、今日往らしつたのぢやなくつて。」

「さうかも知れません。」

紳士は外套と帽子を受取りながら言つた。そして紙入から自分の名刺を取り出して娘に呉れてやつた。夫れを見ると娘は仰天して酸漿のやうに眞紅になつた。紳士は擬ふ方もないワナメエカアの主人だつた。

悟

道

近頃碧巖録とか、無門關とかいつたやうな禪家の書物に、所謂悟道を商賣にしない、素人の

學者、求道者が飛び込んで往つて、新しい解釋を試みようとしてゐるのは面白い現象である。鳥居得庵といへば、軍人で出先きを塞がれた腹癒せを、禪學にぶち込んだ程あつて、胡椒のやうにひりりとした禪機の鋭さにかけては、其の頃の居士仲間の随一であつたが、ある時その居士の玄關へ立つて、牛のやうな太い聲で案内を頼む者があつた。取次ぎの書生が出てみると、玄關には、瓦で拵へたやうなお粗末な坊さんが一人衝立つてゐた。

「拙僧は北國の雲水でござるが、得庵先生御在宅なら、暫らく御意を得たいと思ひまして……」坊さんは恠う言つて、人形のやうにぎくりと頭だけを下げた。その風が餘り可笑しかつたので書生は思はず笑はせられた。

「折角のお訪ねでござりますが、主人は昨今所勞中で、あなたにもお目に懸りません。」大抵の客は、皆この口上一式で追ひかへす事になつてゐるので、書生は早口にすらすらと言つて退けた。

お粗末な坊さんは、汗ばんだ額へ掌面をやつて、じつと考へ込んでゐたが、急に獸のやう

な惡意のある眼で書生の顔を見た。

「實は居士にお目に懸けたいと思つて、天よりも大きい編笠を持参いたしてござるが、如何取り計らひませう。」

蛇の目の唐傘だつたら、書生は自分のにする事を知つてゐたが、編笠では使途に困つた。

で、兎にかく奥へ入つて居士に譯を話してみると、居士は狼のやうな顔に、にやりと薄笑ひを浮べた。

「どうぞ其邊に捨ておけと言つてやれ。」

書生が玄關へ出て、教へられた通りに然う言ふと、坊さんは背に括りつけた編笠の紐でも解くやうな眞似をして、その儘出て往つた。書生は鼻を鳴らして感じた。坊さんも坊さんなら、居士も居士だと思つた。で、狗のやうに次ぎの室に蹲踞つて譯を訊くと、居士はけろりとした顔で言つた。

「乃公は何も知らんよ、編笠を持つて來たといふから、捨てておけと言つたまでぢやないか。」書生は悟りもいゝ加減なものだと思つた。そしてそれ以來いつも迷ひ續けてゐる。

入場料の儉約

アルマ・グルック女史といへば、米國で名高い高調子の歌手で、歐羅巴の本場仕込でなくて、グランド・オペラの一流株になつたのは、女史が皮切だといふ、米國ではちやまぢやまぢの歌手である。

いつだつたか、女史がミシガン州のある市に演奏に出掛けた事があつた。何しろ名高い高調子の歌手が顔出しをするのだといつて、市はひつくりかへる程の騒ぎだつた。一體音楽といふものは、いろんな藝事のなかで、一等解り難いものだが、那を解らないといふと、馬に比べられる心配があるので、大抵の人は辛抱して解つたやうな顔をしたり、面白い面白いといつて騒ぎ廻つたりするものだ。

演奏のある日の午過ぎ、アルマ・グルック女史は、好きな菓子を買ひに大通の店屋に入つて往つた。番頭は朋輩を相手に頻々その晩の演奏會の事を噂してゐた。

「演奏會といへば、大した人氣ださうぢやありませんか。」女史は何喰はぬ顔をして口を出した。

番頭は初めて氣が注いだやうに、身裝のりうとした此の婦人客を見た。

「さうも素晴らしい人氣でございますよ。」

「貴方も今晚は入らして。」

女史は世間並の挨拶なごするには惜いやうな美しい聲で言つた。

「へい、参り度いとは思つてゐるのでございますが——」

番頭は一寸頭へ手をやつた。實を申しますと、音楽は餘り好きでもございませませんが、唯噂の高いアルマ・グルックさんといふ方のお顔を見たいと思ひましてね。」

「それぢや、眼をあけてよく御覽よ。」女史は幾らか中つ腹の氣味で、鶯鳥のやうにぐつと首を前に突き出した。そして入場料だけ儉約しとくといわわ。」

番頭は呆氣に取られて、じつと眼を皿のやうに睜つた。——で、言はれた通りに入場料だけは儉約をする事にしたさうだ。

座頭と花形俳優

松本幸四郎——といつても帝劇の舞臺に立つてゐる今の幸四郎ではない。すつと古の幸四郎である。——が、ある時芝居の初日ははねて家に歸つて来た。そして長火鉢の前に坐つて、女房を相手に酒を飲みながら、今日の舞臺の出来を彼是取沙汰してゐた。

すると、表の格子戸を勢ひよくがらりと開けて、内弟子の一人が歸つて来た。弟子は長火鉢の前の師匠を見るに、いきなり浮いた調子で二三度自分の頭を叩いた。

「お女房さん、お喜びなせいで、今度の芝居に内の親方の評判と来たら、それはそれは素敵なものでございませ。わつちやあ、氣に懸つて仕方がねえもんだから、今も今も打出しの見物衆に交つてね、皆の評判を聞いて歸つたんでございませ、十人が十人「さうだ、今度の幸四郎の出来は」と言つて、賞めちぎつてゐるまじやあ。」

弟子は早口に急言つて、態どらしく雀のやうな恰好をして踊つてまで見せた。幸四郎はそれを聞くと、急に氣難かしい顔をした。そして弟子のふざけた振には見向きもしないで、ちびりちびり盃の縁を嘗めてゐた。

「何だつてそんなに不機嫌な顔をしてゐるの。」女房さんは繊細な手先でお銚子の加減を見ながら

心配さうに言つた。「今聞けばお前さんの評判が一番好いといふぢやないの。」

「ああ、困つたな。今度の芝居は極つて不入だわね。」

幸四郎は女房の言葉は、まるで耳に入らぬらしく、獨語のやうに呟いた。

「わ、不入だつて、今度の芝居が。」女房さんは咎め立てをするやうに怖い目つきをした。「戯談もいい加減にしてお置きよ、今日は初日だつてなのに、縁起でもない。」

「お前達には判らない。幸四郎は盃を猫板の上に置きながら、弟子の顔にじつと眼を見据ゑた。弟子はいつにない師匠の不機嫌に、先刻のふざけた真似とは打つて變つて神妙に鼠のやうに小さくなつてゐた。幸四郎はほつりほつりした口調で譯を話した。その言葉によると、今度の芝居の花形は誰が何といつても半四郎と三津五郎の二人だ、この二人の評判がよかつたら、芝居は大入に極つてゐる。それなのに自分がそんなに評判を立てられるといふのは、この二人に好い點がないに相違ない。座頭役、敵役の評判では見物は來ないものだといふのだ。」

今の鴈治郎や歌右衛門なども、よくよくこの言葉を味はつて貰ひたい。そして精精一座の花形俳優に花を持たすやうに振舞つて欲しい。これは唯り俳優に限つた事ではない、原敬氏なぞ

詩人の健啖

も自分が評判を取らうとしないので、同じ閣員の花形俳優を引立てるやうにしたら、内閣も割合に無事に持續ける事が出来よう。シヨベンハウエル曰く好い俳優はよく端役をしてゐるものだ。

話はずつと古くなるが、伊太利の詩人ダンテが、ある時カーネ・デラ・スカラ家の食事に招かれた事があつた。——世間の娘を持つた親達に告げておく。皆さんの知合にもしか詩人があるなら、精精御馳走する事だ、詩人は食卓で親達に色色のおもしろい談話を聴かせてくれるばかりか、娘には激しい戀を教へてくれるものだ。

ダンテは好いお客だといふので、わざわざ其家の主人と子息との間に坐らせられた。その頃の食事の時に、主人も客も食べ残りの骨を卓子の下に打捨らかしておく習慣があつたので、悪戯好きのカーネ親子は、目ざとい詩人に氣づかぬやうに、自分達の皿の骨は言ふまでもなく、他のお客のをまで、そつくりその儘そつとダンテの足もとに捨てておいた。

さて食事が済むと、主人は初めて夫に氣づいたやうに皆の顔を見た。

「皆さん、私はダンテ君の胃の腑が、馬のやうに御丈夫なのにすつかり驚いてしまいました。

お疑ひになるなら那を御覽下さい。」

主人はダンテの脚もとを指さした。皆は卓子の下を覗き込む。そこには食べ残りの骨が山のやうに積まれてあつた。

「ほほう。驚きましたな。では、これから一つ詩人の健啖を祝さうぢやありませんか。」

お客の一人が言ひ出したので、皆は起ち上つてダンテの胃の腑のために杯をあげようとした。

「お待ち下さい。皆さん。」ダンテは両手で皆を押へつけるやうな眞似をした。

「あなた方は私の健啖のいいのに吃驚なすつていらつしやるやうですが、私はまた當家の御主人の胃の腑の廣いのに驚嘆してゐるやうな始末で。御覽なさい——」と詩人は主人の脚もとを覗き込んだ。「御主人の卓子の下には何一つ残つてゐません。私は慙うして骨だけは食べ残しましたが、御主人はその骨まですつかり鷄呑みにされてしまひました。」

皆は詩人の頓智のいいのに嘆賞を惜まなかつた。語を寄す。世上の健啖家、頓智さへよかつ

たら、諸君は六人分の飯を食つたつて少しの差支もない。」

女 商 人

蘆花徳富健次郎氏が、ながい間の修道的閉居から、久しぶりに、柴の扉を開けるに、いろいろな訪問客が毎日ぞろぞろ詰めかけ出した。そのなかに、氏の原稿を貰つて一儲けしようとする目論みを立ててゐる出版業者も幾人が交つてゐた。

さういふ輩のなかに、たつた一人の女商人があつた。幾度か面會を謝絶られても、性懲りなくまたやつて來るので、徳富氏も流石に氣の毒になつて會つてみる事にした。

その人は兩國橋詰のある書肆の女主人だつた。

「お忙しいところを、お邪魔にあがりました。相済みませんが……」女商人は丁寧にお辭儀をした。頭の下げやうが、どこか婦人雜誌の口繪によく肖たやうな點があつた。「先生のお書きになつたのを、一度私さでも出させて戴きたいと存じまして……」

「私の書物が出版したい？」徳富氏はこの頃髪を剃り落したばかりの顔を撫ながら、子供のや

うなくくりくりした顔をして言つた。「何故ですか。」

「お金が儲けたいんです。先生の御本を出させて戴きますと、お金がごつさり儲かりますやうに承はりましたから。」

女商人は慙う言つて後れ毛を撫であけた。そして自分で幾年か往時、男の膝にもたれて、

「あなたの鼻は低いのね」と言つた以來、これほど眞實の事を言つた事は無かつたと思つたらしかつた。

「なぜ、そんなにお金が儲けたいのかね。」

徳富氏は不思議さうに訊いた。

女商人は答へた。

「商賣をも一層手広くやつて往きたいと思ひますし、それに妙齡の娘も一人ございますもんですから。」

「娘さんがお有りだつて。」徳富氏は雌鶏の羽がひ下に卵を一つ見つけた折のやうに聲をはづませた。「夫れぢや原稿をあげない事もないが、其代りに茲に一つ條件がある。」

「條件を仰有います……」

「あなたも知つて居るだらうが、麹町に金尾文淵堂といふ書肆が居る。あすこの主人に娘さんを娶さないかね。さうするに、きつと私の原稿をあける。」

徳富氏はにこりともしないで言つた。文淵堂の主人といふのは、淺草の観音様を自分の本尊として毎夜お詣りをする外には、何一つ浮いた事もなく、四十の今日まで童貞を守り通して来た風變りな商人で、徳富氏は長い間の近づきであつた。

「思召は有難うございませうが、いづれよく考へました上で。」

女商人は恚うつて歸つて往つた。そしてそれ以來二度と原稿を貰ひに粕谷の村へ出て來なかつた。

その後徳富氏が兩國橋を通るに、橋詰の書肆の店で、見覺の女商人は客を相手にせつせと働いてゐたさうだ。——よい考へで、お金が儲けたかつたら、働くに越した事はない。

女房の手紙

亭主といふものは、女房を里歸りさせるか、それとも自分が遠くへ旅立でもしなければ、滅多に女房の手紙を読む機会に出會さない。だから、もし自分の家で女房から手紙を投げつけられるやうな事があつたら、大抵の亭主は、小鳥のやうに顔へあがるに極つてゐる。

米國は紐育のある大會社の社員が、先日の事出勤時間が來たので、慌て家を飛び出さうとするに、戸口で女房に呼び止められて一本の手紙をつきつけられた。

「貴方、これを會社へお着きになつてから讀んでみて下さい、途中で御覽になるんぢやありませんよ。」

女房はいつになく眞面目な調子で言つた。

亭主はぎよつとして手紙を受取つた。そして何か訊き返さうとして口をもぐもぐさせてゐたが、ふと時計の針が目に入るに、その儘慌て飛び出した。そして途途手紙の封を切らうとして、幾度かポケットに手を突込んだが、その都度女房の言ひつけを思ひ出して、それなりポケットの奥へ押し込んでしまつた。——實際女房の言ひつけは、藥の處方箋とは、言葉通りに解釋した方が、男にとつて危険が少かつた。

會社の入口を入ると、男は急いで手紙の封を切つて讀み下した。

「貴方に御心配を掛ける事だとは知つてますが、私としてはお話し致さなくては済まされませんが、それは私の義務なんですからね。私は先日中から、こんな事になるだらうと思つてましたが、今日まで凝と辛抱して來ました。所がどうも大變な事になりました。私はもう隠してばかりは居られなくなりました。愈々あけすけに申し上げますから御免下さい。貴方は夫をお聞きになると、屹度頭へ上つておしまひになります。……」

「いよいよお互の身の破滅だ。忍び男でも出來たんだ……」と思ふと、男の髪の毛が逆立になるやうに思つた。そして急いで後を讀み次いだ。

「あなた、石炭がもう悉皆になりましたのよ。どうか正午までに宅に届けて呉れるやうに電話をお掛け下さいな。——吃驚させて済みませんが、どうでもしなけりや、貴方がお忘れになると思つてね。」

男は吻息をついた。そして早速電話をかけて石炭を催促した。で、物の十分も経つと、男は急に元氣づいて、石炭が無くて女房がゐるのよ、女房が居なくて石炭がうんとあるのよ、と

つちが男にとつて暖かだらうかなと、そんな大それた事を考へ出した。

女房の通辯

××商事會社の重役M氏は、ながく米國へ渡つてゐて、那地で會社の地位を据ゑたのは、全く斯の人一人の骨折だと言はれてゐる男である。それだけにM氏自身も米國にはかなり深入りしたと見えて、夫人には、髪の毛の金色な米國婦人を迎へてゐる。

結婚をした男といふ男は、大抵みなアダムを羨ましがらるものだ。何故といつて、彼にはイヴの阿母といふものが居て、絶えず口うるさく世話を焼く心配が無かつたから。實際男にとつて、女房の里方のおせつかい程小うるさいものはないが、夫を思ふと、M氏が米國婦人を妻に迎へて歸つたのは、惻巧な仕方だつた。

女房の里方が日本に無いのを忘れないM氏はちよいちよい夫人を連れて、あちこちを旅をする。そして何處も當所もない折には、日光へ往く事に定めてゐる。日光に藝者は西洋人に、つて日本の二大驚異であるが、藝者は夫婦者にとつては、山よりも險呑な所が多いので、M氏

は夫で日光へ往く事に定めてゐるのだ。

ある時日光へ往つての歸途に、夫人は誰かに買つて歸るつもりで、土産物を賣つてゐる一軒の小店へ入つた。M氏は葉巻を啜へたまま後からのつそり從いて往つた。夫人は番頭が取り出して來る色々な土産物を弄くりまはしてゐたが、そのなかから通草蔓の手籠を二つ三つ買ひ取つた。

夫人は財布を出して、言はれるだけの金額を拂つた。その金は基督教信者のM氏が、聖書に書いてある事を、書いてない事を巧く按排して商賣するので儲かつた金の一部分であつた。

M氏は相變らず葉巻を啜へたまま、夫人の後からのつそりと店を出ようとした。すると後から低聲で

「もし、もし。」

と呼ぶ者がある。見るに番頭だ。番頭はたつた今夫人に見せた叮嚀な素振とは打つて變つた氣取つた態度で

「僅ですが……」

と言つて、幾らかの金銭をM氏の掌面に握らせた。

M氏は會社のため使ひ盡して、近ごろ幾らか軽くなりかけた頭を傾けた。

「ははあ、俺を通辯と間違へたな、女房がアメリカ人だもんだから。」

然う氣がつくと、氏は軽く頷いて、その小錢をその儘自分の懐中に納めてしまつた。そしてこんな不意な儲けをするのも、自分の女房の見立が善かつたからだと思つて、満足さうに煙をばつと鼻の穴から吹きだした。

詩人の握手

スキンバンといへば英國の名高い詩人だが、その愛讀者の一人に、何とかして一度この詩人と握手して、その心持を一生の自慢にしたいと思つてゐた男があつた。

その男は、詩人が毎朝のやうに其邊の森へ散歩に出かける癖があるのを聞いたので、度々ここぞと思ふにしろ待伏せして、漸く一週間に、かねて寫眞版で顔配戀の斯の詩人が、向ふからてくてく歩いて來るのに出會す事が出來た。其の男は樹蔭から獵師のやうに飛び出した。

そして慌てて帽子を脱いだ。

「ちよいと伺ひますが、あなたはスキンパン先生ぢやありませんか。」
詩人は變な顔をして、一寸うなづいた。

「それぢや、さうか握手させて戴きませう。」

男は脂ぎつた掌面を前に差し出した。その掌は詩人と握手するよりも、熊と掴み合った方が恰好なと思はれる程大きかつた。

「うむ……」と詩人は呻くやうな聲をして、少し後退りした。まるで見知らぬ男の掌面に怖氣づいたやうだつた。その瞬間、件の男は詩人が聳だつたのに氣がついて、一段と聲を張りあげた。

「先生、私はあなたに握手がして戴きたいばかりに、一週間ばかり毎日のやうにここでお待ち受けてたのでございます。」

「ああさうでしたか。詩人はにやりともしなかつた。そして瘦せた手を出して、其の男の大きな掌面を握つたが、その刹那小娘のやうに心持顔をほつと赧くした。

百圓札

「私はこんな事には馴れてないものですからな。」

國民黨出の政論家U氏は、多くの議論家と同じやうにいつも貧乏である。いつだつたか氏の家に國民黨の犬養毅氏が訪ねて來た事があつた。犬養氏は劍術使ひのやうな凄い眼つきをして狭いU氏の宅を物珍しさうにきよろきよろ見廻してゐた。

そのかへり途に、犬養氏は國民黨本部へ立ち寄つた。そして乾魚のやうな瘦せた體軀をぐたりと椅子の上を下すと、居合はせた黨員の誰彼を見て言つた。

「蝸蝸といふ語があるね、僕も書物のなかでは、よくこの語に接してはゐるが、今日は眼前に其蝸蝸といふものを見て來たよ。」

「へね、どんな者が住むでゐました。」

少し小金を持つてゐるらしい黨員の一人が不思議さうに訊いた。

「國民黨員が住むでゐたよ。名前はU——と言つたけ。」

犬養氏は劍術使ひのやうな眼尻に皺を寄せて笑つた。

そのU氏がある時國民黨の本部で蟹のやうに頬と泡を吹いてゐた事があつた。

「柏原文太郎つて、ほんまに失敬な奴だ、僕はあんな非紳士的な男をまだ見た事がないよ。」

「非紳士的つて、どんな事をしたんだい。」

居合せた黨員の一人が訊いた。此男の考へでは、馬が後脚で人を蹴る外には、非紳士的な態度といふのではないといふのだ。

U氏は眼をくしやくしやさせた。

「それを聞いたら誰だつて怒るよ。」

「こんな事をしたんだい。今まで背を向けて何か考へてゐたらしい同じ黨員の大内場三氏は眞面目になつて振り向いた。

「柏原がそんな不都合をしたなら、僕が君に謝らせてもいい。」

「不都合だとも。ひどい不都合さ。」U氏は泣き出しさうな顔をして言つた。「彼の男は僕の眼の前で金を勘定したんだよ。しかも百圓札でね。」

「札勘定をしたんだね、百圓札で。」皆は顔を見合はせた。「そりや成程柏原が悪い、君にそんな物を見せるなんて。」

皆は柏原氏が悪いと極めてしまった。實際それはよくない、貧乏人に百圓札を見せつけるなんて、富豪に短銃をおつつける以上に罪がふかい。何故といつて、富豪は懷中に手を突込んで相手を宥める術を知つてゐるが、貧乏人は赫となるより外には仕方がないのだから。

お祖母様と黒狸々

最近西部戦線で、獨軍の砲彈の破片に撃たれた佛蘭西娘の一人が、巴里の病院に收容された。傷は程なく癒へたが、困つた事にはすつかり記憶を失くしてしまつて、何を訊いても返事一つ出来なかつた。

「阿父さんの名は何といふの。」

醫者は猫のやうな物柔かな聲で訊いた。娘は睫毛一つ動かさうとしなかつた。

「それぢや阿母さんは何といふの、覚えてゐるだらう。」

醫者は娘の顔を覗き込むやうにして訊いた。娘はつんと済ましきつて外の方を向いた。醫者は何にかして口を利かせたいものだ、頭を絞つて色々の手段を試してみたが、小娘は髪の毛一つ動かさない済ました顔で、石のやうに黙りこくつてゐる。恚うしてさんざ焦慮しぬいた末、

「馬鹿！」

と、一聲喚きでもしたら面白かつたのだが、小娘は實際醫者の馬鹿なのを知らなかつたかして、いつ迄も黙りこくつた儘で居た。

醫者はどうも、善い事を考へついで、小娘を動物園に連れて往つた。人間に出来ない事で、動物には手もなく出来る事がよくあるものだ。小娘は獅子を見た。虎を見た。新聞記者のやうに忙しきやうにしてゐる豹を見た。辯護士のやうに喋舌くつてゐる小鳥を見たが、何一つ興味を牽かなかつたらしく、相變らず生真面目な顔を仕續けてゐる。

失望した醫者は、最後に小娘を連れて、黒狸々の檻の前に立つた。狸々は手に食物の碎片を持つて、お婆さんのやうに留り木の上に、ちよこなん坐つてゐた。實際べたんな鼻の恰好

から、黒味がちな圓まつちい眼は、お婆さんそつくりだつた。

小娘は狸々を見るに、いきなり檻に駆け寄つた。そして獸の唸るやうな聲で、

「お祖母ちゃん、お祖母ちゃん……」

と呼び立てながら、懐かしきやうに顔を檻に擦りつけた。狸々はそれを見るに、自分が親身のお祖母さんでもあるやうに、留り木かつのつそり降りて來た。そして檻の内から手を伸ばして娘の肩を撫た。娘は嬉しきやうにきやつきやつ輕躁きながら、色々な事を狸々に話しかけた。狸々はまた黙つて小娘のお喋舌に耳を傾けてゐたが、暫くすると、娘をいたはるやうに手に持つた食物の碎片をそつと呉れてやつた。

それ以後啞のやうだつた小娘は、また物を言ひ出した。だが、話す事といつたら、唯もうお祖母さんと、黒狸々の事ばかりである。——實際氣の毒な話だが、お祖母さんにだけはそつと内證にして置きたい。さもないと、腹を立てるかも知れないから。

婦人記者

ある秋、徳川家達公が夫人と一緒に關西旅行をしてゐた時の事、某新聞の婦人記者が、汽車訪問に神戸驛から同じ客車に乗込んだ。禮儀正しい公爵夫人は、紅雀のやうな可愛らしい口もとをして、二言三言記者の問ひに答へてゐた。無論紅雀同志の事だ。精精撒き餌の粟粒か卵の事でも話し合つてゐるらしかつた。

先刻から少し離れた客席で、其の日の新聞紙に讀み耽つてゐたらしい公爵は、ちらと婦人記者の顔を見るなり、不思議さうに二人の會話に聞耳を立ててゐたらしかつたが、暫くすると、讀みさしの新聞を手につつまま、公爵夫人の側にすり寄つて來た。そして重重的い聲で口を切つた。

「あなたが婦人記者かな。」

公爵は南蠻から献上物の小鳥でも見るやうに、しげしげと女記者の身體を見廻した。「社にはあなたの様な方が幾人も居られるのかな。」

婦人記者は紅雀のやうに一寸嬌態をした。

「はい、幾人もゐらつしやいます。」

その實はたつた一人しか居なかつたのだが、婦人記者は將軍家といふものは、往時から眞實の事を聞馴れないものだといふ事を思つて、つい一寸掛値を言つてみたのだつた。

「ふむ。」

公爵は上品な鼻を笛のやうに鳴らして、その儘黙つてしまつた。

米國にゼエムス・リレエといふ詩人がゐる。ある時ポストンへ出掛けて行つてホテルへ泊るとすぐ電話が懸つて來た。出てみると、相手はながし新聞社のジョオンス嬢といふ婦人記者だつた。

婦人記者は美しい聲で、この文人がポストンに來た用向きから、其最近の作物や生活方までこまめに聞き訊した。リレエは丁寧に一々夫に返辭をした、すると、最後に婦人記者は訊いた。「昨今奥様はごちらに入らつしやいます。」

「妻ですか、妻なら多分この電話の片つ方に懸つてるかも知れませんが。」

詩人は世界の端までも聞けるやうな聲で返事をした。すると、矢庭に受話器を叩きつけるやうな音がして電話は切れてしまつた。

ワレエは聞けた獨身者である。

知 行 取

京都の富岡鐵齋氏のところへ、先日宮内省の屬官某といつて四十男がひよつくり訪ねて来た。屬官は山鳩のやうにぐつと胸を反して座敷に通つた。

鐵齋老人は耳が遠いからといふので、息子さんが代りに會ふ事になつた。屬官はちよつぱりした口髯を捻り上げながら、精精勿體をつけて用事の趣を傳へた。——用事といふのは、本省で何かに使ふ木標の文字を鐵齋翁に書いて貰ひたいといふのだ。

「彼是人選の結果が、どうも御老人が指名せられる事になりました。何しろ一代の譽といふものです。一つ奮つて御揮毫が願ひたい。」

屬官は恚う言つて、またしても勿體らしく髯を引張つた。肉の薄い唇は蛙のやうな口元になつた。

「いや有難い仕儀で……」と息子さんは叮嚀に頭を下げた。

「ですが、あなたの方にはHさんといふ立派な書家がいらつしやるぢやありませんか。」

「Hさんですか……」と屬官は相手の高い鼻を見た。

「Hさんは無論居られますが、お仕事の方がつい忙しいもんで……」

「いかさま……」東洋史を専攻した息子さんは、だしぬけに東京中に響き渡るやうな崇高な調子で言つた。屬官は吃驚して目を圓くした。

「忙しいといへば、宅の老人なども貧乏閑なして、逆もお望みに副ふ事は難しからうと思ひますよ。」

「でも御座らうが、政府の御用で、此の上もない御老人の御名譽といふものですから……」屬官は何でも彼でも名譽の一點張りで押しつけようとする積りらしかつた。「御承知の通り、政府の事ですから、別にお禮といつては出ないが、其代りいつ迄もお家の譽れになる事でせうよ。」

癪の強い東洋史の専門家はにやりと笑つた。

「ぢや、手つ取り早く言つたら、其筋の御用だから、唯働きしろと仰有るんですね。」

「ま、そんなものです。何しろ政府の御用で、名譽の次第ですからな。」

「ぢや、一寸伺ひますが……」東洋史の専門家は皮肉に出た。「貴方は、しよつちう政府の御用を仕てゐられる名譽の御境涯だから、別に知行などはお貰ひになりますまいな。」
「よ……」三國官は行き詰つたやうな顔をして、知行の有無を一寸考へるらしい風だつた。夫に何の無理があらう、考へてもしなければ思ひ出せない程、ちよびつりした知行取だつたのだから。

三 哩 の 言 語

英軍が今度の戦争で發明した新しい武器に、龜の甲のやうな「Tank」があるのは知らぬ人もあるまい。英語ではたつた四文字で出来てゐる此の戦車が、獨逸へ行へる Schutzengnabenver-nichtungautomobil といふ、恐ろしく長い名前に變つてゐる。獨逸人は何によらず、鼠の尻尾のやうな長い名前をつけるのが好きな國民である。

だが、英語にも随分長い言葉はある。英語で一番綴りの長い語は何だらうといふ事は往時からよく無駄話の材料にされたもので、ある人は

「Disproportionalness」 といふ二十一文字で出来てゐるのが一番長いといふと、いや、然らざるやない、其外にまだ
「Disestablishmentarianism」 といふ二十四文字で出来てゐる語もあるといつて議論したものだ。

科學者がよく拵へるお手製の複合語には、「Dichlorhydroquinonedisalphonic」 といふ卅文字で出来た語もあるが、しかし語の製造にかけては、みんな科學者も小説家には叶はない。チャアルズ・キングスレーの「ウオオア・ベビース」といふ子供の讀み本を覗いた事のある人は、もつちもつちも長い、まるで蛇のやうな語に出會して、ぎよつちした事がある筈だ。その語は、「Nec-obionePaleoethydrockthoanthropophithekology」 といふ、四十七文字で出来てゐる語だ。もしか一息にこの語を發音する人があつたら、褒美として獨逸帝國を半分進上してもいい。洒落好きな和田垣謙三博士は、大學の教室で學生を前に、英語で一番長い語は何だといふ訊いたものだ。學生が返事に困つて、顔を見合はせてゐると、博士は満足さうにやりこして、「Smiles だ。ののののの間が一哩あるぢやないか。」

と言つて、聲を立てて笑つたものだ。

だが、それは博士が無學だからで、英語にはもつと長い語がある。外でもない。

“Beleaguered”

といふ語で、Beleagueredの間が一リイグある。一リイグは約三哩の長さである。

林檎の冤罪

エデンの花園で、蛇に欺されてイヴが食べた果實を、大抵の人は林檎だと思つてゐるらしいが、それは大きな間違で、あの果實が林檎で無かつたのは、誰よりも私がよく知つてゐる。

歴史家の考證するところによると、エデンの花園といふのは、確にバビロニアの事だつた。ところが、バビロニアには林檎といふものが無かつた。丁度お爺さんの頭に髪の毛が無いと同じやうに。

だが、よく調べてみると、舊約聖書には、何處にも、イヴが林檎を食つたといふ事は載つてゐない。唯樹の實を食つたといふ事だけは確に出てゐる。聖書學者の説によると、樹の實といふ

のは、

“Fructum”

といふ語だつたが、いつとなく夫が、

“pomme”

といふ語に書き更へられてゐた。“pomme”には普通の樹の實と、林檎と、二つの意味があるので、いつの間にかイヴが食つたのは林檎だつたといふ事になつたのだ。

林檎にしてみれば、いい迷惑な話で、人間墮落の原因が、イヴの食つた樹の實にある以上、顔を眞つ赤にしても、この點だけは言ひ争つて置かなければならぬ。唯林檎には口が無い。そして友達に辯護士も居なかつたので、今日まで黙つてゐたのに過ぎなかつた。

さきの章で、英語で一番綴りの長い語の事を言つたが、ここに林檎の冤罪を雪いだ尋でに世界中で一番長い名前をお知らせする。それは英國の洗濯屋アアサア・ベツバアといふ男の一人娘の名前で、附けも附けたり

Anna Bertha Cecilia Diana Emily Fanny Gertrude Hypatia Inez

名香大内山

Jane Kate Louisa Mauda Nora Ophelia Peper Quince Rebecca Sarah
Teresa Ulysses Venus Winifred Xenophon Yetty Zeus
といふ長つたらしいものだ。アルフベットが順々に頭文字に置き列べてある所が一寸面白
い。

こないだ東京美術倶楽部で行はれた水戸家の賣立會には、色々好者の眼を聳てさせる物が、
それぞれ素晴らしい價で取引せられたやうであつたが、そのなかに香木大内山が七萬一千二百圓
で大阪の戸田の手に落ちたのには一寸驚かせられた。
大内山といへば、目方が百七十匁に過ぎない香木である。アメリカ人臭い物の見方をするや
うだが、一匁さつと四百圓強となる勘定だ。人間の靈魂が胡桃のやうに安く取引される日本で
は、少し桁はづれである。

この大内山こそ、名高い奈良東大寺正倉院の蘭奢待と同じ香木なのである。蘭奢待といへば

むかし西蕃から渡來した黄熟香を、時の帝聖武が蘭奢待の三字に寺の名を入れて、その儘東大
寺の寶藏に納められた稀代の沈香で、正倉院の目錄によると、重量二貫五百目、長さ五尺二寸
本口周り三尺九寸、本口直径一尺四寸、末口周り一尺五寸、末口直径七寸といふ事だ。

この香木は、朝廷からその時々功臣に賜つた例があつて、足利尊氏は一寸八分を切り取つ
た。寛正六年には義政が切り取つた。元龜三年には信長が一寸八分を、慶長七年には家康がまた
切り取つた。家康がいくら切り取つたかは、その當時自分が立合はなかつたからよくは知らな
いが、名代の狸爺の事だから、いづれは古例の一寸八分より餘分にたんこ切り取つて、その一部が
今度七萬何千圓といふ事になつたのかも知れない。

恚ういふ名香になると、香聞をするに嗅鼻が痺れてしまつて、暫らくは物の役に立たなくなる
ちやうど激しい戀をした後の心の臟に僧侶さんのお説教が聞けなくなると同じやうなもので。
そんな鼻の痺れを治すのには、外にまた結構な名香がある。不思議な事にその名香は一寸四
百圓よりすつと廉いが、人間のする事には、何かと手拔りの多い世間だから、そこに氣の注い
た人は、早くこの名香の買占をやつておく事だ。それは外でもない、臺所の隅つこにある糠味

各國元首の收入

アメリカといへば、那の通りの大金持の國だから、那國の大統領は、定めし素晴らしい俸給を取らうと、大抵の人は思つてゐるらしいが、打明けていふと年俸七五〇〇〇弗と、出張旅費年額二五〇〇〇弗を受取るに過ぎない。こんなほつちりした俸給では、定めし生活も難しからうといふ譯でもあるまいが、白聖館の家賃だけは、別に収立てない事にしてある。

英國皇室の費用は、これまで年額三・一〇五・〇〇〇弗といふ事になつてゐるが、これだけでは迎も足りないといふので、最近議會の協賛を経て一年に六五・〇〇〇弗づつ増額する事になつてゐる。

今は廢帝の獨逸皇帝は、あの通り八方に手を延ばしたので、入費も從つて多かつたといふ事

皇室費の事ではいつも不足を言つてゐた。尤も獨逸帝國の皇帝としては定つた報酬といふものはなく、唯年額六五〇・〇〇〇弗の收入があるに過ぎなかつたが、皇帝は別に普魯西王として、年額三・一五〇・〇〇〇弗といふ收入があつた。それでもまだ十分ではないといふ見えて、皇帝は話が金銭の事になるといつも「足りない、足りない。」と言つて歎してゐた。

伊太利の王室費は三・二〇〇・〇〇〇弗といふ事になつてゐるが、五六年このかた、經費多端で不足がちだといふ事を聞いてゐる。その外歐洲各國の王室費では西班牙のが一・八五〇・〇〇〇弗、自耳義のが八七五・〇〇〇弗、丁抹のが三四五・〇〇〇弗、和蘭のが五二五・〇〇〇弗といふ事だ。

恁ういふ元首連に比べて、最も裕福だつたのは、露西亞の廢帝で莫大な私有財産を有つてゐたのみならず、皇室費もまた殆ど無類で年額八・一七九・〇〇〇弗といふ高に上つてゐたのを思ふと、今の貧しい、不自由な生活が氣の毒でならない。

佛蘭西の大統領は年俸二四〇・〇〇〇弗で、交際費も出張旅費も、みんな此のなかから支辨する事になつてゐる。——これで見ると、一番金持の多い米國の大統領が、一番懐中加

木堂と湖南

減が寒い勘定になる。

自分の黨員を減らす事にかけて、一種の天才を持つてゐる犬養木堂も、書物だけはきんぎん買ひ殖やす事が好きらしい。

犬養氏が長年の間、閑暇と鑑識にまかせて購ひ集めた書物が、二階の一室にぎつしり詰まつた時、氏は目尻を皺くちやにして喜んだが、それを見てたつた一人そつと溜息を吐いた人があつた。他でもないそれは犬養夫人であつた。

ある朝、犬養氏が鼠のやうな口元をして味噌汁を吸つてゐると、夫人は側から呼びかけた。

「貴方、天井が危かありますまいか。」

味噌汁の味と支那の事をこちやこちやに考へてゐた氏は、きよんとして眼つきで夫人の顔を見た。

「天井がどうしたと言ふのかな。」

「危かなからうかご伺つたんですよ。」夫人は心配さうな眼をして天井を見た。

「あんなにぎつしり書物が載つかつてゐるんで御座いませう。ひよつとかすると梁が折れやしないかと思つて。」

「まさか。ははは……」犬養氏は聲を立てて笑つた。そして女といふものは、詰らぬ心配をするものだと思つたが、直ぐまた急に牛真面目になつて、支那の事を心配し出した。犬養氏の考へによると、女は天國や天井の事を氣遣つても差支へないが、男は只もう支那の事だけ心配して居ればいい事になつてゐるらしい。

こんな談話を取り更はされてから、もの十日も経たぬうち、犬養氏に出入の古本屋の店では二階に積み重ねた書物の重みで、天井の梁が折れて、店にゐた亭主と番頭とは、その下敷になつてしたたか背骨を痛めた事があつた。

「そら、御覽なさい、用心しないよ、宅でもあんな事が起きないよも限りませんよ。」

夫人はこの機會を取り外さなかつた。書物といふものは、人の頭を悪くするばかりか、どうかすると背骨を折る事もあるものだと思つた犬養氏は、夫人に説きつけられて、溢々書庫を建

でる事にした。

「これでもう天井の落ちる心配もなくなつた。書庫が出来上ると、犬養氏は夜着のなかで、心して蛙のやうに兩脚を踏み延ばした。だが、内藤(湖南)の宅は劍呑だ、あすこの二階には俺よりつと澤山書物が詰まつてるんだからな。」と眼をばちくりさせながら、天井をつめてゐたが「今度内藤に逢つたら、何でも一つ庫を建てるやうに勧めてやらう、庫さへあつたら安心して支那の事が心配出来るんだからな。」

内證で内藤氏に知らせる。天井を落すまいとするには、何も書庫を建てる必要はない。時々二階にある書物を賣拂ふ事だ、書物を賣るといふ事は、書物を買ふのと同じやうに人間を賢くするものである。

話

題

「近世雄辯學」の著者、トオマス・リイドが、共和黨の闘士として米國の議會で鳴らしてゐた頃の事、ある日仲のいい友達二人でポオトランドの或る俱樂部に往つた事があつた。

二人は外套室に外套を置いて、かねて馴染の小ぢんまりした部屋に入つて往つた。そして香氣の高いココアを啜りながら、好きなお喋舌に語り耽つた。

リイドは無論好きな政治の事をたんと話したが、政治の話が盡きると、法律の話をした。嘘ばかりで眞實の事がほつちりしかない書物の事、男といふものを手帛のやうに掌面で揉みくしやにする女の事——さういふ事柄について次ぎから次へ話しを續けたが、さうと話題が切れ、二人は立ち上がった。

もこの外套室に歸つて、めいめい外套を着込もうとする際、リイドの友達は何ヶツトに手で突込むでゐたが、一寸不思議さうな顔をして、革表紙の大形の手帳をその中から引張り出した。

「何うしたんだらう、こんな見覚えのない手帳が僕の外套に入つてる。」

雄辯家は外套の袖に片手を突込むだ儘、奴風のやうな恰好を言つた。

「誰か外の人が自分の外套と間違つて入れて置いたんだね。」

「何うしたもんだらう。」

「それは斯うするんだ。まあ、君も一度外套を脱ぎ給へ。」リイドは先きに立つてまた外套

を脱いだ。「丁度話題が無くなって歸らうとしてゐたところだ。折角だから、この手帳を持って往つて、この中に書いてある事で今暫く話して往かうぢやないか。」

二人は笑ひながら、また以前の部室へ後戻りをした。手帳にこんな事が書きこめてあつたかは私も知らない。

五十仙の損失

米國民主黨の政治家ブライアン氏がこないだ米國南部のある市へ講演に出掛けた事があつた汽車がその市へ着くと、ブライアン氏は幾年か前に自分がそこへ来て、講演をした事があるのを懐ひ出した。

「こんな講演をしたか、想ひ出したいもんだな。」

この政治家は禿けあがつた前額を押へてじつと考へ込んだ。凡ての講演家にはそれぞれ定つた出し物がある。知らないで、同じ土地で同じ出し物を繰返すなどは、餘り氣の利いた話でもなかつた。

自動車はこの政治家を載せて、講演のある大きな建物に走つた。そして廣くした玄関前にびたりと止まると、ブライアン氏は以前の會場もやはりここだつたなと思つた。そこに衝立つてゐた門番の爺さんは、にこにこもので出て来て、丁寧に白髪頭を下けた。

「これはこれは旦那様でいらつしやいますか。お久しぶりにお目に懸ります。」

その瞬間、ブライアン氏の頭に一筋の光明が射した。この雄辯家は今日まで自分の方も相手の皺くちやな顔をよく覚えてゐたやうな調子で話しかけた。

「お前も達者でいいな。確か以前私がここでお喋舌をした事があつたが、あれからすつと此處に勤めてゐるのかい。」

「はい、よく覚えてゐりますでございます。爺さんはまた頭を下けた。あの頃からすつと引續いて勤めさせて戴いてゐります。」

「さうだつたか。ところで……」とブライアン氏は眩しさうな眼つきで爺さんの顔を見た。「お前覚えてはゐるからうね、その折私が此處で何をやつたかつて事を。」

「はい、はい。よく覚えてゐりますでございます。爺さんは溶けさうな顔になつた。旦那様はあ

の折、手前に五十仙下さりましてござりまする。」
ブライアンは仕方がなくポケットから五十仙を出して、爺さんの掌面に載せてやつた。――
だが、以前の演題はとうと思ひ出せなかつた。

戀 病 ひ

中村雀右衛門に次いで、尾上多見藏の襲名があり、春の道頓堀では嵐徳三郎が、亡父の二十五年忌を機に、四代目璃寛の名跡を相續するとの噂がある。行き詰つた俳優連が襲名によつて人氣を新しくし、それと同時に自分の技藝にも一飛躍を企てやうとするのは、強ち間違つた仕方でもない。

徳三郎の父親、三代目璃寛は、鏡山のお初が得意だつたので、今度徳三郎の襲名興行にも鏡山を出す事になるかも知れないが、その三代目璃寛のお初については哀れな逸話が残つてゐる。
璃寛が萬延元年道頓堀築後の芝居で、和三郎から初めて徳三郎になつた折の事で、ある日北船場の物持平野屋の一族が西棧敷の幾つかを買ひ切つて、見物に来てゐたが、そのなかに別家

の一人娘お常といふのがゐて、徳三郎の優姿を見初めて、顔を杏のやうに赧くした。

それから二月三月して、徳三郎はまた堀江の芝居にかかつた。出し物は鏡山のお初で、大阪中は引繰返るやうな人氣が立つた。お常はそれを聞くに、もう起つても居てもゐられなくなつた。お常には許嫁があつたが、戀をする身には許嫁などは、文久錢ほどの價値もなかつた。

お常は三十日の芝居を、十八日まで続け様に、通ひ詰めたが、何うしても徳三郎と言葉を交はす事が出来なかつた。會つて言葉を交したところで、相手が俳優の事だ、たゞ物が京白粉の話でもして、にやつと笑ふ位の事しか出来なかつたが、夫もお常はその一言に生命までも思ひ込んだ。

お常はとうと戀病に取つ憑かれた。徳三郎がお初の似顔繪を抱いたまま、焦れ死に死にかかつた。娘の不心得を怒つた両親も、末期の哀れさに、傳手をもとめて徳三郎を招いた。そして末期の水をその手から掬ませると、娘は小鳥のやうな口許をして水を飲んだが、そのまま息が絶へてしまつた。

今の徳三郎がお初を演るにしたら、どんな事になるだらう、戀女を焦死させる代りに事に

苦力と料理人

よつたら劇評家を氣絶させるかも知れない。

ながく支那に居て、彼國の事情によく通じてゐる加奈陀出身の青年將校が、西部戦線の後方勤務に支那苦力を使つたらよいので、其募集に最近支那へ派遣せられて往つた。金銭さへ儲かつたら、地獄へでも下りて往くのが支那人の慣しである。手當が良いといふので、苦力は苦もなく集まつた。青年將校は夫を一纏めに船に乗せて、馬耳塞をさして海へ出た。

船が印度洋を通りかかつた頃、青年將校は苦力と賄ひ方との間に激しい喧嘩がおつ始まつてゐるのに氣が注いだ。

賄ひ方は廣東人だつた。鶯鳥のやうに口を尖らして我鳴り立ててゐた苦力は、將校の姿を見ると、慌ててお辭儀をした。

「旦那、此奴あ、怪しからん奴なんです。これから皆で叩き殺してやらうと思つてる所なんで

す。さうか其處で見てるて下さい。」

なかの一人は恚う言つて肩を聳やかした。

「賄方をやつつけるんだつて。」青年將校は強て氣を落ちつけるやうに薄い鼻髯を引張つた。

「それも面白からう。だが、前もつて腹をきめて置かんければならんのは、賄方を殺すと、馬耳塞へ着くまで、お前達は飲まず食はずに居なければならんぞ。」

夫を聞くと、苦力達は驚いたやうに顔を見合はせた。將校は苦力の人夫頭を顎でしやくつた。

「さうしたつて言ふんだ。賄が良くないつて言ふのかい。」

「いいね、賄は別に悪ありません。」人夫頭は頭を下げた。

「それぢや、賄の分量が足りないでも言ふのか。」

「いいね、賄は十分にありますので。」

「はてな、將校は小首を傾けた。ぢや、料理が不味いでも言ふんだな。」

「いいね、お料理はなかなか巧く出来上つてきます。」

「それぢや、何だつて賄方を殺すなんて騒ぎ立らんだ。」若い將校は顔に痾癩筋をおつ立て

た。「馬鹿者が……」

「はい……」人夫頭は面目なさうに頭へ手をやつた。

「何だつて申しますと、此奴の拵へるお料理は、さうもお腹に持堪へがなくなつて、直ぐ腹が空いちまふもんですからね。」

賄方の、餘り庖丁加減が上手なので、食物の消化が良すぎたのだつた。

鴈治郎のお上手

浪花節の雲右衛門がまだ全盛を極めてゐた頃、ある時東京の實業家Kの座敷で鴈治郎、延若福助といつたやうな大阪俳優と一緒にゐた事があつた。

酒が一頻りまはると、お上手ものの鴈治郎は、髪の毛の長い雲右衛門を振りかへつた。

「雲右衛門さん、私あんたの浪花節を聴く度に、いつも思つてまんのやぜ。」とぐつと飲み干した盃を雲右衛門にさした。「一度あんたの出語りで、私が大石良雄を演つてみたら何うやらと思つてな。」

それを聞くに、延若福助は、「また例の成駒屋のお上手が始まつたに、互に顔を見合はせて首を辣めたが、正直者の雲右衛門は急に蜂蜜のやうに溶けさうな顔になつた。」

「そりや面白うござすな、一つ演つてみようぢやござりませんか。」安物の武士道の鼓吹者は、血を啜るやうな氣持で、ぐつと熱燗の酒を呷飲つた。「お互に一世一代の積りでな。」

「そりや、もう一世一代だんがな。」鴈治郎は相手が直に乗氣になつて出たので、少々尻込みをし出した。「そりや、そない芝居をするに、今の仕打さんではまるで當にならんし、劇場から借りん事にはあきまへんぜ……」

「劇場なら乃公が心配しよう。」それ迄黙つて二人の談話を聴いてゐた實業家は、横つちよから口を出した。「折角の企てぢや、劇場は乃公が何と心配する事にしようが、出し物が大石なら尋でに喜剣を河内屋に付き合つて貰つたら何うぢや。」

「そやつたら、私喜んで出まんがな。」悪戯者の延若は、鴈治郎の困るのが面白さに、一膝前へ乗り出して來た。そして喜剣と岡平と九太夫とをこつちやにしたやうな表情をしながら鴈治郎に言つた。「兄さん、いつ頃演らばりまんね、私も出るに、身體の都合をしとかなりまへ

んさかいな。」

「そやなあ……」鴈治郎は武士道の鼓吹者から受取つた盃を唇に當てたまま、小鳥のやうに狼狽へた眼つきをした。火のやうな酒が咽喉を滑つて、胃の腑へ落たと思ふと、鴈治郎は急に自分が胃の腑を持つてゐる事に気がついた。「私この頃胃が悪うおますよつてな。此の方が癒り次第演る事にしまへうかいな。」

談話はそれなりになつた。喜剣をする筈の延若は、その後福助に會つて笑ひ話をした。

「成駒屋も正直やな、あれが仁左衛門やつて見なはれ、稽古にかかつてから、そない語り口やと乃公が出られへんよ小言を食はせて、あべこべに雲の方から謝らせまんがな。」
成程鴈治郎は正直者かも知れない、延若のやうな不正直者の多い今の世の中では……

獨帝への進物

西部戦線の聯合軍を援けに、最近本國から巴里へ渡つた米國青年士官の二人があつた。佛蘭西の婦人達は持前のお愛嬌と行き届いた接待とで、この遠來のお客をもてなした。

米國人にまつて、巴里はある意味において天國で、佛蘭西娘はまた羽の生れた天使である。その天使の一人が、ある日の事二人の士官を案内して、ヴェルサイユの宮殿へ見物に出掛けて往つたものだ。

ヴェルサイユには名高い庭園がある。佛蘭西娘はその繁みのなかへ、二人の士官を引張つて往つた。

「そこに常春藤が植わつてよ。往つて葉つ葉の小さいのを搜して入らつしやいよ。常春藤の葉つ葉は、小さければ小さい程愛情が深いんですつて。貴郎方も成るだけ小さいのを摘んで来て、お國に待つてらつしやる方に送つて上げるといいわ。」

娘は恚う言つて、幾度か常春藤の葉の小さいのを搜したらしい眼を細めて、眩しさに二人の顔を見た。

「さうですか、そんな言ひ慣はしが有つたんですか。ちや、往つて葉つ葉を搜して來ませうかな。」

二人の青年士官は元氣よく繁みのなかへ入つて往つた。娘はバラソルの先きで戦争に出てる

る戀しい男の名前を地面に書いては、踏み消したりなぞしてゐた。
暫くすると、士官の一人が口笛を吹きながら歸つて來た。手には素晴しく大きな常春藤の莖を摘むでゐた。

「まあ、大きな葉つ葉だわね。」娘は吃驚して眼を睜つた。

「誰にお送りになるの。わたし成るだけ小さいのを捜してらつしやいと云つたぢやないの。」
「そんなに聞きました。」士官は氣もなく言つた。「だが、私の送るのは、家の養母なんですからね。」

「まあ……」と言つて娘は金絲雀のやうに聲を立てて笑つた。

すると、その途端今一人の士官が元氣よく大跨に繁みのなかから飛び出して來た。手には友達によかつと大きな葉つ葉を摘むで、自慢さうに夫を二人にひけらかした。

「まあ、貴方のはすば抜けて大きいわね。誰にお上げになるの。」娘はくすくす笑ひながら訊いた。

「私の好きな人。」士官は眼で笑ひを返した。

「だあれ。」娘は嬌へるやうな態度をした。

「獨帝です。」

士官は吐き出すやうに言つて、葉つ葉を地面に投げ捨てた。そして思ひきり強く風の踵で踏みにじつた。

酒造禁止法案

京都大學教授法學博士M氏は憲法學者だが、憲法があつて酒のない國に、酒があつて憲法のない國に、どつちかといへば、二つ返事で後の方を選ぶほどの酒好きである。

ところが、M氏の親兄弟は揃ひも揃つて、堅い基督教信者である。日本の基督教信者は餘り人前では酒を飲まない。尤も耶穌は平氣で葡萄酒を飲んだが、日本の基督教は耶穌が見た事も聞いた事もなかつた亞米利加を経て來たもので、彼地は植民地だけに好い酒がない。悪い酒は悪い書物と同じやうに頭を悪くするものなので、基督教信者は酒を飲むではならない事になつたのださうだ。この意味においてM氏の親兄弟が酒を飲まないのは間違つてはゐなかつた。M氏

は好い酒のない土佐の産だつたから。

ある時M氏の家に、何か祝ひ事があつて皆が食卓に並んだ。そのなかには無論憲法學者も交つてゐた。愈々皆が箸を執らうとするに、老つたM氏の父は食前の祈禱を始めた。

「主よ、主が吾が一家の上に垂れ給うた御恵みを感謝いたします。ここに列りました家族の中に一人の御心に叶はざるものがありますけれど……」

式の如く頭を垂れて溫和しく祈禱に聞きとれてゐた憲法學者はひよいと聴耳を立てた。

「一人の御心に叶はざるもの……はて誰だらうな。」

學者は眼をあけて、そこに居並んだ家族の顔を見比べた。皆胡桃のやうに堅い基督信者で、御心に叶つたらしい羊のやうな眼もををしてゐた。

「するに俺かな。御心に叶はざる者つていふのは。」憲法學者は額にあててゐた掌面で頸窩を押へた。「いくら親爺にしても餘りひびい事を言つたものだ。神様に聞かないからいいやうなもの、若しかお耳にでも入つたら困るぢないか。」

そのM氏は、この十六日に第三高等學校で催される學生達の擬國會に在野黨の首領として出

席する事になつてゐる。ところが、在野黨側の學生は、食糧不足に對する一つの應急策として、酒造禁止法案を提出する事に決めたので、その説明の任に當らなければならぬ筈のM氏は、困り切つて學生に妥協を申し出た。

「いくら何でも僕に酒造禁止法案の説明をさせるなんて、餘りぢやないか。」憲法學者は二日酔ひの顔を手帛のやうに兩掌の掌面で揉みくしやにした。「酒の爲に潰す米なんて知れたもんだよ。往時から馬鹿の大食ひといつて、馬鹿が一等澤山米を食ふのだ。で、わが黨から一つ馬鹿禁止法案を出したらごんなんたらう。」

「馬鹿禁止法案ですつて。學生はお互に顔を見合はせた。そしてこれもこれも氣恥かしさうにそつと頭へ手をやつた。」いね、やはり酒造禁止の方に願つておきませうよ。」

文豪の娘

十九世紀の英國作家のなかに、ジョン・ウイルソンといふ男がゐた。ブラックウッド雜誌に立て籠つて、クリストファ・ノウスといふ雅號で、何でもござれといつた風に、いろんな方面

に得意の才筆を振つた男だ。

そのウィルソンに美しい娘が一人あつた。女が妙齡になれば、いろんな男が訪ねて来るもので、この作家の應接間には、娘を目的の若い男が次ぎから次へこやつて来た。そのなかに一人の若い大學教授が交つてゐたが、娘はこの男が氣に入つて嬉しい戀なかになつた。

大學教授は愈々結婚を申し込まなければならぬ順序になつたが、残念な事には、この學者は内氣な羞耻家で、他人の書物に書いてある事を紹介する折にも顔を赧めないで居られない程だつたから、自分の戀を打明けるには、酸漿のやうに心から眞紅にならない譯に往かなかつた。

「私には逆も貴方の阿父様にお目にかかる勇氣がありません。大學教授は娘の家の應接間で、もうすつかり紅くなつて言つた。さうか、貴女御自身で言つて下さい、後生ですから。」

「阿父様、阿父さまなら、今書齋にいらつしてよ、往つてらつしやいな。」

娘は幾らか調弄ひ氣味で平氣な顔をして言つた。

「とてもとても。私がお目に懸つたら、却てごんちんかんの御挨拶をしてしまひますよ。」

若い學者は深い溜息をついた。

「貴女往つて打明けて下さい。私はここでお待ちしてゐますから。」

娘は笑ひ笑ひ父の書齋に入つて往つた。父は卓子にもたれて何か頻りに書きなぐつてゐた。娘は嬌へるやうに父の手をとつた。そして教授がたつた今自分に結婚を申込んだ事を話して

「あの方は大層内氣でいらつしやるから、御自分には阿父様に申しあげかねると仰有つてよ。」と附け足した。

「さうか、そんな方だつたら、丁寧に氣をつけて上なくちやなりませんぞ。」

作家は娘の顔を見ながら言つた。

「それぢや、口づから何だから、紙片に返事を書いて、針でお前の背にこめておくしませう。」

作家は机の上の紙片を取つて何か書いた。そして態々それを針でもつて娘の背に縫こめた。

「阿父様の御返事は私の背に書いてあつてよ。」

娘は上機嫌で應接間にかへつて来た。内氣な教授は後方にまはつて見た。紙片には

「謹呈 作者より」
と書いてあつた。

婦人と運轉手

西部戦線における米國派遣軍の司令官、パーシング將軍が、最近軍事上の要務で倫敦を訪ねて往つた事があつた。將軍を自動車でその旅館まで送りつけたのは、金髪の美しい婦人運轉手であつた。

將軍は婦人運轉手のかひがひしい働き風から感心した。で、倫敦に居るうちは、同じ事なら、慥うした美しく、加之に氣の利いた運轉手の厄介になりたいものだと思つた。將軍は運轉手を呼び戻した。

「明日朝六時に陸軍省まで出掛けたいと思ふが、その時間きつちりにここまで出迎へに来て貰へまいかの。」

「畏まりました。」婦人運轉手は愛想よく答へた。「それ迄に屹度お迎へにあがります。」

夜が明けて六時前になると將軍はちやんちやん軍服を着込んで、旅館の階段に立つてゐた。すべて軍人といふものには、是といつて別に取柄のないのが多いが、唯一つきちんきちん時間を守るのだけは賞めて置かなければならぬ。

將軍はポケットから時計を引張り出して見た。ちやうど今六時が打つた。將軍は眇のやうな眼つきをして市街を見た。そこには自動車の影も見えなかつた。一分経つた。二分経つた。將軍がもじもじ身體を動かさながら呟いてゐるに、やがて、美しい金髪を波のやうに吹かせながら、昨日の婦人運轉手が、勢ひよく自動車を乗りつけて來た。

將軍は流石に顔の筋一つ動かさなかつたが、唯片眼を鼻のやうに、ばちりと瞬きした。そして今迄見つけてゐた時計をポケットにしまひ込みながら、娘に言つた。

「お前さん、約束よか三分遅れたな。」

「はあ、三分遅れましたか……」勝氣な娘は、鼻のやうな瞬きが氣に入らなかつた。で思ひ切つた皮肉を投げつけた。

「でも、貴下が三年ばかり遅れて往らしたのに比べると、何でもありませんわ。」

歌の師匠

米國の出兵を丁度よい潮時だと思ひ込むでゐた將軍は、夫を三年ばかり遅れてゐると聞いて眼を圓くして驚いた。

夏目漱石がふだん仲のよかつた某博士と一緒に、横濱の富豪原富太郎氏を訪ねた事があつた。原氏は名高い美術骨董好きで、金に飽かせて古い由緒のある藝術品を購ひ込むと同時に、美術院の畫家達の面倒をも見てゐる人である。

世間の富豪で、乃公は藝術が好きだといつて、それを自慢にする輩は、大抵先づ美術骨董へ手を出す事に極つてゐる。美術骨董は多くの場合、富豪の眼を娛ませる外に、財産として、子や孫に残す事が出来るからである。次ぎにはそろそろ音楽を始め。音楽は耳を慰める外に、拙ながら自分でも演奏者となる事が出来るからである。最後は文學だが、富豪でゐて、ほんとうに文學を愛するといふ者は滅多に見たことがない。文學は直接に思想を取扱ふものだけに、財産として自分のうちの土蔵にしまつておく事が出来ない許りか、さうかするに夫を弄んでゐ

る者の手を傷けるからである。

原富太郎氏も自分の道樂を美術骨董に限つておく方の一人である。だから氏の土蔵には書畫骨董が財産としてしまつたまま積み重ねてある。そのなかには實際世にも珍しい逸品が少くはない。二人の文學博士は、それを見せて貰ひたさに態々訪ねて往つたのだ。——夏目漱石を博士呼ばはりをするに、博士號など熨斗つきの儘送り返したのだと言つて、苦い顔をするかも知れないが、まあさ、辛抱して貰ひたい。さもないと今一人の博士が顔を赧くして機りを悪がるかも知れないから。

原氏の宅では書畫を見せた後で、博士二人を御馳走した。その折給仕に出たのは、廿歳ばかりの可愛い顔をした小間使で、膝の上でお盆を弄りながら、頻に漱石氏の顔に見られてゐた。漱石氏はその日はいつもと同じやうに薄痘のある顔をしてゐた。

その小間使はふだんから歌よみのS氏について歌を習つてゐた。蟋蟀や蛙のやうな勞働者まで歌を咏む世の中に、美しい小間使が歌を咏むでならないといふ法はない。二人のお客が歸つた其の晩、小間使は久しぶりに師匠あてに長々と手紙を書いた。そのなかには「今日始

めて夏目さんにお目に懸りました。きんなお方か、一度お會ひ申したいと思つてゐた願が届いて、お給仕までする事が出来ました。こんな嬉しい事のあつた後だから、私はもしや今夜中に死にはしますまいかと氣遣はれますので、先生宛にこの手紙を書きました」といふ様な文句があつた。

それを見たS氏は早速夏目博士にその事を話した。

「あなたにお目に懸つた後なんで、もしや其晩中に頓死しやすいかと氣遣つたのださうですよ。可愛らしいもんですな。」

S氏は、三十一文字の講釋を、ビスケットを食べるために、母親が態々産みつけたらしい口もごを穿めて言つた。夏目博士はにやりとした。

「あの小間使は君のお弟子なんですか。」

「はあ、弟子ですよ、歌もなかなかやりますよ。」

「それぢや君にお勧めするが……」夏目博士は猫のやうな哲學者らしい顔をした。「そんな見わた透いた嘘をつく女は破門しておしまひなさい。」

「わ、破門ですつて。」S氏は眼をきよらきよらさせた。そして歌を咏まないものは、やつぱり情に乏しいといつたやうな表情をした。

海洋自由問題

講和會議の席上で、海洋自由の問題が、英國と米國との間にさうやら難かしいこたはりを拵へさうになつて来た。事によつたら雙方とも負けず劣らず軍艦を拵へ出すやうになるかも知れないが、恚ういふ問題を解決するには、そんな意氣込みも無くては叶ふまい。

むかしむかし、埃及にアマアシスといふ王様があつた。王様にしておくのは勿體ない程の物識で數多い學者のなかには、この人のお蔭になつたのも少くはなかつた。ところが、その頃エシオピアにも學問好きの王様があつて、閑さへあるに難しい問題を擔ぎ出して来て、埃及王の智慧比べをしたものだ。それも普通の智慧比べは違つて、狭からぬ土地を賭けて、互に領地の遣り取をしたものだ。實際今時の武力で領土の遣り取を定める状態に比べたなら、王様の智慧比べの方が罪がなくて、加之に人を殺さないだけでも良いかも知れない。

エシオピア王は、ある時素敵に難かしい問題を擔ぎ出して來た。それは埃及王がもしか海の水をすつかり飲み干す事が出来たなら、自分の領土にある幾つかの都を譲り渡さう、その代りそれが出来なかつたらエンフワンチー一帯の土地をそっくり自分の方に渡して欲しいといふのだ。

「海の水を飲み干せといふのだ。さうしたもんだらうて。」

埃及王は賢い筈の家來達を幾人か集めて相談をしたが、誰ひとりいい考へを持つてゐなかつた。埃及王は豫て自分が智慧袋にしてゐる希臘の哲學者ピヤスに使を立てて訊く事に定めた。

ピヤスは多くの友達と一緒に、コリンスのある宴會に招れて往つてゐた。埃及王の使者はそこまで尋ねて往つて使ひの趣を通じた。

「あれだけ多くの人民を支配し、あれだけ廣い土地を有つてゐながら、何が不足でまた海まで飲み干さうといふのだな。」

哲學者は御馳走にくちくちなつた腹を抱へて笑ひ笑ひ言つた。

「先生方はお笑ひになるかも知れませんが、夫が出来なかつたら、王様の御領内をエシオピア

王に捲き上げられてしまふのです。」

使者は小鳥のやうに頼りなさうな目付をした。

「それぢや、エシオピア王に怒う言つて返事をするがいい。」

哲學者は即座に言つて聞かせた。「いかにもお言葉通り海は飲み干しませうから、その代り海へ入つて來る世界中の河といふ河の水を、すつかり堰どめて戴きたいと言つて。」

その場に居合はす多くの賢人達は、夫を聞いてピヤスの頓智にすつかり感心してしまつたといふ事だ。

海洋自由の問題も、さうかしてこんな事で解決はつかないもの知ら。

鏡

松井須磨子が出世狂言「ノラ」の作者、諾威の詩人イブセンは色々人々異つた癖をたんと持つてゐたが、頭髮の好みなども其の一つで、普通ならば綺麗に櫛の目が立つたのがよかりさうなものなのに、その人は、

「こんな、ちやんとしてゐるのは一向詩人らしくない。」
 と言つて、油もつけねば、櫛も入れず、いつも鳥の巢のやうな頭をして得意でゐたものだ。
 だから帽子なども世間に入り觸れたのでは氣に入らないで、いつもなかに鏡の仕掛けのあるのを冠つてゐた。そして人を訪ねる時先へ来るに、極つたやうに一寸帽子を脱いで、自分の頭をうつつして見たものだ。もしか髪の毛がちやんと綺麗に押へつけられてゐても、自己ブセンは不機嫌な顔をして、

「直ぐもうこれだ。厭になつちまふ。」

と言ひ言ひ、片手を髪の毛のなかに突つ込んで、なかから兎でも追ひ出すやうに、暴に引つ撥きまはす。そして頭が鳥の巢のやうに亂れて来るに、漸と氣に入つたやうににやりと笑ひながら、案内を頼んだものださうだ。

幕末の志士、佐久間象山は、ああいふ氣象の激しい人に似合はず、懐中にはいつも鏡を忍ばせてゐた。獨で黙つて考へ込んでゐる時でも、人との口論する時でも（世の中には人との口論する時の外は、いつも黙りこんでゐる人がよくある、象山がそんな人だつたか、さうだかは知らな

い。さうかすると、思ひ出したやうに懐中から鏡を取り出して、じつと見入つたものだ。何だつてそんな真似をするのだと訊くと、象山は馬のやうに長い顔をしかめて、

「人間の心はその儘顔に現れるものだ。乃公は憊うして自分を戒めてゐるのだ。」

と言ひ言ひしてゐた。偶に相手が鳥の羽のやうに薄つ片な事でも言ひ出すと、象山は直に懐中へ手を突つ込んで、

「まあ、一寸お前の顔を見るがいい。」

と、鏡を取出して見せたものだ。そして相手があんぐり口を開けて、齶齒の痛みを覗き込まうとも、そんな事は頓着しなかつた。

運

むかし英吉利にダヴキッド・ヒユムといふ懷疑派の哲學者があつた。或日エデンバラの市街を歩いてゐる時さうした機みか橋から滑り落ちて、沼に陥つた事があつた。馬のやうな正直者すら、偶には橋から骨りほちる事のある世の中だ。哲學者が沼にはまるのに少しも不思議は

ない筈だ。

ヒユウムは蛙のやうな恰好をして、泥濘のなかを泳ぎまはつた。不信心な哲學者に當てつたやうに、その日は誰ひとり橋の上を通りかかるとはなかつた。

ヒユウムは人生問題の研究も、何もかも忘れてしまつて、身體ぢう泥だらけになつて腕いたが、さて何うする事も出来なかつた。

漸と時が経つて、一人のお婆さんがそこを通りかかつた。哲學者は蛙のやうに沼のなかから泣き聲を立てた。

「お婆さん、ちよつと手を貸しておくれ。先刻からここに落つちて困つてゐるんだ。」

お婆さんは信心深い女で、平素から教會で人を助け上げるのは大層立派な行ひだといふ事を教はつてゐた。それが溝からであらうと、墨汁壺からであらうと、そんな事は同じであつた。婆さんは前屈みに手を伸ばしたが、ひよいと泥の中に立つてゐる男の顔を見ると、慌て手を引つこめた。

「お前さんはヒユウムさんぢやないかね。」婆さんは残り少々の齒を狗のやうに露いてみせた。

「平素神信心をしない罰だよ。いいね、善い罰だよ。幾ら助けたいにも、お前さんだぞ知つちや、助けられないぢやないか。」

懷疑哲學者はべそを掻き出しさうな顔をして、婆さんをふり仰いだ。

「まあさ、そんなに言はないで手を貸しておくれよ、私だつて神信心しない事があるもんかよ。」

「いや、信じなさらぬ、その證據にはいつもマリア様の悪口を言つてゐなさる。」

「いや、違ふよ、私は實際信心家なんだ。」

泥だらけの哲學者は、哲學が到底自分を助けてくれないものゝ氣が注つくと、その儘泥だらけの信心家になつてしまつた。

「それぢや、そこで羅馬教の掟を讀みあけてみなさるがいい。さうすりや助けられないものでもない。」

「讀みあけるもさ。ぢや、お聴きよ。」

哲學者はビスケットのやうに乾いた唇で、うる覺の信仰條を讀みあげた。すると、婆さんゝまやつゝ安心したやうに手を出してヒユウムを引張り上げてくれた。

獵 自 慢

獵期が開いたので、朝霧のなかを、獵犬を連れてうろろする人達が多くなつた。さういふなかには、肝腎の獵そのものよりも、甲斐々々しい獵服を着込んで霧の深い野路を口笛を吹きながら急ぐ、獵人らしい氣持が好きで好きで溜らぬ人達が少くなさうだ、俳優菊五郎なども、さういふ一人である。

芝居には人一倍凝り性の菊五郎も、毎年十月興行になると、さうもそわそわと落付かない。旅廻りは言ふまでもない事、座の興行も餘り氣乗がしない、座方の都合で強て顔を出さなければならぬ場合でも、端役の外は決して引うけようとは言はない、何だつて十月に限つてそんな

なに不精なのだを訊くと、菊五郎は親爺譲りの癖で、ぐつと反身になつて、言譯をする。「でも、貴方、十五日は初獵の日ぢやありませんか。私が一年中稼いでるのは、この日一日を樂みにしてるやうなものなんですもの。少しは遊ばせて貰はなくつちや。」

そんなにまでして出掛ける獵だ、屹度上手なのだらうとは誰も思ふ事だが、何ういふものか、菊五郎は滅多に獲物を提げて歸らない。往きにはいそいそと勇んでゐるが、還りにはすすり息が立てる場合が多い。鵠も小鴨も、田鴉も、鶉も色々たんこ棲んでゐる世の中だ。何か土産がありさうなものぢやないかと訊くと、菊五郎は子供のやうに面を膨らませて、「だつて、私の姿を見ると、言ひ合はせたやうに皆逃げ出してしまふんですもの。」

と言ひ譯をする。菊五郎の悔しがり屋なのを知つてゐるある男が、「さうか、それぢや君の獵は、態々不機嫌を買ひに出かけるやうなものなんだね。」

と冷かした事があつた。すると、菊五郎は急にまじめな顔になつた。「でも、逃げおぼせた鳥になつてみれば、好い氣持でせうて。」

むかし俳優の潮川菊之丞が、ある最良客から百兩の祝儀を買つた事があつた。側に居合せた

ある男が、冷かし半分に、
 「太夫、そんな物を戴いたら定めし好い氣持がするだらうな。」
 と言つた事があつた。するに、菊之丞は氣もない顔で返事した。
 「はい。——したが、下すつた方はもつと好い氣持が致すでせうよ。」
 腕白な菊五郎よ、汝も口前ばかりは古名優の面影がある。

音楽家の大統領

共和国になりかからうとしてゐる波蘭では、その最初の大統領に洋琴家のパデレウスキ氏を選んださうだ。パデレウスキは何といつても、今では世界切つてのピアノ弾きで、旅行をする折にも手が硬ばるゝ可けないからといつて、ピアノを汽車のなかに擔ぎ込んで、閑さへあれば鍵盤を打つてゐる人である。辯護士出の政治家でなければ、政治の實際が判らないものやうに思ふのは、舊い時代の習慣に囚はれた人達の事である。世界が政治と生活の様式の根本から改造せられかかつてゐる今の時代には、統治者が理想家であればある程、目覺ましい國民

的飛躍が成し遂げられやうといふものだ。この意味においてパデレウスキの大統領は、必ずしも不適任だと言はれない。

塊太利にモツアルトといふ音楽家があつた。ある日の事、維也納の市街をぶらついてゐると、變な姿をした乞食がひよつくり眼の前に現れた。乞食は問はか語り、色々な哀れっぽい身の上話を話し出した。すべて乞食の身の上話といふものは、聴き手が乞食でない限り、なかなか面白く聴かれるもので、談話が済むと、こんな人でもがついお鳥目をはすみたくなるものだが、生憎な事にモツアルトは其の折懐中に少しも持合せてゐなかつた。

音楽家は空つほのポケットに兩手を突つ込んだまま、乞食の方へ一寸顎をしゃくつて見せた。二人は連れ立つてそこらの珈琲店に入つて坐つた。音楽家は暖い珈琲と菓子の一皿を乞食に配ひながら、自分は卓子に凭りかゝつて、せつせと作曲に取りかかつた。乞食が野鴨のやうな口もとをして珈琲を啜つてしまふ頃には、立派な舞踊曲の一つが有り合せの紙片に書き綴られてゐた。

「あいにくと、今日は持合せが無いので、こんな物を拵へてみた。書肆に持つて往つたら、幾

らかなるだらうよ。」

モツアルトは恠う言つてその紙片を手渡しした。

乞食はもう一杯珈琲が飲みたかつたのを、辛抱して外へ出た。そして幾らか氣遣ひながら、その紙片をそこらの書肆に持ち込むと、書肆の亭主はそれを見て、にこにこもので甘圓ばかしの原稿料を渡してくれた。乞食は物貰に次いで、音楽家ほご割のいい仕事はないと思つたらしかつた。

パデレウスキーが大統領になつたら、生活に困つてゐる人達は訪ねて往つて身の上話をしてみるのもよからう。よしんば樂譜を呉れないにしても、相手は藝術家の事だ、何か屹度氣の利いた言葉でも聴かせてくれるに相違ない。氣の利いた言葉は、金にならないまでも藥にはする事が出来る。

名譽寬璃

大阪俳優の嵐徳三郎が、璃寬を襲名するについて、仕打の松竹合名社から口上役について、

徳三郎の許へ相談に往つたものだ。松竹の考へでは、延若や雀右衛門や多見藏の夫と同じやうに、鴈治郎に口上が言はせなかつたのだ。

「誰はんがよろしおまつしやろ。」

仕打は探るやうな眼附をして徳三郎の顔を見た。

「さあ、誰はんがよろしおまつしやろな。」

徳三郎もまた同じやうな事を言つて、狐のやうな眼附で仕打を見かへした。

「大阪に深い馴染のある方やないとおきまへんな。」

「さうだすとも、大阪に深い馴染のある方やないとおきまへん。」

徳三郎はまた同じやうな事を言つて、擦つたさうな顔をした。

二人は火鉢をなかに差向ひに坐つて、互に顔を見つめてゐた。仕打は螳螂のやうな顔の کوچکな俳優だなと思つた。俳優はまた蟋蟀のやうな色の黒い仕打だなと思つた。仕打はさうと切り出した。

「成駒屋はさうだつしやろ。」

「成駒屋はんだつか。徳三郎は初めて気がついたやうに言った、「成程成駒屋や三申し分はおまへんな。そやけに出て呉れはりまつしやろか。」

「出やりますとも。そりや出はりませ。任打は漸つと安心したやうに膝を進めた。

「成駒屋はんは口上が上手やし、それに縁喜がよろしおまんがな、延若さんのも、雀右衛門さんのも、大入續きだしたよつてな。それでは然う決めときまへうかいな。」

「まあ、待つとくんはなはれ、一度阿母はん聞いてみますよつて。」

徳三郎は奥にゐる母親を喚んだ。母親はこのこ出て来た。そして譯を聞いた。

「結構だんな。母親は魚のやうな眼をして任打の顔を見た。「そやけ、私はもう先のない身體だすやろ、冥途で良人に會つて、悴は名前替に誰に口上言つて貰ふたんや三訊かれた時、成駒屋はんやでは良人が知りまへんやろ、那の人は一代俳優だすよつて……。」

「成程な……」任打は不足さうな返事をした。徳三郎は尖つた鼻の孔から煙をすうと吐き出した。

「やはり仁左衛門にしとくはなはれ、那の人や三良人も知つてますよつてな……」

母親はお念佛を言ふやうに頼んだ。

で、どうどう瑠寛の襲名興行の口上は仁左衛門に定められたといふ事だ。

三 弗 で

罪のない子役のませた仕草は、涙脆い機敷の婦人客を直ぐ泣かせる事が出来るので、横倉な興行師や俳優やは、成るべく年端の往かない、柄の小さい子役を舞臺に立たせやうとする。

波蘭生れのピアノ弾き、ヨセフ・ホフマンは六歳の時にピアノの初演奏をしたといふ程あつて、早熟者の多い音楽家のなかでも、とりわけ早熟の天才として名高い男だつた。演奏をしに米國へ渡つたのは、確か十歳頃だつたと覺てゐるが、悪戯盛りの子供が、汗を垂らして難曲に無中になつてゐる容子が餘りにいぢらしいといつて、幼児虐待防止會から抗議の申込があつた程だつた。

そのホフマンが(無論大人になつからの事だ)ある時、往きつけの料理屋で晩食を食つた、勘定を済ましてそろそろ出掛けようとする時、向ふの卓子に居た五六人の客のなかから、剽奪者

らしい一人の男が呼びかけた。

「ちよいと、ホフマンさん暫くお待ち下さいませんか。」

音楽家は黙つて、後方を振りかへつた。そこには五六人の客が居合はせたが、誰一人見知り越しの男は居なかつた。剽軽な男は椅子の上から、身体を伸ばさず、ホフマンに言つた。

「よくお待ち下さいました。別に用事を言つては無いんですが、もしか私が今お喚び止めしなかつたら、貴方はどこまで真直にお出かけになるお積りだつたんです。」

皆は聲を揃へて笑ひ出した。剽軽な男は名高い音楽家に調弄つた嬉しさに、鼻をくくん言はせて喜んだ。

ホフマンは眉毛一本動かさうともしなかつた、棒杭のやうに突立つて、じつと剽軽な男の顔を見つめてゐた。そこらの卓子に居合はせた人達は、じつと鳴りを鎮めて、この音楽家の返答を待つてゐた。ホフマンは静かな聲で言つた。

「よくお喚び止め下さつた。世界中に私が喜んで呼び止められるのは、先づ貴方位のもんでせうよ。『慥う言つて、音楽家はポケットから財布を取り出して見せた。』御覧の通りここに三弗入

つてます、この金で往かれるところまで往くのでよ。」

穿 き 違 ひ

政友會の三土忠造氏が、會の本部で退屈凌ぎにズウデルマンの「マग्ダ」を讀んでゐた事があつた。「マग्ダ」は言ふ迄もなく、松井須磨子の出世狂言として名高い劇である。三土氏は拾ひ讀みしながら、七面鳥のやうに顔を擡めたり、笑つたりした。

そこへ米利堅粉の粉袋のやうな、眞つ白な頭がぬつと入つて来て、後からじつと書物を覗き込んでゐたが、暫くすると、三土氏の肩越しに長い手を出して、書物の表紙をめくつた。三土氏は驚いて後を振り向いた。そこには總裁の原敬氏が衝立つてゐた。

「マग्ダと言ふんだな。何處かの政治家の傳記かな。」

原氏は獨語のやうに言つて、のつそりとまた室を出て往つた。

入れ違ひに床次竹二郎氏がその室に入つて来た。そして同じやうに三土氏の肩越しに、この名高い獨逸の脚本を覗き込んでゐたが、暫くすると、

「マダだね。政治家もこんな書物まで讀まなくつちやなくなつたかな。」
 と、半分は三土氏を冷かすやうに、半分はついぞそんな本を讀んだ事の無い自分を非難すやうに言つた。そして又のつそり出て往つた。

これと似よつた話はDといふ名高い基督教の老牧師にもある。ある日の夕方、牧師は麵麩、味噌汁と林檎とで一杯になつた腹を抱へて、明日の日曜日のお説教を考へ込んでゐたが、ふと襖越しに子息の聲を聞きつけるに、聲を立て喚んだ。

「おいおい、お前に一寸訊きたい事があるから、来てお呉れ。」

子息さんは新聞記者である。牧師の子息が新聞記者になつて悪いといふ法はない、牧師の子息は、唯牧師にはならない方が善いだけの事である。子息さんは入つて來た。

「お喚びですか。」

「一寸お前に訊きたいんだが……」牧師は舊約聖書の神様から貰ひ受けたやうな長い顎髯を扱きながら言つた。

「近頃荒尾讓介君は何うしてるか、知らないかね。」

息子さんは眼を白黒させた。荒尾讓介は言ふ迄もなく、小説「金色夜叉」に出て來る老壯士である。で、善い加減な返事でごまかす事にした。

「相變らず貧乏で困つてるやうですな。」

「さうか、氣の毒なもんぢやな。」老牧師は實際氣の毒で溜らないやうに言つた。そして讓介氏が、自分と近づきでないのは、那の男にとつて一生の損であるやうな顔をした。

國旗に接吻

桑港には露西亞生れの労働者がたんと居る。そのなかの一人が、ある日仕事先で手を泥だらけにした事があつた。一體手といふものは、よく汚れるもので、マコウレエの談話によると、英吉利のある鍛冶屋は、泥棒に頼まれて、金物の贓品を火に溶かす折には、手で觸つては汚れるからといつて、熊の長火箸を使つたといふ事だ。結構な考へだ。

その露西亞人は、汚れた手先を綺麗に水で洗つたが、さて濡手を拭かうにも手巾一つ持ち合はさなかつたので、兩手をぶら下げたままきよる其邊を見まはしてゐた。ふと氣がつく

ど、何かの旗だに見えて、頭の上に米國の國旗が一つ動いてゐた。

露西亞人は兩手を伸ばして、國旗の片隅を押へたと思ふと、器用にさつと手先を拭いた。そして何喰はぬ顔で仕事場に歸らうとするに、後から、

「もしもし。」

と呼ぶ者がある。露西亞人は拭いたばかりの兩手を洋袴の隠しに突込んで、後方を振り向いた。そこには七面鳥のやうに、ばつと裾を廣げたアメリカ女が立つてゐた。

「もしもし。今見てゐるに、お前さんは此國旗の布片で濡手を拭きなすつたやうだね。」

女はきいさいした聲で突かかつて來た。露西亞の労働者は呻くやうに言つた。

「拭いたよ。それが何うしただ。」

「お前さん、これを何と思つてるの。」

「國旗だと思つてるだよ。」

「國旗を何と思つてるの。」

「唯の布片だと思つてるだよ。」

露西亞人はトルストイのやうな毛むくじやらの顔を、平氣でにや／＼させてゐた。

「まあ、何といふ没分曉漢なんだらうね。」女は七面鳥のやうに顔色を變へて、我鳴り立てた。

「私達の兄弟は、今では此の國旗のために戦つてゐるのぢやありませんか、夫も原因はと訊せば、お前さんの國が火元なんぢやありませんか、それに、それに……」

女は息が詰つたやうに苦しがつてゐたが、その儘駆け出して往つて巡査を呼んで來た。

巡査は件の露西亞人を警察署に連れ込むだ。暫くするにさつき手を拭いたばかりの米國國旗が、その前に持ち出された。巡査は嚴つべらしく言ひ渡した。

「この國旗へ接吻しなさい。」

労働者は獸のやうな悲し／＼な眼つきをして、毛むくじやらの口で國旗に接吻した。

「それでよし、今度は此方へ來た。」

巡査は労働者をその儘薄暗い拘留所のなかに投げ込んで、がちやりと重い錠前の音をさせた。

青樓へ遊びにゆく客といふものは、大抵見込坊で、内證はびいびいでも、懐中には山を購ひ、邸を購ひ、馬を購ひ、郵便切手を購ひ、お刺で若い妓の微笑を購ふ位の財貨は、いつも持合せてゐるらしい顔つきをしてゐるものだ。

青樓の煙草盆には、たつた一口か二口か喫つたばかりの巻煙草が、無造作に、灰のなかに突きさされてゐるのが多い。一寸見は贅澤なやうだが、精々二十錢やそこいらの金で、若い妓の前に男の虚榮心を満足さす事が出来るなら、こんな廉い贅澤はない筈だ。

大阪の南地に相應な青樓がある。その主人はしよつちう鹽原多助の講談を愛讀してゐて、自分も多助のやうに道に落ちた草履でも拾つてみたく思つたが、草履には土がへばり着いてゐるので、少し穢苦しかつた。で、お座敷から下りて来る煙草盆の中から、お客が喫ひさしの巻煙草を一つ一つ拾ひ上げる事にした。尤も夫を拾ふには、仲居といふ良い役があつた。自分は唯懐手を見てゐればいいので、こんな結構な多助は無いと、主人は思つた。

主人は月の二十一日には、定つたやうにお大師参りをする、お大師参りの途中には、薄汚い物貰ひが居て、蝦蟇のやうに土の上にかい躊躇つてゐた。青樓の主人は、夫を見る度に何が

な施して遣りたいとは思つてゐたが、さうしても恰好な物が思ひ當らなかつた。お鳥目といふものもあつたが、主人の考へでは、那は他から貰ふもので、他に呉れてやるものではなかつた。――所が、ふと思ひついたのは件の巻煙草で、主人はせつせと拾ひ溜めた。そして途で物貰ひを見掛けるに、そのなから、五六本つつ取り出しては恵んでやつた。

「お乞食め、あない喜んでら。」青樓の主人は嬉しさうな物貰ひの顔を見て、心底から満足した。「吾ながら善い事を思ひついたもんだて。お大師さんかて、こない發明やなかつたかも知れんな。」

さうかうするうちに、物の値段は青樓の主人には相談なしに騰つて来た。十錢の煙草は十二錢になつた。遊びに来る客は相變らず山を購ひ、邸を購ひ、馬を購ひ、郵便切手を購ひ、お刺で若い妓の微笑が購へさうな顔をしてゐるが、喫ひさしの煙草は段々短くなつて来た。青樓の主人は煙草盆を覗き込みながら情なさうに呟いた。

「吝つたれやな、こんなやとお菰に施しも出来へんがな。」

それから一月経つた。二月経つた。三月四月経つた。煙草盆のなかの喫ひさしは段々また長

くなつた。すると、一たん情氣かへつた青樓の主人の顔は、また晴々しくなつた。さうして月の二十一日が来るに、朝早く家を出て、途々乞食を見ると、袂から例のを撮み出して、まるで慈悲深い王様でもあるやうに反りかへてつてゐる。

馬の慈善

波蘭の滅亡を讀んだ事のある者で、國士コスチウスコオの思ひせまつた苦衷に、涙を流さないものはたんどあるまい。

コスチウスコオは性來慈悲深い男だつた。慈悲深いといふのは、美しい指環のはまつた手で慈善音樂會の切符を押賣する事を言ふのでは無い。場合によつたら、他人のために其の美しい手から血を流す事をいふのだ。

コスチウスコオがある時、隣り村の僧侶さんの許へ葡萄酒の進物をしようとした事があつた。その使者として馬丁が呼び出された。馬丁は御主人の命令で、其の飼馬を引き出して夫に乘る事にした。

馬丁は葡萄酒の罎を引つ抱へて、鞍の上で大威張りに踏ん反りかへつてゐた。一體馬の尻について歩くの、馬の背中に反りかへつてゐるの、大分人生觀が異つて來るもので、馬丁は哲學書の二三冊も讀んだらしい氣取つた顔で、じろじろ附近の人を見下してゐた。

すると、町の角から貧乏人が一人のそのそ這ひ出して來て、馬の側に立つた。

「旦那、お手の内を戴かせて貰ひませう。」
馬丁は素知らぬ顔で外つ方に向いてゐるが、馬はそこに突立つて一足も前に乗り出さうとしなかつた。で、馬丁は無げなしの財布から幾らか摘み出して、貧乏人の掌面に載せてやつた。

すると馬は納得したやうにほかほか歩き出した。
物の五丁三歩かないうちに、馬丁の財布は空つほになつた。でも、馬は貧乏人を見るに、立停つて動かないので、馬丁もさうと善い事を發明した。夫は何か知ら、施しを呉れてやる眞似をする事で、さうすると、馬は安心してまた歩き出した。

馬丁は使ひ先から歸つて來ると、いきなり旦那の室へ駆込んで來た。
「旦那、もう貴方様の馬に乗る事だけは御免を蒙りやす。たつて乗らなければならぬものだ。」

「旦那の財布も一緒にお貸なすつて下さい。」
コウチウスコオが、貧乏人さへ見れば施しを呉れてやつたのは、別段賞める程でもないが、馬が何々伯爵夫人なきと一緒、貧民救助が好きだつたのは偉いと言はなければならぬ。馬が華族でなかつたのは何よりも残念である。

國務卿秘藏の聖書

獨逸の講和提議に對する米國國務卿ランシング氏の演説を讀んだものは、その一節に「しかも慈悲なき嚴酷の正義は非基督教なると共に、正義を破壊する如き慈悲も亦等しく非基督教なる事を忘るべからず。」
どいつたやうな坊さん臭い文句があつたのを記憶してゐるだらう。
ランシングの演説を讀んでみるといつの場合でも聖書の文句が引合に出されてゐる。それもその筈で、氏は世界に一つあつて、二つとはまた見られない珍しい聖書の持主である。これは極内々の話だが、實はその聖書は、氏の夫人が結婚の當時贈り物にしたものである。一體女ど

いふものは、結婚と同時に、男に色々の贈り物をする。傷だらけの心の臓、風塵付の殺し文句——さういふなかでは、聖書はいつち平凡な進物である。
夫人が贈り物の聖書は、餘白のたんとある大型の本だつたので、ランシング氏はそこへ註釋、引證を細かく書き込んだばかりか、挿繪や地圖のやうなものさへ一々克明に書き入れてゐる。地圖も、挿繪も、引證も、註釋も、まるで印刷のやうなちやんとしたもので、誰が目にもそれが手で書いたものだとは思はれない。それもその筈で、國務卿は若い頃建築學をやつた事があるので、製圖用のペン先を使ふ事にかけて、人一倍巧者なのである。書き入れの参考用の地圖や寺院の建築圖は、少しの手入れなしに、その儘製版に廻す事が出来る程上手に出来上つてゐるといふ事だ。

恚ういふランシング氏は、今では米國でも指折りの聖書學者に數へられてゐるが、この素晴らしい聖書の智識は、實をいふと、氏が長い間毎日半時間づつを聖書の研究に當てた、其零碎な調べの積み積つたものださうだ。食後の半時間——この半時間の研究は、米國の國務卿を名だたる聖書學者にしてくれた。食後の半時間——この半時間の無駄話は、そんじよそいらの日本

の紳士を豚のやうな馬鹿者にしてくれた。何といふ有難い事だ。

文豪の鑿つ面

トルストイがある時X要塞の門にひよつこり其の姿を現した。——自分が前以てこんな事を知つてゐたら、何を措いても日本の人道主義者にとつそり耳打をするのだが、實をいふと、これを聞いたのは、トルストイが亡くなつてからすつと後の事だから、さうか勘辨して貰ひたい。トルストイは直ぐ眼の前に、跛足の乞丐が立つてゐるのを見た。施し物をしようとして、彼がポケットに手を突込むだ一刹那、要塞のなかから重い靴音を引摺りながら、一人の番兵が顔を出した。すると、今までトルストイの手元ばかり見詰めてゐた乞丐は、吃驚して跛足をひきひき、宿無し狗のやうに直ぐ前の歴山公園の樹蔭に逃げ込んでしまつた。番兵は其の後姿を見送りながら、大聲で口汚く喚き散らしてゐた。

トルストイは番兵の方へ歩み寄つた。そして屹とした口調で訊いた。

「お前さんは文字が讀めるかい。」

「文字ですか。番兵はついで昵懇のない人の事でも訊かれるやうに、一寸考へる眞似をした。

「讀めますよ。讀めますよ。だが貴方はまた何だつてそんな事をお訊きになるんです。」

「ぢや、聖書を讀んだ事があるかい。」

「聖書？」番兵は自慢らしく鼻を動かした。「讀みましたよ。聖書を讀まない奴は狗です。」

「それぢや、知つてゐるだらうが、聖書に「餓ゑたる者に食を與ふる者は」といふ事があるね、あれを何う思ふかね。」

トルストイは毛むくじやらな顔で覗き込むやうにした。

兵卒は其儘地獄に跳ね飛ばされはしないかと氣遣ふやうに、じつと眼を見据ゑてゐたが、暫くすると、ほつと息を吐いた。

「それぢや伺ひますが、貴方は文字がお讀めになりますか。」

「讀めるよ。」「トルストイは鼻を摘まれたやうに顔をくしやくしやさせた。

「何だつてそんな事をお訊きください。」

「ぢや、軍律をお讀みになつた事がありますか。」

「無い。無いが、何うしたんだ。」

「それぢや餘計な口を利かないやうにして下さい。」

兵卒は急に元氣づいて肩を聳やかした。「私は軍律に従つてゐるんですからね。」

トルストイは行き詰つたやうな顔をした——だが、さうか此事は日本の人道主義者に内分にして欲しい。さもないと私が困るから。

觀樹老の嘘

十六日京都に入つて來た三浦觀樹老人が、一代の狸爺たるは知らぬ人もあるまい。

この前觀樹老人がこつそり京都へやつて來た時、あの通信社の記者が、それを嗅ぎ出して寝起きを押へようと、朝つばらから其の旅館に出掛けて往つた。老人はもう起き直つて、厚ぼつたい座蒲團の上にもちよこなんを坐つてゐた。

訪問記者は、漸く狸の居るころを突きとめたやうに得意になつて訊いた。

「今度は何の御用事でも下りになつたんですね。」

「さうと捕まつたか。」老人は態とらしく困つたやうな顔をした。「君達に會つては逆も叶はんよ。實は今度は秘密の用事で誰にも知らさないで、こつそり出て來たんだが……」

「秘密の用事と仰有るご、——矢張り寺内内閣の……」

若い通信社の記者は獲物を嗅ぎつけた狗のやうに鼻をびくびくさせた。

「さうだかな。實は今朝これから田中村の西園寺の許に出掛けて往く筈なんだが……」

老人は軒の燕に立聞でもされるのを氣遣ふやうに、態と聲を落した。

「談話の都合では、今晚あたり原(敬)めがまた遣つて來るかも知れんぞ。」

「原さんがですか……」

若い記者は誰よりも先きに、こんな大事件を聞き出した嬉しさに、胸をわくわくさせながら言つた。

「さうだよ、原が來るかも知れん。するといづれは内閣の話も出さうなものだ。」

老人は慙う言つて、じつと相手の顔を見つめた。若い記者はここまで聞けばもう十分だ、あまや大抵想像で見當がつく、何よりも大事なのは他の同業者を出し抜く事だといつたやうに流して

てお辭儀をして座を立たうとした。

「まあ待つた待つた。老人は狸のやうな手つきをして客を呼びこめた。」といつたら、君達は喜ぶかも知れないが、今言つた事は皆嘘だよ、俺は嘘を吐くのが大好きでね。」

若い記者は度膽を抜かれたやうな顔をして、また坐り込んだ。老人は夫を見るに、嬉しさに堪へられぬやうに、聲を立ててからからと笑つた。

「若い者に嘘をつくのと、若い女を可愛がるのはまた格別なもんだね。」

英國首相の恐縮

英國の首相ロイド・ジョージ氏が、まだ田舎辯護士でびいびいしてゐた頃、ある日訴訟用の出先から、一頭立の輕馬車を驅つて、自宅に歸りかかつてゐた。もう半時間もしたら、自分の住まつてゐる田舎町に入らうとする頃、ロイド・ジョージは寂しい野道で、とほとほ歩いてゐる一人の小娘に邂逅つた。よく見ると同じ町にゐて、かねて見知越のある商人の娘だつた。

ロイド・ジョージは車を停めて、娘をも一緒に乗せてやつた。馬は一日驅けずり廻つて、もう

かなり疲れてゐるので、情深い主人の仕打を變な眼つきで見つてゐた。實際娘を曳いて歸るのは、馬の仕事だつたが、さうかと言つて馬が慈善家だに賞められる譯でもなかつた。従来も馬は度々そんな目に出會つて凝りてはゐるが、夫が世間だに絶念をつけてゐるらしく、黙つてまた驅け出した。

未來の英國首相は、娘を喜ばせやうと思つて、色々の談話を持ち出した。角のある龍や、乾魚のやうに瘦せた學校教師や、白鳥のお嫁になつたお姫様や、そんな面白い話を幾つもなく聴かせたが、娘は黙つて聴いてゐて、時々「はい」とか、「いいわ」とか應答をするに過ぎなかつた。ロイド・ジョージは變に思つて、終ひには自分も黙つてしまつた。

二三日経つて、ロイド・ジョージは娘の母親に出會つたので、その折の事を話し出して訊いてみた。

「お宅のお嬢さんは、よつほき沈黙家でいらつしやるんですね。」

「まあ、先生、その事なんですわ。」と母親は笑ひ笑ひ言つた。

「娘が歸つて来て、其のお話をするもんですから、何だつてお前そんなに黙つてたんだと訊き

「だつて、お母さん、あなた那の叔父さんとお話をなさると、いつでも鑑定料とかいふものを取られていらつしやるんでせう。でも、私その折お金を一文も持つてなかつたんですもの。」と言つてね。」

未来の首相は頭をかいて恐縮した。——語を寄す、日本の辯護士連、ついでに君達も恐縮した方が善くはなからうか。

法隆寺の覆藏

米國の保險學者某博士の書いた書物に、「世界で保險の一番古くあつた國は日本で、大和の法隆寺といふお寺へ往けば、今だにそれが残つてゐる。」といふ文句が載つてゐる。

東京大學のある教授で、西洋人の書いた書物から、しよつちう自分の生れた國の事を習ひ覺てゐる若い學者が夫を讀むだ。この學者は、西洋の書物にもしか優良な人種には臍が二つあるといふ文句でもあらうものなら、そつと自分のお腹を搜つてみて、猿のやうに顔を根くする

程眞理に忠實な人である。

「ふむ、然うか。日本にはそんなに古くから保險があつたとは知らなかつた。何といつても矢張り古い國だからなあ。」

大學教授は鼻を鳴らして感心した。そして何といふ善い國だらうと思つて、窓から庭を見た。庭には蝦蟇が一つ一昨年の事が何かを考へてゐた。

「さうだ。蝦蟇がある、山椒魚がある。蒲鉾がある。みんな古くから日本にゐるのだ。」

大學教授はこんな結構な材料のある國で、學者になつた自分の身の幸福を思つたが、それにしてもみんな古い保險が、法隆寺の壁に残つてゐるのだらうか、少しも知らなかつた。

大學教授は、かねて顔馴染の奈良の女子高等師範にゐるM氏に手紙を書いて訊きにやつた。

M氏は大和にある佛の名前に妓の顔ををみんな知り抜いてゐる程の物識である。手紙を讀んだ一刹那、M氏は、

「てつきり、金堂の覆藏だな。」

と思ひあたつた。

法隆寺の金堂の片隅に漆喰で固めた覆藏がある。案内者といふ案内者は、それを自慢げに、「法隆寺に火がついたら、ここを開けるのや、と太子様が言やりましたや。再建に要るだけのお金がちやんと湮めておますのやさうな。」

と言ひ言ひしてゐる。覆藏のなから、水が出るか、金が出るか、それとも物を知らない學者が出るか。——件の保険學者は、案内者のお喋舌をその儘書物に書きこめてゐたのに過ぎなかつた。

蠟マツチ

米國と支那との貿易といへば、随分と夥しい金高に上る事だらうが、その夥しい貿易が、もとは蠟マツチ一本から出た事だと思ひては、誰だつてまさか小首を傾けぬ者もあるまい。だが、それは全くの事實で、生命までもと思ひ込んだ男女の戀なが、もとは落した手巾を拾つてやつた位の事に過ぎないのは世間によくある事だ。

五十年前といへば、支那人は歐米人を夷扱にして、酷く毛嫌ひしたものが、その頃支

那に渡つて、貿易業を始めたばかりの紐育生れの商人があつた。何一つ取引は出来ない上に、市街へ出れば通りすがりの支那人から白い齒を見せられるので、商人は涙さへあつたら泣き出した。したい思ひをしたのだ。だが、仕合せな事には、紐育生れのこの商人は、大阪生れの商人と同一やうに涙はほんの少ししか持合はさなかつた。

ある日商人は、市街の關羽の廟で行はれるお祭りに往つた。居合はす人達は各自に蠟燭を持って、それを振りかざして何かの式をするらしかつた。紐育生れの商人は、夫を見ながらポケットから一本の葉巻を取り出して、蠟マツチを擦つて、ぼつと夫に火をつけた。

蠟燭を振つてゐた支那人連は、一齊に商人の方を見かへつて険しい眼つきをした。商人は慌てて蠟マツチの火を消さうとして、二三度手を振つて見たが、それも無駄だつた。商人は暴になつて、強くマツチを振つた。火はさうしても消えなかつた。すると、支那人のなかから、豫て顔馴染の男がづかづか近寄つて来た。

「やあ、貴方もお祭りの儀式をしてらつしやるんですね。」

支那人の険しい眼つきは、いつの間にか面白さうに笑つてゐた。「でもマツチでは可けません

新近江八景

「ここに蠟燭があるから差し上げませう。」
 居合はす支那人は、すっかりこの商人にいい感じを持つ様になつた。お蔭で貿易全體が都合よく運ぶやうになつた。
 「何もかも、あの蠟マツチ一本の故だ。」
 商人は後々になつて、往時を想ひ出す度に、それを言ひ言ひした。

滋賀の森知事は、これまでの近江八景が、新時代の風景としては、規模が小さ過ぎるからといつて、新しく一般投票で新時代の八景を募集したといふ事だ。
 飲んだくれの村長や、やくざな衆議院議員を拵へるために設けられた投票を、景色の選擇にまで持つて来たのは知事の思ひつきで、投票人に納税額の制限をもつけないで、一般投票をしたのは、森氏が新時代の知事として、面白いところかも知れない。
 名古屋に近江八景の見物を、年頃の志願にしてゐる團體がある。旅費と閑暇とはかなり持合

はせてゐる人達の事とて、それぞれの名所を言ひ傳への文句通りに見物しようといふのだ。石山には名月の夜わざわざ訪ねて往つた。月は縣知事のやうにほかんとした顔をして空をうろついてゐた。比良に雪が降つたといふ記事を新聞で見て、慌てて汽車で駆けつけてみる。山には瘡蓋のやうな雪がちよつぱり残つてゐた。名古屋生れの見物衆は、
 「まるで畫のやうなもの。」と言つて喜んだ。
 勢田では風邪でも引込んでらしい血走つた眼をした夕陽を見た。矢走では破けた帆かけ船を見た。三井寺では汽車の都合があるからといつて、わざわざ頼んで十五分程早目に時の鐘を撞いて貰つた。鐘は鐵面皮にもいつもよりは大きい聲で、喚くやうに鳴つた。困つたのは堅田の落雁で、幾度往つて見ても、雁はそこらに見えなかつた。雁は此の人達のやうに有り餘る程な旅費と閑暇を持合せなかつたのだ。ところが、丁度折よく鴉が三羽そこを通り合せた。皆は雁の代りに鴉で辛抱する事にした。女房を辛抱する事の出来る人達が、雁の代りを鴉で間に合せないといふ法は無かつた。
 一番困つたのは、唐崎の夜の雨だつた。名古屋を雨の日に立つと、唐崎の夜はいつも齊れて

ゐた。思ひ立つて、漸三年目に初めて雨の夜に出會す事が出来た。皆は松の下でぐしよ濡れになりながら。

「よろしなあ、恰で晝のやうやなも。」

「言つて喜び合つた。所がその後になつて、妙な事を聞き出して来た者があつた。夫は唐崎の夜雨といふのは、夜更けて松の葉のこぼれるのが、雨の音に似てゐるからの事で、何も雨に濡れなくともいいのだといふ事なのだ。皆は變な顔をして、今一度唐崎へ往つたものか、何うかといふ事を決め兼ねてゐる。」

新しい近江八景を選ぶのもいいが、何處かに一つ宛雁や雨やを配つて欲しいものだ。

捕虜を景品に

瑞西に商人があつた。これまで重に獨逸から商品を購入してゐたが、先日の事豫て取引を付けてゐる獨逸の註文取が、久し振にすつと店に入つて来た。註文取はたつぷり愛嬌笑ひを見せながら、これまで通り取引を續けて欲しいと頼むだが、瑞西の商人は苦り切つた顔をして

きつぱり謝絶つた。

「何か之まで願つて来た取引に、御不足でもお有りなんですか。それとも佛蘭西の方から、お仕入になるお積りかも知れませんが……」註文取は一寸白い齒を見せた。「彼地の出来だも、同じ品で値段がざつと十割方も張る事を御辛抱なさらなければなりません。」

瑞西の商人は弾きかへすやうに言つた。

「そんな事位我慢します。」

「飛んでもないお考へ違ひで……」獨逸の註文取はなかなか絶念めようとはしなかつた。「佛蘭西出来だも、値段がお高い上に、私共のやうな品は逆も揃つてはありせんからね。」

「それも承知してまさ。瑞西の商人は吐き出すやうに言つた。

「そんなに仰有るからには、此方様は何でも佛蘭西の兵隊さんにお近づきでもお有りになるんぢやありませんか。」

「有りますよ。」商人は飽くれ氣味に言つた。「甥が一人お國に捕虜になつてまさ。」

「夫はさうもお氣の毒さまで……」註文取は自分が惡戯でもしたやうに謝つた。「それぢや、

「どうか従前通り御註文を下すつて、尋でに甥御様のお名前をもお聞かせ下さいまし。するに近いうちに屹度御放免になるやうにお取計らひ致しますから。」

瑞西の商人はあやふやには思ひながら、兎に角註文は出す事にした。そして普魯西で捕虜になつてゐる甥の名前と收容所の所書とを渡すと、それから一週間ほぎ絶つて、甥は不具になつた捕虜の幾人と一緒に瑞西に送り歸されて來た。商人は商品を探るやうにして身體を調べて見たが、何處に創一つあるではなく達者でびちびちしてゐた。

偽

書

小説家芥川龍之介氏がいつだつたかの三田文學に「奉教人の死」といふ短篇小説を書いた。そしてこの小説は自分が秘蔵してゐる長崎耶穌教會出版の「れげんだ・おれあ」といふ西教徒が勇猛精進の事蹟を書きとめた稀觀書から材料を取つたものだ。この書物は上下二巻美濃紙刷六十頁、草書體交りの平假名文で、上巻の扉には羅旬字で書名を横に書きその下に漢字で、「御出世以來千五百九十六年慶長元年三月上旬鏤刻也」

の二行が縦書にしてある。序文は間々歐文を直譯したかのやうな語法を交へ、一見して伴天連たる西人の手になつたものだらうと思はれるやうなところがある。斷り書まで添へたものだ。

これを讀んで一番に物好きの眼を光らせたのは、文壇の老大家U氏だつた。U氏は人に知られた珍書通だけに、自分が今日までこの書物の存在を知らなかつたのを何よりも恥しい事に思つて、掌面でそつと禿げ上つた額を撫でた。

「れげんだ・おれあ——名前からして珍らしい書物だ、是非一つ借りて見なくつちや。」

U氏は直ぐ芥川氏あてに手紙を書いて、その珍本の借覽を申込みた。

芥川氏はその手紙を開けて見た。そしてにやりと皮肉な笑ひを洩してゐると、丁度そこへ東洋精藝會社の社長某氏の手紙を持つた、若い男が訪ねて來た。その手紙によると、三田文學で御紹介になつた「れげんだ・おれあ」あれは珍しい書物だと思ふから、上下揃つて三四百圓で譲つては呉れまいかといふ頼みなのだ。

芥川氏は雀の巢の様にくしゃくしゃした顔の毛を掻きながら、若い男に言つた。

「此の本だ、今、Uさんから借覽を申込まれては居るが、然ういふ達ての御希望なら、お譲りしてもいいんだが……」

「それぢや何うか然ういふ御都合に——」若い男は刈立の頭を叮嚀に下げた。

「社長もごんなにか喜ぶでせう。」

芥川氏は當惑さうに手を拱んだ。

「ところが、あいにく其の本が手許に無いんだ。」

「誰れかにお取り替へにでもなりましたんで。」

「いや、そんな本は僕も讀んだ事が無いし、また誰一人見た事はあるまいと思ふんだ。」芥川氏は斯う言つてくすくす笑ひ出した。「君あんな本が有る筈がないぢやないか、あれは唯僕の悪戯だよ。」

「悪戯なんですか、それぢや偽書といふ譯ですな。」

若い男は呆つ氣にせられた顔をした。芥川氏はその一刹那、若い男の懷中で百圓札が幾枚か南京蟲のやうに身を縮かめてゐるやうに思つた。

牛の價

亡くなつたルウズヴェルト氏が、すつと以前紐育州の知事をしてゐた頃、一人の農夫爺をよく知つてゐた。ル氏は毎日馬に騎つて役所に出掛けたものだが、農夫爺の家はその途中にあるので、馬に騎り倦いたル氏は、時々鞍から下りて爺さんの家で休んだりしたものだ。

ある朝、ル氏がいつものやうに馬に騎つて出掛けるに、爺さんは窓に凭れて、紐育の新聞を讀んでゐたが、豫て聞き馴れた馬の蹄がほかほか鳴るので、じつと眼を離して外を見た。街道には利かぬ氣の知事が、笑顔をして馬に跨がつてゐた。

「よい所へ御座らしたな、檀那……」爺さんは窓から巖丈な身體を乗り出すやうにして言つた。「ちよつと檀那にお訊き申すべいが、市の新聞つては奴は、ねら嘘吐くだね。」

「嘘を吐くつていふのか、新聞が。」ルウズヴェルト氏は蟹の様に顰めつ面をした。「何だつてそんな事を訊くんだな。」

爺さんは窓越しに今まで讀むでゐた新聞を見せて、何處かを太い指頭を押へるらしかつた。

「私たつた今讀むだばかしたが、ここにこんねいな話が載つてゐるだよ。何でもはあ、市の富豪が牝牛一匹の畫に、一萬四千弗をか拂つたつてこんだ。嘔吐にも程があるだよ。」

「何だつて、夫が嘘なんだ。」

ルウズヴェルト氏は可笑しさうに訊いた。馬は牝牛が法外の値で取引されたのを聞くに、何だか面白くなさうな顔をして、頻に瞬きをしてゐた。

「何だつて、檀那樣……」農夫爺は解りの遅い知事をもぎかしかるやうに聲を高めた。

「なんほ廣い紐育の市だつて、まさか牛乳の絞れねわ牝牛に、大枚一萬四千弗もおつ投り出す馬鹿者も御座りましねわからの。」

吝嗇の競争

俳優中村梅玉の樂みは、金を蓄めるの、夕方庭の石燈籠に灯を入れて、ゆつくりお茶を啜るの、この二つださうだ。尤も梅玉は石燈籠の灯を、いつまでも點燈しあかしにするやうな贅澤な眞似はしない。いい加減見て娛しむ、自分から起つて往つて、ふつと灯を吹き消して

しまふ。

英國の富豪にトウマス・ガイといふ男があつた。俳優はしなかつたが、梅玉と同じやうに金を蓄める事は大變好きだつた。聖書の出版を始めて、しこたま懐中を膨らましただけあつて、かなり慈善事業にも手を出したが、聖書に書いてある事をそつくり實行もしなかつたと見えて、金は蓄まる一方だつた。

同じ頃ホブキンスといふ儉約家があつた。恐ろしい吝嗇家で、金を蓄める爲めには、どんな苦しい思ひをするのも厭はなかつた。もしか「靈魂」を銀貨一つに取替へて呉れるものがあつたら、ホブキンスは喜んで「靈魂」を賣物にしたに相違なかつた。

ホブキンスは英吉利中で自分程儉約な者は無からうと思つて、夫をたつた一つの自慢にしてゐるが、他人の噂に聞くに、トオマス・ガイといふ男は、自分にも劣らない程の吝嗇家らしかつた。さういふ吝嗇家が此の世に今一人住んでゐるといふ事は、ホブキンスに取つて生き甲斐がある事に相違なかつた。ホブキンスは態々ガイを訪ねてみやうと思つた。

ガイを訪ねたのは夜分だつた。主人は墨汁壺のやうな眞つ暗な部屋にもぐもぐしてゐるが、

客が来た。気がつく。のつそり立つて往つて、蠟燭に灯をつけた。蠟燭は黄疳病みのやうな黄色い光りを四邊に投げた。その瞬間ホブキンスは入口に立つて叮嚀にお辭儀をした。「ガイさん、貴方にはすつかり参つちまいましたよ。私だつて蠟燭の儉約までは思ひつきませんでした。いや有難うございました。」

ホブキンスは幾度か頷きながら、そのまま歸つて往つた。

労働者としての鼠

世の中に鼠ほぎ、うるさい物はないが何事にも儉約な蘇格蘭人のハトンといふ男は、近頃普通の家鼠を馴らして絲紡ぎをさせる事を思ひ付いた。

ハトンは自分の物置の隅つこから、鼠をたんと驅り集めて、色々試してみる。大抵の鼠は一日平均十一哩半は走れる、なかには平気で十八哩も走れるのがあるといふ事を發見した。「こんな速力を持つてるものを、むざむざ天井裏ばかり駈けさせ置くのは勿體ない。」と言つて、夫を絲紡ぎに利用する事を考へ出したのだ。

鼠も絲を紡いでみれば、一つばしの労働者である。労働者には夫々生活を保證してやらなければならぬ。所で、鼠の餌は大分安上りで、この労働者ひそりを丁度宜い加減に肥らせるには、五週間にさつと六錢のオートミールを食べさせれば夫で十分だつたが、その間に鼠は三百六十二哩ほぎ走つた。

ハトンは此小さな労働者を收容する紡績小屋を建てた。そして仕事に掛らせてみると、鼠はごまめに立働いて、一日に百本から二百二十本の絲を紡いだ。で、根氣よく一箇年ほぎ、この工場仕事を續けてみると、五週間に六錢の食費で鼠一匹の稼ぎ高が、廿五吋の長さの絲を三千三百五十本紡いだといふ勘定になつた。

普通の紡績職工に拂ふ割合で、鼠に賃金を仕拂ふ事になると、さつと一週間に六錢を遣らなければならぬのだから、五週間に六錢の食費で済むと、差引四週間分だけは只儲けといふ事になる。で、機械や小舎の修繕などを見込むと、鼠一頭の純益が一年に彼此三圓はあるさうな

雷の接吻

サアゼントといへば、女優のエレン・テリイがマクベス夫人に扮装した、その名高い畫の作者だ。知らぬものもないが、この畫家がシャヴンヌやエドキン・アベエなきと一緒に暮斯敦の公立圖書館の裝飾畫を頼まれて、米國へ渡つた事があつた。

其の折サアゼントは、或る知合の午餐會に招かれて往つて、ひきく自分を崇拜してゐる一人の娘に出會つた。娘は食卓越しに、じつと此畫家の姿に見惚れてゐたが、暫くすると漸と重い口を開いた。

「先生、わたし先日或る所で貴方の御製作を拜見して、覺えず繪を接吻しましたわ。」

「ほほう、何だつてまた接吻なぞなさいましたね。」

畫家は幾らかお愛想のつもりで訊きかへした。

「だつて、そのなかの一人が先生にそっくりなんですもの。」

娘は恚う言つて、皿のなかの櫻んほのやうに紅くなつた。

「それは有難う。畫家は一寸頭を下げる眞似をしたが、急に眞面目くさつた顔になつて、そして其の畫が御返禮に貴女を接吻でも致しましたかね。」

「いいね先生、だつて、相手は畫なんぢやございせんか。まさか……」

と言つて、娘は蓮葉に額で一寸睨めるやうな眞似をした。

「まあ、然うでしたか。そんな失禮な事を……」畫家はにやにや笑ひ出した。

「それぢやお嬢さん、私にそっくりだと言へませんよ。私なら……」

と、今でも喜んで接吻をしさうな顔をした。

靴の靴

近く歐米各國を視察に出かける筈の、文學博士G氏は、足に靴を穿いてゐる。水を泳ぐ水鳥は、脚に水掻をつけなければならぬ世の中だ。學者のために途に花を撒かうともしない實世間の世渡りには、大學教授も足に靴を穿かなければならない。尤もソクラテスは跣足で雅典の市を説教し歩いたやうだが家に荆棘のやうな女房を持つてゐた身には、雅典の街は羽蒲團のやうに踏み心地がよかつたに相違ない。

博士は足に靴を穿いてゐる。——ある日の事、その靴を足から脱いで、叮嚀に小包郵便に包

まうとしてみるので見て取つた學生の一人は、不思議さうに訊いた。

「先生、何だつてそんなに靴をお包みになるんです。」

「東京の靴屋へ送りたいと思つて……」博士は包みかけた小包をまた解して、そのなかから穿き減らした靴を取り出して見せた。「裏がこんなに痛んでるでせう、直しにやらうと思つてゐるのです。」

成程靴の裏は、學者の生活ほき惨めに擦り減らされてゐた。馬の道も學者の道も、たつた一本しか用意してない日本の市街では、何の無理も無かつた。

「それにしても、何だつて態々東京までお送りになるんです。」

學生は俯に落ちなさうに訊いた。

博士は黙つて學生の顔を見た。大學の學生にもあらうものが、この位の事が解らないやうでは、いつそ首でも絞つた方が愈だと思つたらしかつた。學者はそつと溜息をついた。

「何だつて、貴方、東京で購つた靴ですから東京へ送り返すのです。製へた店でなくちや、直しようがないぢやありませんか。」

學生は聲を立てて笑つた。

「何を仰有るのです、先生、靴の修繕位だつたら、何處の靴屋にも出来るぢやありませんか。」

「わ……」博士は皿のやうに眼を睜つた。アメリカを發見したのはコロンブスぢやない、那は質屋の番頭だつたと言つた所で、これ程には吃驚すまいと思はれる程だつた。

博士は事實を確めるために、一層言葉を叮嚀にした。「眞實の事なんですか、唯今承つたのは。實際東京で購つた靴の手入が、京都でも出来ますでせうか知ら。」

「出来ますとも。學生はじつと可笑しさを嘴み殺した。眞理を説く者は、フロックコートを着てゐる方が都合がいいといふ事は、大學の講堂で、平素から氣が注いでゐたので、破けた背磨だけは幾らか氣が咎めた。京都の靴屋でも立派に手入れは出来ますよ。恰き學問の仕入が京都大學でも出来るやうなものでさ。」

「然うでしたか、些とも知りませんでした。」博士は例のやうに隠しから古びた手帳を取り出した。そして學生の言ふ通りに、京都の目新しい靴屋の名前を一一克明に書き取つて、最後にアメリカ大陸發見にも比べられる記録の正確さを持つて、

「……年……月……日午後三時發見の事」
書き足した。

七十二歳の下士官

米國のある陸軍將校が、最近佛蘭西軍の兵站部を訪ねると、そこに居合はせた司令官の一人四十恰好の髭の美しい陸軍大佐は、愛想よく出迎へて、何くれもなく打明けて話してくれた。すると、そこへ袖口に下士の星章一つ附けた老人が入つて來た。髭も頭髮も雪のやうに眞白だったが、丈夫な性だと思へて、顔は鮭の切肉のやうな色をしてゐた。老人は隠しから一通の書類を取り出して、司令官に手渡しすると、慇懃な言葉で訊いた。

「何か外に御用事はございませんでせうか。」

「さあ、差し當つて……」司令官は勞はるやうな眼附で、老人の下士を見かへつた。そして不思議な程丁寧な言葉つきで言つた。「差し當つて用事といつては無いやうです。」

老人は一寸手を舉げて挨拶すると、踵の上でぐるりと身體の向を更へて、元氣よく引き下

つて往つた。

老人の姿が見えなくなると、司令官は米國の將校の方へ向き直つた。そして變な笑ひやうをした。

「那の男が誰だかつて事がお判りですかい。」

「いや、判りません。」

客は不思議さうに返事した。

「親父ですよ、私の……」

司令官は怒う言つて、吃口を結んだ。米國將校はその口元に胡桃の殻のやうな眞面目さを見て取つた。

司令官の話によると、親父さんは當年七十二歳で、多年働いてゐた實業方面をも、二三年前より退いて、氣樂に日を送つてゐたが、戦争が始まつてから以來といふもの、非常な煩悶に陥つた。で、どうも思ひ立つて従軍を願ひ出たが、夫には餘りに老け過ぎてゐるので、當局者は容易に肯き入れなかつた。親父さん躍起になつて運動した結果、斬り許されて割合に仕事の樂

子供の少い村

女といふものは、男の悲しみは半分別けて呉れる、喜びは倍にして呉れる、そしておまけに費用は三倍にして呉れる——といふ程、男にとつて無くてならないものである。もしか世界に女が一人も居ないといふ事になると、それは男にとつて神様が一人も居ないといふ以上に大事件でなくてはならない。

ところが、さういふ村が米國に一つある。カンサス州のエムボリア市から少し離れた田舎だが、そこにはこの十年間が程に女の兒が一人も生れない、出来る兒も、出来る兒もやぐざな石塊のやうな男の兒ばかりなので、村では地方出の代議士に頼んで、男でも女でも自由に産む事

の出来る秘法を説いた書物はないものか、有るならこつそり教へて貰ひたい。もしか無いならば、専門の學者に研究させて貰ひたいといふ、大變な陳情をしたといふ事だ。

この村には百八十二軒の家庭があるが、ここ十年が間に生れた子供は、まるで二百二十二人で、揃ひも揃つてやぐざな男の兒ばかり、女といつては唯一人しかない、それが漸にまだ九つにしかならないのに、婚約の申込が降るやうにあるといふ事だ。

フランス・ウイルソンといへば、米國では聞けた俳優だが、この男がある夏の事、田舎に旅立ちして往つた。ところが、その田舎といふのが、不思議に子供の少い村で、晝間でも遊び聲一つ聞けない、ひっそりした村であつた。(この國へ往つても、馬鹿に子供と鶏とは騒々しいものである。)

フランスは宿の農夫を掴まへて訊いた。

「爺さん、この村では子供は餘り居ない見ねるね。」

「居ましねたよ、孩兒は。」

爺さんは安煙草の脂臭い口をして言つた。

「餘り生れないのかな。」
 「あんまり生れねだよ。」
 「どんな割合で出来てるか知ら。」
 「さうだなあ……」爺さんはじつと考へるやうな目つきをした。
 「この女も一年に一人しかよう生まねだからの。」

食事の流儀

藤田東湖が刺身を食べるのに、いつも掌面に載せてべろりと嘗めてゐたといふ事は、いつぞやの茶話に書いたやうに覺てゐる。佛蘭西の諺に、

「蚤を殺すには、それぞれ流義があるものだ。」

といふ言葉があるが、蚤を殺すのに流義がある位だったら、食事をするのに、夫々儀式をもつてゐたつて少しの差支もない。

西洋料理を食べるに、肉叉を使はないで、何もかも肉刀で片つけてしまふ人がよくある。

「まあ、何て無様な人だらう。お行儀な西洋人に見せたら屹度笑はれてよ。」

宗教學校出の婦人だったら、そんなのを見て酸漿のやうに顔を紅くするかも知れないが、しかし夫は物を知らないからで、お行儀な西洋人にも、肉刀で物を食べるのは少くない。阿父の大事な櫻の木を伐つて、嘘一つ吐き得なかつたジョージ・ワシントンが先づそれで、食事をするにはいつも肉刀で済ましてゐた。アメリカの大代目大統領ジョン・クインシ・アダムスは國祖のそれと違つて、肉叉で食事をしたので、夫人は夫が氣がかりでならなかつたものか、お客があるに極つたやうに、

「御免遊ばせよ、宿はながく巴里に居ましたので、つい彼地の癖がつきましてね。」

と、言譯がましい事を言つたものだ。それが代變りになつて、七代目のアンドリュ・ジャクソンになるに、またワシントン並に肉刀で皿を啄つき出した。

越後の良寛上人が、ある時濃茶の席へ招かれて往つた事があつた。こんな場合にも無頓着だつた上人は、上客から茶碗を受取るに、一息になかの濃茶を口に含んでしまつた。だが、その一刹那自分の次ぎにも、まだ一人客のゐる事に氣が注いで、今飲んだばかりの茶を、また

茶碗のなかに吐き出して次に廻して来た。
 客は茶碗を受取つた。そして低聲で、
 「南無阿彌陀佛……」
 念佛を唱へながら、眼をつむつてぐつと一息に嘸み下した。客が何のためにお念佛を唱へたかは私の知つたことではない。

帽

子

皮肉屋のチエスタアトンは、大道のまん中で風に捉れた帽子を追つかけるのは、男子が全五を盡してやるべき眞面目な大業だと言つたが、世の中に帽子ほゞよく轉がり、帽子ほゞよく人の之間違へられるものはない。これを一番よく知つてゐるのは、京都大學の内田銀蔵博士で、博士はさうへ訪ねて往つても、自分の帽子を帽子掛けにかけた儘、物の一二分は屹度その前に立つて、釘の番號から恰好までちやんこ覺の込む迄は客間に通らうとはしない。——まことに結構な心掛だが、博士がそんなにまでして折角覺の込んだ帽子を、さうかすると相客が間違つ

てさつささ被つて往く事があるので、そんな時の博士の狼狽さ加減さいつたらない。
 アメリカのルウズヴェルト氏が、先日ある人の招待で大きなホテルの宴會に招かれて往つた。帽子掛のある室には、齡を取つた黒ん坊の爺さんが一人立つてゐて、來る人の來る人の帽子を、おいそれと無造作に預かつてくれた。お客のなかには相手が老人なのを氣遣つて、

「おい、爺さん、合札が無くつても、間違ひはないだらうな。」
 と駄目を押すのがあつた。そんな輩に限つて眞新しい流行の型のを被てゐるが、爺さんは唯一言。

「大丈夫でがすよ。」

返事をするに過ぎなかつた。

宴會が済んで、お客はぞろぞろ出て來た。そのなかに苦り切つたルウズヴェルト氏の顔も交つてゐた。黒ん坊の爺さんはル氏の顔を見るに、流行おくれの型の古い鍔の擦りきれた絹帽を取り出して手渡しした。食卓語は巧くやつて退けたし、加之に美味い七面鳥は食べたしするので、ル氏は顔に似合はず、その晩は上機嫌だつた。で、一言爺さんに調弄つてみた。

農夫の自慢

米國のダコタ在生れの農夫が、最近英國へ旅をした事があつた。農夫といふものは、蚯蚓のやうに土地にこびりついてゐるだけに、得て在所自慢をしたがるもので、この農夫もかねて顔配惡の英吉利の農夫を見ると、すぐに生れ故郷の自慢話もち出したものよ。

「斯う云つたつて、眞實にはさつしやるまいがね、俺達の耕地ちふのは、素晴しく大いもんでね……」とダコタ生れの農夫は厚い唇をもぐもぐさせながら言つた。「春の初めに鋤を入れかけて、畦を眞つ直に耕作を済ますのは、丁度秋のかりだよ。歸り途にはそろそろもう收穫をせんならん程作物が大きくなつてゐるだよ。」

「そんな事もがすでせうて。」と英吉利生れの農夫は態々落つき拂つて言つた。

「俺が友達が一人印度に居るだが、何でもその話によると、向うでは畑を抵當に借金をしようちふんで、持地をぐるり一廻り檢分して歸ると、もう借金の返済期になつてゐるので、いつ迄待つても金の借りやうが無ねちふ事だよ。ははは……」

二人は聲を揃へて笑つた。暫くすると、ダコタ生れの農夫は少し笑ひ過ぎたやうに急に眞面目な顔になつた。

「そんなら、はあ、丁度俺が娘聲の持地とおつつかつたど見ねるだね。」農夫は面を向ふ折には、こつびきく面當を言はないでは置かない同じ口で、自慢さうに娘聲の噂を始めた。

「俺が娘聲ちふのは、二週間前に結婚しただがね、その翌る朝馬車に乗つて牧場に出かけたもんだ。毎日毎晩持地のなかをこつ走つてやつと牧場に着いた頃には、もう子供二人が生れただだよ。」

英吉利の農夫は一寸頭へ手をやつた。そして何かそれにも負けないやうな法螺を考へてゐたらしかつたが、どうも考へつかないで、感心したやうに深い溜息をついた。——嘘のやうだ

が、これは近刊の英字雑誌に載つてゐる眞實の事實談である。

無題 二つ

一

古い希臘の言傳へに、アンタイオスといふ力士がある。が地面にくつ附いてゐるうち
は、どんな事があつても他人に力負けはしなかつたといふが、さすが希臘人だけに、地面と地面とを結びつけた解釋は偉いと言はなければならぬ。

リンカンといへは、氣難かしい顔をしてゐる癖に、戯談が大好きなので名高い政治家だが、あの時知合ひの國會議員が訪ねて來た時、あいにくと風邪をひき込んで、鼻をつまらせてゐた。議員が氣の毒さうに、

「お風邪ださうですね。この頃の寒さぢや全くやりきれませんからね。」
といふに

「全く遣りきれません。」とリンカンは貧乏揺ぎをしいしい、じつと自分の脚を見つめてゐたが、

暫くするに心もち片脚を持ちあげて客に見せつけた。「この寒さぢや、私は誰よりも先きに風邪を引くだらうと思つてゐたのです。何だつて、貴方こんな大きな脚でせう、地面にくつ着いてゐる所が人並よりすつと多いんですからね。」

世の中にはリンカンのやうに、臍が大きいので風邪をひく人があるかも知れないが、夫よりも多いのは禿頭から風邪をひく人である。だが、これは餘り大きい聲では言はない方がよい。さういふ人に限つて

「なに、私のは脚から來た風邪ですよ。」

と、リンカン並みに、圖外れた大きな臍を鼻先に突つけようかも知れないから。

二

最近匈牙利のブタベストで珍しい事件があつた。それはある寡婦さんが、自分に結婚を申し込んだ男を拒絶したから起きた事なので、男は當年取つて八十九歳の爺さんだつた。

爺さんは、寡婦さんのすけない返事が悲しいと言つて、心の臓が干葡萄酒のやうに萎びるまで悄氣きつてゐたが、さうと身體を悪くして死んでしまつた。爺さんの言ふのでは、此まで女に

申込むで、一度だつて跳ねつけられた事は無かつた。もしか今度の談がうまく纏まれば、恰も十五度目の結婚になる譯だつたのださうだ。
氣の毒な爺さんよ。失戀は爺さんにとつて綿入りの外套のやうに、少し目方が重過ぎたやうだ。

菓子を舂め過ぎて

亞米利加では方方で今盛に遣歐軍隊の訓練をやつてゐる。先日ポストンの市街を大勢の軍隊が業々しく練り歩いた。すると、兩側の家々の窓からは、國旗が數知らずさし出されて、拍手の音が嵐のやうに落ちて來た。

この時、市街を通りかかつた英吉利のある貴婦人があつた。ひさしい亞米利加嫌ひで、亞米利加のものさへ言へば、何一つ好い顔を見せなかつたが、その日も家々の窓からぶら下つた米國の國旗を見るに、すぐ顔を歪めた。そして憤憤して連の女をふり向いた。
「妾亞米利加の旗を見るに胸が悪くなつてよ。星だの、條だの、けばけばしいつたら有りや

しない、全で有平糖のお菓子のやうよ。」

婦人は恚う言つて、ほんとうに胃が悪くなつたやうに唇をかむた。

直ぐ側に立つてゐたのは、上院議員のロッヂ氏だつた。婦人の聲が餘り高かつたので、言つた事は筒ぬけにこの上院議員の耳に入つた。

「それはお氣の毒さまですね、奥さん。」ロッヂ氏は婦人の方にふり向いて叮嚀にお辭儀をした。「だが、胸が悪くおなりになるにふのは、貴方があまり有平糖をお舂め過ぎになつたからでせうよ。接吻位で御辛抱になつたらさうなものです。」

英國生れの貴婦人は眞赤になつて上院議員を睨めつけた。そして嫌ひな亞米利加でも、一番嫌ひな男でも思つたらしかつた。

武部源藏の裔

大和西大寺の南に、菅原神社といつて、天穂日命と野見宿禰と菅原道真とを一緒に祀つた社がある。そこに詣つた事のある人は、社の直ぐ前に、

武部源藏

「書いた大きな門札のかかった家を見掛けたに相違ない。幾ら見通さうたつて、迎も見通す車の出来ない程大きな門札である。」

宿の主人は、長い銀のやうな髻を持つた老人である。淨瑠璃の「寺小屋」で、源藏に近づきになつてゐる人達が偶に訪ねてゆくと、爺さんは長い髻を抜きながら色々な自慢話を始める。

「はい、私がお家の御覽の通り代々源藏を名乗つて居りますのや。」と爺さんは、文樂の人形芝居で見覺れた源藏のやうに、物を言ふ時極つて妙な肩の恰好をして見せる。「初代が那の通り道眞公にお仕へしたのを御縁に、今だにこないして菅原さんのお側に暮して居ますのや。」

ある時物誦りのお客が訪ねて来て、爺さんを相手に「寺小屋」の武部源藏は、ある淨瑠璃の作者が、同じ時代の江戸に武部源内といつた、名高い寺小屋の師匠があつたので、夫から思ひついたのでといふ事を話したものだ。すると、爺さんは長い髻を馬の尻尾のやうに激しく振つた。

「でも、夫は武部源内だすやろ。私ここは源藏だすよつてな。淨瑠璃の文句通りに……」

物誦りのお客は、爺さんの權幕を氣づかつた。首實檢の松王のやうに後から切り込まれて、詰らないと思つたのだ。で、幾らかお愛嬌のつもりで訊いてみた。

「夫では、お宅の一番古い御先祖は何と仰有いましたな。」

爺さんは急に得意になつて鼻を動かした。

「それが貴方一向判りよらなんだのを、先日わらい物誦の方がお來なはつて、其の方に承はると、何でも宅の先祖らふのは、竹田出雲たらいふ途方もない學者だしたさうな。恰も道眞公と同じ時代でな……」

お客は吹き出したくなるのを強て辛棒した。世の中には罪な事を教へる學者もあるものである。

花の香氣

「阿父さん、何だつて花には香氣があるの。」

むかしむかし、ずつとの往時、憊う言つて自分の父親に訊ねた子供があつた。父親はその時、世間の多くの親達と同じやうに、下らない事を考へてゐたか、それとも別に何も考へてゐなかつたか、子供に訊かれて初めて氣が注いだやうに、成程花には香氣があるわいと思つた。だが、おいそれと直には説明も出来かねたので、急に錢勘定でもしてゐるらしい、忙しさうな顔をした。「阿父さんでは、何だつて花には香氣があるの。」

子供は鼻を鳴らしながらまた訊き直した。父親は毀れかけた目覺し時計を扱ふやうに、懶らけた頭に矢鱈に螺旋をかけてみたが、その刹那花は酒や音楽と同じやうに、神様が人間を娛しませるために拵へられたものだといふ事に氣が注いだ。

「うむ、花の香氣か。」父親は大學者のやうに落ついた調子で言つた。「あれは人間を娛ませるために出来てゐるんだ。」

「さう。」と子供は一言言つたきり、そのまま押し黙つてしまつた。だが、父親の説明に満足してゐないのは其の顔色にも讀めた。多くの場合子供は父親の説明には満足しないものである。

子供はそれ以後「何だつて花には香氣があるのだらう。」と、一生懸命にそればかりを考へた。

そしていつの間にか大學者になつて、漸くその問題を解く事が出来た。

實をいふと、花の香氣は、いろんな昆蟲をそこに誘きよせて、その力でもつて花の生殖を果すために存在してゐるに過ぎないが、その學者が研究を仕遂げるまでは、世間の人達は何の爲めだとも解らなかつた。學者とは誰あらう、名高い植物學者クルト・スプレングルその人である。

數多い世間の親父よ、牛のやうに愚かな頭を持つた世間の親父よ、卿達がこんな説明をしやうと、多くの子供は夫に満足するものではない。そして其の不満足から素晴らしい發明と發見は生れるものである。

何故食物が高い？

米が高くなつた。何故こんなに米が高くなつたかを訊くと、農商務大臣は商賣人が善くないからだと言ひ、商賣人は農商務大臣が悪いからだと言つてゐる。事實はどちらも善くない上に、外に善くないものが幾つか一緒になつてゐるのだ。

米國でもこの頃食料品が高くなつたので、あつちこつちで頻に不平の聲が聞えてゐる。先日、前大統領タフト氏が田舎に旅行して、途中で道連になつた農夫を相手に、近頃農産物の値段が籠棒に高くなつた事を話して

「まるで以前の三倍もの値がするのだから遣りきれない。」

と呟いた事があつた。そして相手の農夫が値上げの張本人であるかのやうに凝とその顔を見つめた。顔は焼栗のやうに日に焦けてゐた。

農夫は象のやうな大きな團體のタフト氏を見返しながら、濟まなさうに頭を掻いた。實際食料品が恠う高くなつては、一番困るのは馬か、タフト氏かのさちらかに相違なかつた。

「でも、お前様、小麦が高くなつたのは、小麦自身が高くなつた譯ぢやござりませぬねだよ。」

農夫は言ひ譯がましく口を切つた。「あれはその、學問の値段が入つてゐるからでござります。今の時の農夫はお前様方と同じやうに、いろんな事を知らなくつちやなりませぬねわからの。」

「學問の値段といふこ——」

タフト氏は腑に落ちなさうに眉を擡めた。「そんなものが、何だつて小麦や馬鈴薯の値段に

影響して來るんだね。」

「だつて考へて御覽じませ。」農夫は節高な頑丈な手をタフト氏の鼻先で振まはした。「今の農夫は往時と違つて、自分達の畑から上る物の植物學とやらの名前を知らなくつちやなりませぬ。それから浮塵子や根切蟲だが、そんなねな無益物の昆蟲學とやらの名前も覺はなくつちやなりません。その上に肥料の化學的成分とやらも、すつかり頭に入れておかなくつちやなりませぬねのだからな。何だつてお前様、夫れにはみんな錢がかかりまするだよ。」

「さうか……」と言つて、タフト氏は解つたやうな、解らぬやうな顔をして、その儘黙つてしまつた。

齒と愛國と

米國は病氣治療法を發明する事にかけては、世界第一といつていい程色々の治療法に富んでゐる。そんな國柄だから、兵卒や水兵を徵集するにも、検査が一寸外の國の行き方は異つてゐる。

今度西部戦線へ派遣する軍隊を徴集するに就いて、ある軍醫が執つた方法は、一番風変わりなものだつた。軍醫は安全剃刀で剃りあげたばかりの綺麗な頭を撫でまはしながら、自分の前に立つてゐる一人の應募兵の顔を見た。

「お前身體は健康かね。」

「はい、健康でございます。」

應募兵は自慢さうに自分の胸を反らしてみせた。

軍醫は頤頤の邊に残つた剃り落しの髭を氣にしながら言つた。

「一體軍人に必要な健康とは、どんな事なのか知つてるかい。」

「勁い脚を有つてる事です。」

應募兵は自分が蝨のやうに勁い脚を持つてるのを見せるために、二三度靴の踵で地面を蹴つてみせた。

「違ふね。軍人の健康といふのはそんな物ぢやない。」

「ぢや、遠視の利く眼の事でせう。」

「それも違ふね。」

「ぢや頭のいい事でせう。」

「違ふよ。」

軍醫は其證據に餘り良くない自分の頭を掉つてみせた。

「それぢや、どんな事なんです。」

「いい齒を持つてる事だよ。」

軍醫は猿のやうな白い齒を露いてみせた。

この米國軍醫の説によるに兵卒は無論、いい脚と、いい眼と、いい頭とを持たなければならぬが、唯一ついい齒を持たないと食物を噛む事が出来ない。食物を噛む事が出来なければ、脚があり、眼があり、頭があつても、敵と戦ふ事が出来ないといふのだ。

それならば、兵卒にいい齒を持たせるには、どうしたら良いかといふのに、それには子供の時より齒に氣を注げさせなければならぬ。つまり母親といふ母親は、始終子供の齒に氣をつける事だけで、男の及ばない愛國的の事業を仕遂げる事が出来るといふのだ。